
WORLD OF WORLDS

レミングス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORLD OF WORLDS

【Nコード】

N5643F

【作者名】

レミングス

【あらすじ】

ルシファは普通の学生、のつもりだった。ある日までは。いつもと違うことが徐々に起こり始める日常だったはずの世界。その全てが崩れた今、全てを知るために彼は異世界の扉を開く。そして、過去自分の世界を滅ぼされた少年、恭介は復讐を胸に剣を取った。数々の世界が交錯する中、彼らが辿る『世界』とは。

プロローグ1 それはいつもの日常

「ほら、いつまで寝てる気？ 学校行く気ないわけ？」

ドアが開くと共に威勢のいい声が響いた。そして覇気の無い声が布団の中から。

「行く気はある。ただ後5分寝たい」

そんな彼の願いは瞬時に霧消する。何故なら、目を開けるとそこには修羅がいたから。

「今日がどんな日か分かってる？」

「怒るな。分かった、今起きるよ」

ここは彼、もとिल्シファ・L・イエルズの部屋。いまその彼を叩き起こしているのはライト・L・イエルズ要するに彼の妹である。

「まったく、肝心なときにいつもこれなんだから」

ライトの嫌味はいつものことだ。いつもこうして起こしにくるのはいいのだがもう少し起こし方に気を配って欲しいなあ、とは彼の本音。

「肝心っていつても、今日こんなに早く起きる必要は無いだろう？」
家を出るまで後2時間はある。

「馬鹿、こういう日は早く起きて完璧に身支度を整えるの。あんた、主役だっていう自覚あるの？」

「自覚はある。ただ」

続きを言う前に、張り手が飛んできた。

「やる気が無いんでしょ？」

「・・・よく分かるな」

「あんたのことだからね」

彼は苦笑して立ち上がるとぶつぶつ言いながら着替え始める。何を言っても勝てないのは昔からだ。

「フェイトは？」

「とつくの昔に起きて待ってる」

「さすが姉妹」

「あんたも一応同じ血入ってるはずなのにね」

「まっただな」

身支度を済ませ部屋から出ると少女の元気のいい声が響く。

「おはようお兄ちゃん」

「ああ、おはようフェイト。お前はこいつと違って優しいなああひ
おひかひうでよい」

「最後なんて言ったの？」

「な、何でも無い」

いくらなんでも急所に蹴りは無いだろう蹴りは。だがこちらの必死
の抗議の目線をあつさり無視し、彼女は妹に微笑みかける。

「おはよう、大丈夫？ いつもより早く起こしちゃってごめん」

「ううん、大丈夫。なんたって今日は」

と、急にこちらに振り返り満面の笑みで告げた。

「お兄ちゃんの誕生日だもん」

そう、今日は彼の誕生日だった。年齢不詳、両親不詳、出身地不詳、
おまけに本名まで不詳な自分をここまで育ててくれた両親に、彼は
ひたすら頭が下がるばかりだった。

「今日で18歳だね」

フェイトの声に彼は笑顔で頷く。本当の事をまだ彼女たちは知らない。
ライトが生まれる前に拾われて、その後ずっと一緒に暮らして
きた。誕生日も名前もその時付けられて今に至っている。

「心は2歳になったんだっけ？」

いつかこいつは完膚なきまでに叩きのめす。今は決して口には出せ
ないが、彼は密かにそう誓った。

「もう、お姉ちゃんいつも意地悪ばかり、とっても優しいのに」
腕にじゃれついてくる妹はともかわい。ああ、ここまで癒さ
れる、いや、この人生全てはきつと今この時を感じるためだけにあ
ったのだと言っても過言ではない。

「聞こえてるけど？」

「あまりの感動に口からつい、しかし妹、と同じ表記をしたとしても聞いている側はどっちが行動の主体か分かってくれるのは非常にありがたい」

「そりゃ結構なこと」

「今日は町まで出るんだよね？」

「フェイトの問いかけに彼は頷く。」

「ああ、夕食はレストランで、だそうだ」

自分のためにそこまでしなくても、と彼は一旦は辞退したのだが、

「私たちが祝いたいんだ。それとも、嫌かな？」

と父にそう言われては出席しない理由はどこにも無かった。

「悪いな。あまり街中に出るのは気が進まないだろう？」

「そんなことないよ。今から私すっごく楽しみ。ねえ？」

いきなり話を振られて驚いたのか、ライトはリビングのドアに思い切り頭をぶつけていた。

「おはよう、今日も賑やかなね」

キッチンから柔らかな声が響く。

「おはようございます、お母さん」

「おはよう、朝ごはん何？」

「つつ・・・お、おはよ」

三者三様の声に彼女はとても愛おしいものを見るような暖かな目線と共に三人に返事を返す。

「ちゃんと起きて偉い、今日はルシファの好きなフレンチトーストにしたの、あらあら、さっきのぶつけた音はライト？ 気を付けないきゃ」

「別に油断してた訳じゃ・・・」

そっついながら頭を抑える姿は滑稽を通り越して爽快ですらあった。
「父さんは？」

「もう仕事に行きました。でも、いつもより早く帰ってくるって言うてたから、心配しなくても大丈夫」

「別に心配はしてないよ、父さんのことだから」

昔から誕生日には敏感な父のことだ。恐らく、今年もとんでもないプレゼントと共に颯爽と帰ってくるのだろう。

「でも、最近お父さん変だよね？ 何かいつもより緊張感が漂ってるっていうか・・・」

フレンチトーストを頬張りながら、フェイトがおもむろに話し出す。「あんなに忙しそうなの見たこと無い」

ライトの言葉を聴きながら彼も考え込む。父から自分へ、仕事の内容を詳しく聞かされた事は無かった。尋ねた事は何度もあったが、それで分かったのは、どうやら国のとある機関でなにやら研究している、ということだけ。フェイトやライトに聞いても同様の知識しか得られず、母に至っては何も知らなかった。・・・まあ、そういうのを気にせず結婚するのが母らしいし、だからこそ本当の母じゃないと知らされてもこうして今も素直に母さんと呼べるのだろうか。「きつと、何かあったのよ、ここ最近ずっと遅いし。ほら、貴方たちは学校でしょ」

そう言われて時計を見ると、時空の歪みでも発生したのかも、登校時間となっていた。

「やばい、母さん弁当」

そう言った瞬間、ライトの雰囲気が変わった。どこかいつものライトのようなそうで無いようなそんな微妙な空気。

「今日は無し、自分で買って食べなさい」

それを振り払おうとするかのような母の声に、再び時間は流れだす。

「はいはい、今日は買ってことね」

何故かぎこちない笑顔が気になったが、そうそう構っていられる程の余裕は無い。慌てて朝食を腹の中に押し込み、脱兎のごとく家を出る。途中で小学生のフェイトとは分かれ、高校へと急ぐ。

「はい、ギリギリセーフ」

教室に駆け込むようにして入るといきなり後ろから声がかかる。

「うるさい、セーフに余裕もギリギリもあるか」

「野球なら確かにそうだが、ここは学校だ。余裕をもって登校して

くる生徒と、いつもいつもギリギリにならないと来ない生徒じゃ先生の印象だつて変わるさ」

「それは嫌味か？」

「いや事実だ」

嫌味嫌男、もといエリック。幼いころからの腐れ縁と言つかなんと言つか、小中高一貫性のため嫌でも顔を合わせている内に彼とはいつのまにかこんな仲になっていた。

「お前のせいで学校中の男共がうるさいんだぞ。いつもいつもフェイト様はお前のせいで、遅刻寸、前、だ、とな」

フェイト様、それがこの学校での彼女の立場だった。成績優秀、運動神経抜群、おまけに品行方正、誰に対しても平等で優しく料理も上手い、そして美人。それが彼の聞く彼女のうわさだった。

「知ったことか、全員現実を知らないだけだ」

「お前なあ、兄だからつてその言い草はどうかと思うが」

事実だから仕方が無い。大体勉強は毎日深夜まで彼が教えているからで、運動神経は彼女特有、というか家の血の伝統、品行方正、つまり性格がいいのはいざばれても味方を作っておくためであり、料理はいざという時一人でも生きていける様に、といったところでそれは彼女にとつて必要不可欠なステータスだった。最後の評価はどうにもコメントの仕様が無いが、少なくとも彼の中の美人の定義に彼女が入らないことだけは確かだった。まあ、彼らの目が節穴なのだろう。

「でも、ルシファだつて結構人気あるんだよ」

「俺なんかのどこに人気があるんだ？ エミル」

いつもの様に後ろから、というか何故いつも後ろからしか話しかけてこないのか、という疑問を押し込めつつ彼は振り返る。いるのは彼の中の美人の定義に入る数少ない人物の一人。彼は自分に気軽に話しかけてくるその性格と空に映える青色の髪が好きだった。

「成績優秀、運動神経抜群、までは確かに兄妹似てはいるが」

「何が言いたいかは分かる」

彼の評判は一言で言えば孤高、だった。他人とはめったに話さない。特に他者と積極的に混じろうともしなければ、一人でいるのを寂しがっている風でもない。他者から見れば、近寄りがたい雰囲気醸す彼と気軽に話せる人間は限られていた。

「でも、隠れファンは多いんだよ、今日もラブレターもらってたし」
「偶々だ」

下駄箱に紙の束が押し込まれているのは、彼から見れば滑稽以外の何物でもない。

「そんなこと言ってるから彼女の一人もできないんだよ」

「いらん」

「もう」

「やれやれ」

そんな二人のやり取りに溜息を付くエリック。

「席に着けー」

先生の声と共に始まるHRを聞きながら彼はぼんやり考えていた。一体、あいつは何を考えてる？ 実のところ、今日入っていた手紙の中には、いつもと違う名前が一つだけ入っていた。いつもは中身も読まずに捨てる封筒を開けると、そこにはこう書かれていた。

『今日、昼休み裏庭で待つてー ライト』

罰ゲームか？ それとも何か学校で言うておくことでもあるのだろうか？ というか今日は一緒に登校したのだ。手紙を入れたのは昨日？ ループする考えに引き摺られ、今日の彼は珍しく先生から注意を受ける失態を犯していた。

「おーいルシファ、飯食おうぜ」

昼休み、いつもの様に弁当を広げながら誘ってくるエリックに彼は手を合わせて謝罪の意を示した。

「悪い、今日は先約がある」

「へえ、珍しいねえ。私たちの誘いを断つてでも行かなきゃいけない相手？」

「ああ、もう蹴られるのはごめんだからな」

エミルのどこか不機嫌そうな声に笑みを返しながら答え、彼は裏庭への道を急ぐ。あいつのことだ、遅れたらとんでもない不吉な事が待っているようで……。

「……あしたは雪か？ それとも嵐か？ まさか隕石なんてことはいおあゝそゝふおあほば」

腹に強烈なパンチが飛んできた。

「いいから座って」

目の前にある弁当を未だもって懷疑そうな目で見る彼女に対し、彼女は自分の分をそそくさと開ける。

「……食べないの？」

「毒は入れて無いよな？」

「入れればよかった？」

「いや、まさか登校時間の二時間前に俺を起こしその前に全て弁当を作り終えなおかつそれを母さんにも俺にもフエイトにも悟らせずに今まで過ごしていたのかと思うとそれはそれで素直に驚くばかりだ」

「母さんには……少し手伝ってもらった、フエイトには……黙っとくように」

「なるほど、朝のあれはこれか。だったら普通に食堂にでも教室にでもラウンジにでも屋上にでも誘えばいい、何でこんな日当たり悪い所でせつかくの弁当を……」

「ほ、他に場所が無い」

「あるだろ、何を恥ずかしがってる」

「うるさい、食べるなら早く」

「はいはい」

意を決して目の前の弁当を開けると――

「まあまあだ」

「はいはいそれはよかった」

中々の見栄えと味、そして彼の予想がそのラインよりかなり低く設定されていた事も相まって、彼の中の評価は上々だった。エミル

の弁当より若干味は落ちるが、それを言ったら今度は冗談抜きで殺されそうなので止めておく。

「今分かった」

「何が？」

「お前がわざわざ裏庭に俺を呼んだわけ」

「えっ」

何故か動揺するライト、それに構わず彼はたった今思いついた事を話してゆく。

「ファンに追っかけまわれるからだな？」

彼女ほどの人気ならばそういう状況もあり得るのだろう。実際彼女は多様な人間と昼食を共にしているという話は聞いているし、ここならば確かに人が来る事はめったに無い。それから多分、他人とあまり干渉しない自分を思つての事だろう、と彼は解釈していた。

「はいはいそうですよ」

彼女の声に込められた感情に気づかず、彼はいつもの様にさつさと昼食をたいらげる。

「おいしかったよ。ありがとう」

「あ・・・」

そろそろ昼休みも終わるため立ち上がりとした彼に彼女が制するような声を挙げた。

「どうした？」

「また、作つたらー」

「その時は普通に呼んでくれ。食べるから」

「・・・分かった」

その時は、まだ信じていた。いや、明日起こることなど誰が想像できただろう。だから、この時彼は、明日も同じようにやってきて同じように過ぎると信じていた。

プロローグ2 崩れ始める『日常』

「はい、あげる。昼休みどこかギリギリまで帰ってこなかったし、それにこれから私部活だし、渡す暇今しかなさそうだから」

放課後、どこかたどたどしい口調でエミルがこちらに差し出してきたのは小さな小箱だった。

「ああ、ありがとう」

周囲の男からの視線を敢えて全て無視し、彼はそれを受け取った。

「はあ、まったく。お前は今どんなものを受け取っているのか自覚が無いのか」

エリックが彼の手の中的ものをまじまじと見ながら溜息を付く。

「あるよ、『エミル様』だったっけか？」

「違う、それは周りが勝手に」

「大事にするよ、罰があたらないように」

そう言っつて、彼が帰宅しようとする、出口には人だかりができていた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

沈黙する三人。

「・・・何、あれ？」

ルシファには何がなんだか分からない。

「まさかルシファへの誕生日プレゼント？」

「このやろう・・・」

「いや、それはありえない。大体俺にここまでおっぴらに来るやつなんて今まで・・・」

言っているうちに気づいた。

「ライト！」

そう言っつとドアの陰から出てくる人影が一つ。

「やっぱりな・・・」

「あ、あはははは」

「あははじゃない」

照れくさそうにして笑う彼女を横目に帰って行く観衆。

「ああ、なるほどね・・・」

横でエミルが納得したように頷く。いくらライトとはいえ、さすがにいつもここまでの取り巻きを引き連れているわけではない。なら何故こんなにも人が集まったのか、推測される理由はそんなに多くは無かった。

「へえ、お前の妹がこんなところに来るの初めて見た」

エリックがこんな感想を抱くのも無理は無い。何故なら彼女が自分から誰かに会いに行く、なんてことは今まで無かったからだ。そんな彼女が授業終了後、わざわざ上級生のクラスに向かう。それだけで興味をそえられる学生も多かっただろう・・・相手は残念ながら兄だったという落ちが付くわけだが。

「・・・全く」

彼はそのまま出口へと向かう。とある事情から彼は部活には入っていなかったし、どういうわけかライト、フェイトもそれは同様だった、となると彼女がこんな時間にここに来る理由は一つしかなかった。

「帰るぞ」

こちらに寄り添ってこようとした彼女に構わず彼は歩き出した。

「・・・うん」

教室から出て並んで歩き始める二人、それはそれで結構な絵になっていたが、二人の間に流れる空気は微妙なもの。

「・・・怒ってる？」

「当然だ」

その理由は全て彼に帰結していた。そもそも、学校で自分にはあまり関わらない様に前から言っていたのだ。それが今日の昼休みにこの放課後である。いくら今日が彼の誕生日であろうがなかるうが

そんな事は関係なかった。

「別に、二人でいたって何も・・・」

「そう言っていられる日がいつまでも続くと思っていたら大間違いだ」

帰り道、二人で歩くこの時間が一方にとってはとても嬉しく、一方にとっては苛立たしく。端から見ればカップルか、はたまた仲のよい兄妹かというほほえましい光景ではあった。

「・・・」

「・・・」

帰り道に一切会話が無いことを除けば。

「現在、我が国と交戦中のイレリ帝国との戦線はフリクム二から東へ53キロ、北に7キロの地点で・・・」

街頭に流れるニュースは、今も続く戦争の現状を映し出していた。

「終わらないね、戦争」

「・・・ああ」

2年前から始まったこの戦争は未だ拮抗状態を保ったまま、激しさを増していた。報告される死者の数は日に日に増え、壊滅した町の数ももう数えるのは止めにした。その影響で決して良好とは言えなかった国内でのイリアに対する感情は日に日に悪化し、もうそれは歯止めが利かなくなっていた。

「何で、こんな・・・」

燃やされる国旗を見ながらライトは寂しげに漏らす。

「嫌なら見なくていい」

いくら暮らしていた当時の記憶が無くても、祖国の旗が燃やされているのを見るのは誰だって嫌だろう。

「ごめん」

こちらに寄り添ってくる彼女を今度は受け止めた。祖国、というものを知らない彼には分からない感情が、今の彼女にはある。何となくその事実が腹立たしくて、彼はいつもより優しく告げた。

「大丈夫、いつか誰かに知られたって、俺はお前の味方でいてやる」

「本当？」

「ああ、もちろん」

「・・・ありがとう」

無論、本当に彼女と気持ちを分かりあえるわけではない。母さんや父さん、ライト、それにまだ事実を知らされていないフェイトと自分には見えない壁がある。もしかしたら自分はこの国の人間で明日からは敵同士、ということにもなりかねないのだ。両国の民族的な特徴に明確な差異はまだ認められていないものの、ライトとフェイトの様な金髪はどちらかというとイリア側に多く、この国の人間は彼と同じように黒髪の人間が半分ほどを占めていた。エミルのような青い髪は例外中の例外である。

「それでも、支えられるなら、支えたい」

彼は彼女にも聞こえないようにぼそりと呟いた。それだけが、今の彼の生きる理由だった。例え、その結果何を失おうとも。

「・・・お父さん、遅いね」

家に帰ってから数時間、フェイトが思い出したように読んでいた本から頭をあげた。

「確かに、これ以上遅くなるとレストランがね・・・」

「どうするお母さん？ 何ならもう家で適当に済ましてもいいよ」

彼は心配そうに時計を見る彼女にそう告げる。実際、誕生日など毎年来るのだ。別に今年くらいいどうなっただって構わない・・・と、そこで彼の考えは中断される。

「駄目！ そんなの」

ライトだ、宿題、及び勉強中は決まって彼の隣に座る彼女が珍しく大声を出していた。

「ライト？」

「駄目、折角の誕生日なのに・・・」

どこか必死さを感じさせる彼女の視線に気づいたのはさすが母親、といったところか

「待つて、お父さんに電話してくるから」

そう言つて席を立つた。戦時中であることから、一般人の携帯電話の使用は全面的に禁止されていたが、どういうわけか、彼らの父親は所持を許可されていた。

「どうしたのかな・・・お父さん」

「何、偶々道が混んできるとか、そんなだよ。多分」

彼はフェイトを元気付けようとする一方、自分の言葉をまるで信じていない自分に気づいて、慌ててその考えを振り払う。それに・・・と彼は隣に座る彼女を見る。様子がおかしいと言えば彼女もまた同様だった。どうにも今日の昼休み、いや朝から様子がおかしい。どこかいつもと違って、変に空回りしていた。

「ルシファ、今日はお父さん抜きでごめんなさいね」

「いいよ、忙しいんでしょ？」

「急に仕事が舞い込んで終わりそうに無い、ねえ」

「折角家族揃つて食べられると思ったのになあ」

三者三様の感想は少しの寂しさを伴って発せられる。

「仕方ない仕方ない、電話の向こうですまなそうにしてたし、今回は大目に見てあげて」

そう言われては、何も言い返せない。運ばれてくる料理を食べながら、それでも何となくここにいない存在がひどく気になって、普通に談笑している家族と笑いあう一方、彼はどこか釈然としない思いを抱き続けていた。そして、一つ目の異変は簡単に彼の前に現れる事になる。

「お母さん、どこまで行くの？」

とうとうフェイトが疑問の声を挙げた。レストランを出てから30分、本来の帰り道とは逆方向に歩き続け、辿り着いたのは周りに木が鬱蒼と生い茂る田舎道。フェイトでなくとも疑問の声をあげたくなる。

「もう少しだから、ね？」

しかし行けども行けども見えるのは先へと続く道ばかり、森の中と
いうこともあって、湧き上がる気持ちは不安一色。不安がる彼らを
横目に彼が目にしたのは一軒の古びた小屋だった。

「何、これ？」

フェイトの疑問に同調するように彼らは目の前で止まっている母に
目線をやる。

「今日はね、ここでお泊まり」

「はあ？」

素っ頓狂な声はライト、だが無理も無い。一晩ここで眠れと言われ
て、はいそうしますと答える人間は中々見つかりそうに無い。

「ごめんなさいね、どうしても今日はここにいて欲しいの」

「それは、絶対僕らに必要なこと？」

「ええルシファ。その通り」

数瞬の目線の邂逅を通して、彼は結論付けた。

「分かった、言われた通りにする」

「って、あんた何言って―」

「母さんは本当に真面目に言ってる。だったら、俺たちがとやかく
言う権利は無いよ」

「何でそんなにいい子なのよ・・・」

ライトの言葉を見無視して彼はフェイトに向き直る。

「ごめんな、狭そうだけど我慢しよう」

「うん、4人一緒に寝るなんて久しぶり」

だがそんな彼女の言葉は次の一言で吹き飛んだ。

「それなんだけど・・・私はここにはいられないの」

「えっ!？」

「ごめんなさい、でも必ず明日の朝、会いに来るから」

「母さん・・・」

向かい合う母の眼の中にあるのは申し訳なさ、後悔と、愛情と、
寂しさそして―。それらを総合するともう、明日訪れる現実は容易
に想像できた。

「その袋は？」

彼は努めて冷静に声を絞り出した。さつきから気になっていた、ただ外食するだけなら不必要な、袋。

「貴方に渡しておく、いや、貴方だから渡せる。中身は明日開けて」
「・・・分かった」

「それじゃ、行くから」

少しの間を置いて、彼女は振り返り歩き出す。

「お母さん！！ 明日また会えるんだよね？」

歩き出した彼女に、フェイトが今にも泣き出しそうな声で叫んだ。その声にどこか震えながら、それでも彼女は振り返り、母として暖かな声で告げた。

「ええ、もちろん」

「お母さん・・・」

ライトの声に彼はもう何の反応も返せなかった。ただそこにあるのは、先ほど渡された袋と、彼等三人。それだけだった。

「へえ、まあまあか？」

虎の穴へ飛び込む覚悟で入った小屋の中は虎の穴ほど危険に満ちていなければ、不潔でも無かった。これなら少しは寛げそうだ。

「ちよつと、ベッドが一つしかない。どうすんのよこれ？」

「お姉ちゃんが床で寝る」

「そついうあんたが下で寝なさい」

「やだ、お兄ちゃんと二人で寝るもん」

「何言つてんの！」

「お兄ちゃんと寝たいの？」

「そんなわけあるか！」

「じゃあ私とお兄ちゃんがベッド、お姉ちゃんはそのソファでどろぞろ」

「言わしておけば——」

少しは・・・寛げそうだ。

「分かった、俺がソファで寝るから、お前らベッドで——」

「絶対嫌！」

「・・・」

彼の提案は即時却下された。と、ここで一つ名案が浮かんだ。

「フェイト、お前俺と寝たいのか？」

「うん！」

と元氣な返事。

「ライト、お前ベッドがいいんだろ？」

「当たり前じゃない！」

ならば答えはもう一つしかない。

「フェイト一緒にソファで寝よう、毛布もあるし、ちと狭いがくつ
ついて寝りゃ寒くも無いし、丁度いい。ライトはベッド独占してい
いぞ」

「なっ」

何故か動揺を見せるライトと勝ち誇ったような笑みを浮かべ、そしてどこか意味深な視線を姉に送るフェイト。

「どうかしたか？」

「ううん、じゃあ、そうしー」

「待った！」

乗риかけたフェイトを何故か制止するライト。

「おいおい、何が不満なんだ？」

「そ、その今日は誕生日なんだから、ソファで寝かすって言うのも
どうかと思う」

ほう、たまには兄思いな事を言う。

「それで？」

「だからベッド枠は一つはもう確定で、後の一つを――
ここで意外な声が横から響いた。

「じゃあお兄ちゃんとお姉ちゃんベッドで寝ていいよ」

「えっ」

「いいのか？」

「うん、私小さいからソファでも全然平気」

何故か勝ち誇った笑みは益々増大し、今やその笑みは気味の悪いものとなっていた。一体、何がそんなに嬉しいのか。そして隣で固まっている馬鹿一名。

「まあ、そりゃ有難いが・・・」

「ね？　これが私からの誕生日プレゼント。お姉ちゃんもいいよね」

「そこまでいわれると、仕様が無いな」

「ま、まあ別にいいけど」

だから何故お前はそこで俯くんだ、ライト。と思いつつ、彼は寝るための準備に取り掛かる。

「あんまり動くなよ、そんなに広いわけでもない」

「わ、分かってる」

風呂も無かったので適当にタオルで体を拭く程度にして、彼等は早々と就寝していた。

「耳栓して置くから何があってもきこえないきこえない」

何故が高らかにそう宣言してから眠りについたフェイトと固まるライト。頼むから今の状況を冷静に考えてくれ、冷静に。

「こんなの、久しぶり」

「ああ、まだ小さい頃はよく寝たもんだが」

ベッドに入り、間もなく聞こえてきた背中越しに響いてくる声は少し寂しげな声。もしかしたら、彼女にも、いやフェイトすら分かっているのかもしれない。だから、殊更あんな元気な声を出す。素直に不安をこちらに向けてくれればいいのに、と彼女たちの思いやりを嬉しく思う一方で、どこか寂しくもあったり。

「どうしたの？」

「いや、そういえば、なんでお前、俺の事兄さんって呼ばないんだ？」

気分をほぐす為、何気なく発した質問は、何故か彼女を凍りつかせていた。

「おーい？」

「な、別に理由なんて」

「でも物心付いてからずっとだぞ。おかしくないか？」

「おかしくない！」

「そんなものなのか」

「そう、そんなもの」

そこから舞い落ちるのは沈黙。穏やかな空気の中、もう寝ようとした彼に彼女はそつと体の向きを変えた。

「いつでも、味方、なんだよね？」

彼の体を包み込むようにしてきた彼女の腕を取り、彼は答えた。

「ああ、もちろん」

「だよね、いつも私の、味方」

そのままこちらに顔を埋める彼女の腕を取り、彼等は眠りについた。

プロローグ3 『日常の』中で

朝、目覚めるとそこには見慣れない天井。すぐに状況を理解し、起き上がるうとすると、自分を掴んでいる手に気づいた。それに微笑んで、彼はその腕を掴んだ。

「ありがとう、一人だったら、泣いてたかもな」

そのままベッドから降り、フェイトの方へ向かうと、やはり存在しない耳栓と、涙の跡が一筋。

「何であんなに無理したのやら・・・」

そう思っただけはそのままフェイトを抱き締めながら、予想外の心地よさに、意図せぬ眠りに付く事になった。

「何してるの？」

「え？」

「何してるの？」

「さあ」

「夜這い？」

修羅がいた。いや、夜叉かじゃおおしふぁhp@ac.j@:あ。

「さて、と今何時？」

「6時」

すっかり目を覚ましたライトがこちらに問いかけて来る。正直、目がまだ怖い。

「うーん、よく寝た」

「さて、これからどうするか、だな」

「あの袋は？」

彼女の視線の先にあるのは昨晚彼女から渡された袋が一つ。

「あれ・・・か」

「気が進まないの？」

「何となく」

「お母さん、もう」

「会うことは、ないだろうな」

それが、彼等の共通認識だった。あそこまでの覚悟と決意、そしてこの状況。何が何だか分からないが恐らくはそういうことだろう。

「家には・・・」

「どうだろう、開けてみよう。全てはそこからだ」

彼は袋の紐を解き、中身を床に出した。

「何、これ・・・？」

「聞くな」

開けてみるとそこには家のありったけのお金と、パスポートに保険証、携帯電話、軍のIDカード、1着の軍服。はつきりいつて、何が何だかさっぱりだった。

「何で、え？これ何？」

「ひとつ分かったな」

彼は振り返り告げた。

「もう家には帰れそうも無い」

しばしの沈黙の後、口を開いたのはライトの方だった。

「ばれたのかな、私たちがイリア人だって」

「どうかな、だったら何でばれた事を母さんは俺たちに告げない？」

「お前も俺も知ってるんだから。」

「けど」

「ばれただけじゃ強制送還か、強制労働かだろうけど、入ってるものは持つただけで死ねるものばかりだ。この国の国民が持つてたって死刑もの」

大体、入っている金額も問題だった。これだけあれば三人が普通に生活しても、3年はもつ。と、ライトが目線を転じてあるものを指差した。

「その携帯で誰かと連絡付かない？ お母さんが何かメモを残しているかもしれないし」

「いい考えだ」

早速、彼は携帯のアドレス帳を開く、登録されていた電話番号は一件、誰だ？ とその名前を見た途端彼は固まっていた。

「誰の番号？」

と、彼から携帯を取った彼女もまた固まった。

「何で？」

「だから聞くな」

そこにはこう表示されていた。エミル・ミア・フルシュ、と。

「エミルかよ・・・」

以外にも彼の驚きはライト程ではなかった。何故なら彼女の正体については以前聞かされていた為、驚く心の中でどこかで納得し、安心している自分がいることもまた事実だったからだ。

「何でエミルさんが？ だってあの人・・・」

「まあ、世間一般に知られているイメージはお前を若干大人しくした感じではあるが」

成績優秀、運動もまあ人並み以上、ざつくばらんな性格も相まって、ライトが入学する前は『様』がつく人間と言えば、エミルだった。

「ただな」

「何？」

自分が過去、彼女からそれを告げられたときの事を思い出しながら彼は言った。

「あいつもイリア人だ」

「えっ？」

「同じだな、お前と」

「ちよつと待つて。あの人も、私と？」

その驚きぶりは自分が聞いた時とあまり変わらないものだったが、今ではもう彼はある種の答えを得ていた。

「自分がイリア人だと自覚してる人間はどういう行動に出る？」

「あ・・・」

そう、怪しまれれば終わり、敵を作ったら終わり、もし噂が立つても、それを皆が笑い話で済ませてくれる様に、と考えは発展する。

早い話が、自分がその社会の中で一つの柱になろうとするのだ。だから、彼が知っているイリア人は皆そう振る舞っていたし、ライトもエミルもその中の例に違わず入っていた。実は他にもまだいるのだが、何故それを自分に告げるのか彼には全く分からなかった。同じ人種だから、と言う理由なら自分よりも寧ろライトの方が適任だし、彼女の校内における力は既にトップクラスだった。

「だから彼女は少なくとも敵じゃない。それだけは信じていい」

「・・・うん」

彼女の番号から察するに恐らく携帯電話、それも軍事用の。かければ何が起こるかは分からなかったが、不思議と恐怖は無かった。

「掛けるぞ」

「・・・うん」

彼等は意を決してそのボタンを、押した。

「ふう、ここまでこれば大丈夫」

「おいおいおいおい」

「どうしたのルシファ？ 怖気づいちゃった？」

「いや・・・」

電話すると直ぐに、『居場所特定したから直ぐに切つて』との声。慌ててそれに従うとその3分後には車が迎えに来て、その中から出てきた人達に促されるままそれに乗った。そして、その中にいたのは・・・エミルだった。

「しゅごーい、初めて乗ったー」

「車初めて？ 珍しいね」

起きたばかりのフェイトは未知の領域に興味津々、片やライトはどこか落ち着かない。

「どこに向かっているんだ？」

「秘密」

そして肝心のエミルはずっとこの調子で、彼は未だにこの状況が飲み込めていなかった。そもそも、こちらを待っていたとは思えないタイミング、しかももう始業時間は目前に迫っているにもかかわ

らず、車は彼らが見たことも無い道を走っていた。

「お待たせ」

その後一時間ほど走っただろうか、無言の時間を走りぬけた車はあるビルの前に停まった。

「ここ？」

エミルに尋ねようと振り向いたとき、異変に気付いた。フェイトとライトの姿が消えている。どこ行っただ？という彼の疑問を遮るかのように袋が差し出された。

「まずはこの中にある服に着替えて」

「なっ……」

「終わったら私の所に来て。部屋は2階の三号室」

有無を言わずとはこの事だろうか、案内されるがままに更衣室へ通され、着替えてからそのまま連行されるかのように、彼は三号室の前に立っていた。

「とりあえず、これ読んで」

入って一声、彼女に投げつけられたのは、封筒。

「これは？」

「さあ、読んでみたら？」

帰ってくるのは素っ気無い返事。ここに連れてきた人達に何を言っても無駄なのは先ほどまでの時間で分かっていたため、彼は黙って封筒を開ける。

「手紙か……」

差出人は父親、その中身はこうにして書いてあった。

『この手紙を読んでいると言う事は、お前は歩き出したと言うことだ。』

ろくに面倒も見やれず、可哀想な思いもさせてきたが、親孝行と思つて

最後まで読んでくれ。

連絡するのはこれで終わりだ。お前は軍に入って、立派に働いてくれ。

留守にしていって済まなかったが、誕生日はまた、二人できちんと祝おう。

人間、生きていれば、時として迷う事もあるし、お前のようにいきなり

現実が立ちふさがる人もいる。どうか挫けず彼女の元で頑張つて欲しい。

ろくにわがままも聞いてもらえず、こんな手紙しか渡せないが、頑張つて 欲しい。息子へ、父より』

「どう？ 驚いた？ 実は君には」

「すまないが、トイレはどこだ？」

「え？」

「実は長時間慣れない乗り物に乗り続けた挙句、こんな所にいきなり放り込まれて軍に入れと来ては、緊張してしまつてね、すまない」

「ああ、部屋を出て右の突き当たりだ」

「ありがとう」

彼は全身の汗が噴出しそうになるのを必死でこらえ、何気ない風を装つて、トイレに入った。

「な・・・にが・・・いつ・・・たい・・・」

胸の動悸を抑え切れない。瞬きが早くなり、喉がからからに乾く。全ては昨日の母との別れ際の視線の意味と、今の手紙のせいだった。逃げて、確かに昨日彼女は眼にはつきりとその意を込めて、彼に送つてきた。最初は、それはイリア人ということがばれたから、軍から逃げる、という意味だと思った。だが、今手元にある手紙、昔スパイごつこと称して父と遊んだ経験が生きた。不自然な改行、不自然な文章、軍が気付かなかつたのはチェックしていないからか、相当の馬鹿か、遊び心を知らないか、彼にとっては何れでもよかったが、問題は込められているメッセージだった。こ、ろ、最、連、留、人、現、ろ。各行の最初の文を抽出し、変換。出てくる言葉は『殺される、逃げる』つまり昨日の母からの視線と何ら意味的には変わらない。

「けれど、何から逃げれば」

言いかけた瞬間後ろから視線を感じた。

「気付いちやった？」

「だ・・・れ・・・？」

聞かずとも分かった、何故ならそれは毎日当たり前のように聞いていた声、ただ、嘘みたいにしてその声は冷たかった。

「お兄ちゃん、ごめんね」

「フエイト！」

後ろからいきなり現れてきた妹をとっさにかわし、トイレから出る。

「おい、お前！」

聞こえてくる声は全て無視し、一階への階段を駆け下りる。

「ああ、もう段取りがめちゃくちゃだ」

「エミル！？」

「ああ、警戒し無くてもいいから」

いつの間にか隣を併走しているエミル。一体どうしたことなのか、と尋ねようとする

彼の前に現れたのは、ライト。

「言ったよね、味方だって。どんなことがあっても味方だって」

「ライト・・・」

泣きながらこちらに歩み寄ろうとする彼の目の前で、エミルは信じられない言葉と共に、銃を突き付けた。

「黙れプログラム、それ以上近づいたら、撃つ」

「は？ エミル何言って・・・」

「止まれと言っている。命令だ」

その言葉を聞いてライトはようやくその歩みを止める。

「ねえ、味方なんだよね。私の、私だけの・・・」

彼女は壊れた人形のように同じ言葉を繰り返すだけ。と、ふとその表情が変化する。

「そうだよ・・・味方なんだよ。一緒なんだもん、家族なんだもん。だって、だって家族——」

言葉は唐突に途切れ、彼が次に彼女を見たとき、頭に穴が開いていた。そう文字通り

血も出ず、見えるのはコードや、ICチップ。そこから見える内部は、明らかに通常の人間とは一線を画していた。

「行こう」

「ちよつと・・・」

「死にたい？」

妹をここに置いて行く事に躊躇する彼に彼女は冷たく言い放ち、そのまま彼の腕を取り走り出す。

「撃つたのか？」

「死にはしないさ、生きても無いし」

「だから、一体―」

「後で話す、実はそんなに時間があるわけでもない」

「いや、だからどこに走って―」

「あそこ」

彼女が指差したのは先ほどまで乗っていた車、いつのまにか運転席には先ほどまで部屋の見張りをしていた男が座っている。

「早く!!」

彼女の声と共に、勢いよく走り出す車。これで大丈夫だろう、と思いを外を見たエミルの眼に飛び込んできたのは、気味の悪い笑みを浮かべながら併走するフェイトの姿だった。

「フェイト!」

ルシファが驚きの声を上げるが、正直他二名にとっては悲鳴でもあげたい気分だった。

「くそ!」

彼女は勢いよくドアを開き、躊躇無く引き金を引く。だが数瞬前までそこにいたはずの存在はいとも簡単に銃弾をかわす。

「化け物が!」

隣の男が悪態を付きながら車を彼女の方に寄せるが、今度は車の上に飛び移られ逆にピンチに陥っていた。

「あはははははははははははははははは」

高らかに笑い声を挙げながら、天井部に素手で穴を開けるフェイト。後部座席に座っていたルシファと目があつたその瞬間、ニターと微笑む妹だった物を見た。

「伏せろ！」

どこから取り出したのか彼女の方を見るとそこにあるのはグレネード。慌てて頭を下げる彼に対し不思議そうにそれを見つめるフェイト。

「新型だ。まだこの兵器は認識できないだろう？」

次の瞬間、彼の耳に響いたのは何かが炸裂、命中、そして弾ける音、あまりの衝撃に意識が遠のく中、最後に見たのは、フェイトの頭部だった。

プロローグ4 『日常』と嘘の交錯

ねえ、お兄ちゃんって、どんな色が好き？」

「なんだよいきなり」

「答えてよー」

それはまだフェイトが小学生に入る前の頃、彼もライトもまだ何も知らされていなくて、戦争も無くて、ただ家族で普通に暮らしていただけの頃。こうしてたまに近くの公園にピクニックに来たりするのも、悪くは無かった。

「そうだなー」

「何々？」

彼はそつと金色の髪を取った。

「この色かな」

「な、あんたそりやただのナンパ」

「うるさい、折角二人の世界を満喫してたのに」

いつもフェイトには何かしら聞かれていた気がする。それは大概が他愛ない話ばかりで、時には鋭い事を言うかと思ったら、やっぱり中身はまだまだ子供で、大きくなったらどんな風になるんだろうって、よく父さんと話してたような・・・。

「ルシファ！」

突然の声に目が覚めた。周りを見渡すと簡素な部屋のベッドに彼は横たわっていた。

「ここは？」

「まあ、私達の秘密基地かな？」

目覚めた事に安心したのか少し笑みを浮かべながら、彼女は今の状況をてきぱきと説明し始める。今ここはイリアとの国境付近であること、ここはある施設の一部屋でもうすぐ責任者が来る事、自分はその下で活動していること。

「軍人じゃなかったのか？」

「軍人だよ、ただ仕える対象は国じゃないけどね」

「じゃあ、何に――」

言いかけた途端扉が開いた。現れたのは褐色の肌に銀色の髪を持つ男性に、全身を鎧で包んだ詳細不明の何か、そして真ん中に立っているのは――

「ご紹介します。こちら――」

エミルの声を遮るようにして凜とした声が響いた。

「セイバーだ」

「・・・」

金色の髪を後ろにまとめ、鎧を纏う女剣士。それが彼が抱いた彼女の第一印象だった。

「隊長さん、意気込んで話すのはいいが、それだけじゃこの坊やちゃんぶんかんぶん」

「同意」

「あの、セイバー様、説明は私がしますから」

と、横から三者三様の声が響く。外見と口調が簡単にリンクしてくれるのはありがたいが、確かに彼にとってこの状況はまさにちんぷんかんぷんだった。

「えーと、こちらの女性はセイバー様、独立治安維持部隊『L I G H T S』のリーダーを務めておられる方で、こちらの男性の名前はランスロット様、その隣の鎧の方はボルク様、お二方ともセイバー様の補佐をなさっています」

「独立、治安・・・維持部隊？」

「ま、勝手に周りが付けた名前だけだな」

不思議そうに名前を繰り返す彼にランスロットは笑みを浮かべる。

「名前から察するに、どこの国にも属さず、各地域の戦争や紛争を止めたりするのが主な活動？」

「そう、但至少スケールが違う」

「スケール？」

「我等は、どの世界にも属さず、各世界の調停を行っている」

「表に出ないように、あんまりその世界に干渉すると厄介な事になるし」

エミルの言葉を引き継ぐようにしてセイバーとランスロットが補足を加える。

「世界って・・・」

「今、ここにある世界も数多くある世界の一つ。君が何でこんな風な扱いをこの国の軍から受けているか分からないけど、ひとつ言えるのは――」

「お前は我等から見ても最重要人物の一人だ」

「・・・ということ」

「最重要人物？」

「お前の周りには何故か変なのがうじゃうじゃしてな、どうにも様子がおかしいって言うんで、エミル他数名をこの世界に派遣したんだよ」

「ランスロットさん・・・でしたよね？」

「おう」

色々聞きたい事はあったが、とりあえず一番聞きたいことはこれだった。

「ライトとフェイトのことなんですが」

「・・・長くなるぞ」

「構いません」

一つ、息を吸って彼は話し始めた。そもそも、彼等がこの世界の異変に気付いたのは18年前の事。始まりは、この国がイリア帝国に宣戦布告のための準備を始めた事に起因する。この世界には本来特殊能力を持つ生物は存在しないにも関わらず、何故かこの時点で僅かな力の反応が感じられていたのだ。

「最初は世界を渡れるどっかの誰かだと思ってほうっておいた。ただな・・・」

その力は世界を渡るには小さすぎた。かといってそれを放って置く

にはその力は強すぎ

た。いつこの力が強大化して自らの世界を滅ぼすか分かったものではないからだ。そこでLIGHTSはこの国にエミル他数名を派遣し、その力がどういった類のものか見極めようとしたが、問題はそこで発生した。

「力の出所が分かんなかったんだよ」

力の反応があるにも関わらず、力を持つものは存在しない。長い間彼等を悩ませた矛盾は、ある日突然氷解する事になる。

「何で戦争が互角のまま推移してるのか？という疑問からスタートして、直ぐに答えに辿り着いた」

「互角じゃ駄目なんですか？」

ルシファがここで初めて口を開いた。現に戦争は互角で推移していると報道されているし、両国の力関係も拮抗していたはずだ。長期戦になる事は前々から予想されていた。

「駄目だな。俺たちはこの戦争は長くても半年で決着が付くと予想してた」

「半年！？　いくら何でも短すぎる！」

「ところが、この国にとってそれは十分な時間だった」

「何故？」

「それは最初の疑問に答える事になるな」

「・・・フェイトと、ライト・・・」

「見たはずだ、あれは人間じゃない。現在調査中だが、ありゃアンドロイドかサイボーグかえーと・・・まあ、そういう類のものだ」

「でも二人だけじゃいくらなんでも」

「現在確認できている同一固体は5体」

「なっ・・・」

「そりゃ出所が分からんのも当たり前だった。ただの機械じゃ俺たちはどうしようもない」

彼らが感知できるのは、あくまで力の反応であり、機械が何をしようとか彼らではどうしようもなかった。

「機械って、だって二人ともちゃんと食べて寝て大きくなって、感情があつて――」

「熱くなるな、そんな事は分かってるし、ちゃんと調べてる、エミル」

「はい、彼女たちと同じ固体から、今まで分かった結果をまとめますと、どうやら一般生活を送るにあたっては特に普通の人間との違いはありません。ただ、あらかじめ脳は人工的に作られていたのをそのまま入れていたようですし、恐らく・・・機械そのものが成長してるんじゃないかと」

「そんな技術がこの国に・・・？」

「そこで注目されたのが最初の力の反応」

「誰かが入れ知恵でも？　けれどさっき世界を渡るには力が弱すぎる――」

「俺たちに気にされないほどの気配しか見せずに他の世界へ移動することが出来る存在ってのは結構いる。ただ、そこまでのクラスとなるとこっちも容易には手が出せない」

「じゃあ、フェイトやライトを作ったのって・・・」

「そいつ、かもな」

「かつて無いほどの怒りが満ちるのが分かる。ただ、これで全てが分かったわけではない。」

「では、私の存在にはどんな価値があるんですか？　今聞いた話しが本当なら――」

「分かん、話を聞こうにもお前の両親は行方不明、製造してた工場は既に閉鎖、別件で忙しかった事もあって、俺たちがここに来れたのはほんの2日前だったからな。初動捜査が遅れた、というのは事実だ。厄介な事にならない様祈るばかりだな」

「それで、これからどうするんですか？」

「ここで彼はいたずらっ子のような顔になってざらりと言った。

「軍のトップに乗り込む」

「はあ？」

「大丈夫、俺たち強いから」

「いや、理由になつて――」

「いいから来い」

そしてそのまま引つ張られるようにして彼は、今、防衛省の目の前に立っていた。

結局事情はまだよく飲み込めていない。そもそも、こんな切羽詰った状況になるまで動かなかった彼等もそうだし、エミルの活動内容もよく分らない。18年前と言えばまだ生まれたてで、そんな状態で派遣されても何もできはしないだろう。イリア人と言う事にしておらずに、最初からこの国の国籍にしておけば変に隠れる事はないし、その時工場なり両親なり調べておけば自分はこんな思いをせずにすんだし――。

つまるところ、彼は自分の置かれた立場をこの時何も理解していなかった。

「え？」

あつけなかった、それもこれも全部。軍のトップとして毎日ニュースで戦意高揚を訴えていたはずの指揮官はセイバーの顔を見るやいなや震え上がり、ある事無い事全て話しだした。どうだ、という顔をランスロットにされるがどう反応すればいいか、こちらは全然分からない。

30分ほどで彼の話は終わり、戦争はあつけなく終わりそうだった。その事情はあまりの下らなさにLIGHTSのトップ三名が溜息を付くほどの物で、フェイト達の事に関しては何も知らなかった。つまり、彼等が見つけた5体のそれは機能を果たしていなかったということだ。本当にただの人として暮らしていただけのようで、何でわざわざ彼女たちに限ってこんなことが起きたのか、そして母さんの行動の意味も、父さんの手紙の意味も、自分が何なのかも、何も分からなかった。

「なあ、エミル。質問がある」

帰りの車内、彼は隣で運転する彼女に今日の疑問を問い詰めてみよ

うと口を開いた。

「いいよ、何？」

「お前、本当は年いくつだ？」

彼女は本当に感心したように声を弾ませる。

「よく気付いたね、いくつだと思う？」

「500歳」

「そこまでおばさんじゃないよ」

500年が彼女たちにとってどれくらいの長さとなるのか想像もつかなかったが、考えているうちにそれなりの推測はできていた。大体、彼女だけでなく今日来たセイバーもランスロットも、運転していたあの男も、見かけは若かった。なのに18年前という単語がさうとでてくるのだ。どう考えても寿命がこの世界の住民とは違う。他には？」

「あんたらはまだ、俺に何か隠してる」

「何で？」

「LIGHSとやらがどれだけの組織か知らないが、本当に全世界を管轄に入れているのだとしたら、そう簡単にトップが来るわけが無い。幹部クラスはいっぱいいるんだろう？」

「でも、緊急に備えて来たと言う事も」

「無いな」

「どうして？」

「緊張感が無さ過ぎる。彼等が今日した事と言えば、無闇に俺を連れまわした、と言う事だけ。大体エミル、お前なんで最初から俺をその組織の施設に連れて行かなかった？ あそこならフェイトもライトも暴走したところであの人たちが取り押さえてくれただろう？」

「いや、多分切り捨てたと思う。ああなったら彼等は容赦が無いから」

彼女は車を止め、こちらに向き直る。

「ルシファ、正直私はまだこの組織に入って長くない。中には彼等を神のように信奉しているものもいれば、疎んじているものもいる。

それは組織内外を問わない。それに君以上の情報を私は持ってないんだ。何故あんな所に連れて行かないやなかったのか、私には分からない。信じるべきは自分、だよ」

「自分・・・か。誰なんだろうな、俺は？」

「それも分からない。ただ、この国の住民でもなければ、イリア帝国の住民でもない。他の小国の住民の血統パターンも見えてみたけど、該当するものは無かった。もしかしたら、ルシファも違う世界から来たのかもね」

「馬鹿いうな」

「全くだ、降りよう。折角君と二人でお泊まりできるんだから」
一瞬、時が止まった。

「はあああああああああああああ？」

「大丈夫、優しくしてあげるよ」

「何をだよ！」

その時、そんな彼等を見つめる影が、ゆっくりと動き出していた。

「久しぶり、っていつでも昨日会ったけど」

「エリック！？」

彼女に導かれるまま部屋に入ると、誰かの影が見えた。隠れて、と目で告げる彼女に従い、後ずさるうとした瞬間、後ろから誰かに押さえ込まれた。まずい、と思って必死で振りほどくと、見えた顔は馴染み深いものだった。

「もう、本当に驚いた」

「悪ふざけは学校だけにしてくれ、さすがにもう疲れた」

「はは、今日学校に来なかっただろ？ お前にしちゃあ珍しいと思うってお前の家行ったら」

誰もいないし、エミルも休みだったからついでと思って行っただけだ、あれ？ お前家いなかったのか？」

「どういうこと？ 私風邪引いて、病院に今まで行って来たところなんでけど・・・」

「そんなことより、こいつが勝手にお前の部屋に入ってた事の方が

問題だらうけどな」

するとエリックは彼に弁明口調でまくしたてる。

「ち、違う。ちゃんとチャイムは鳴らした。それで中から入っていいよ、って許可が下りたから入ったんだ。無断で入るなんてそんな事俺はしない！」

「どうだかな」

「お前なあ！」

「でも、わざわざありがとう。うれしいよ」

「なあに、こつちも色々感謝してるからおあいこだ」

そう言つて、何故かこちらに意味ありげな目線を送ってきたが何の事だかさっぱり分らない。

「お前、よくエミルの家知つてたな？」

ここがエミルの家だなんて知られたら、男共が殺到しそうなものではあるが、学校でそんな噂を聞いた事はなかった。

「知らないお前が寧ろ少数派なんだよ」

「は？」

「ルシファってほんと他人のプライベートに全く踏み込まないよね」

「そんなに有名なのか？」

「いつも誘つてるのにお前は来ねえじゃん。普通に外で遊ぶときはノリがいいのに」

「そうだったか？」

他人の家に行くなんてここ数年、というより出生に関して言われてからは確かに彼は他者との干渉を避けていた。それは、妹の事を思つてと言つよりは、他者と深い関係になる事を避け続けてきた結果だった。

「少なくとも、クラスの半分くらいはご招待してるよ」

「そして、今日初めてお前が来た、ということにしておいてやろう」

「ということにしておく？ おいそれはどういう意味——」

「皆までいうな。邪魔者はここらで退散するから。二人とも元気そうで何より」

「うん、ありがとう」

「おいエミル！ 何か俺たち誤解されて―」

「何言ってるんだ？ 風邪で休んだ彼女に付き添って一緒に病院に行った拳句、看病してやろうと一緒に帰ってきた微笑ましい図だろ」
そう言つて、さつさと立ち上がり、出て行こうとするエリック。エミルが下まで送ろうと言つて立ち上がっていったのを見送り、彼は今日何度目とも知れない溜息をついた。

彼が部屋で一人いる頃、エミルはエリックと共に屋上にいた。

「エミル、何でわざわざ自分の部屋に彼を入れた？」

「そ、それは」

「規約違反だ。それも重度の」

そこには先ほどまでの友人としての雰囲気は吹き飛んでいた。

「彼は―」

「あいつが何であれ、その処遇は上が決めることだ。俺たちがどうこうしていい問題じゃない」

「だって、このままじゃ・・・」

既に、彼女は目の前の現実を直視できていなかった。最初は純粹に使命感から、この任務をこなすことだけを考えていた、が、その任務での出会いが、彼女の最大の誤算だった。

「あいつがこの先進める道は三つだ。俺たちに従つか、誰かの思惑通りになるか、俺たちに殺されるか」

「殺すつて」

「平和は犠牲の上に虚構として成り立つものだ。お前があいつのこゝと本気で好きになろうがどうだろうと、命令が下れば」

彼女を見るその目は、何の温かさも宿してはいなかった。

「殺す」

「い・・・嫌だ！ まだそうだと決まったわけじゃない！」

それはもう、単純な感情論だった。

「今日はこれで帰る。今日の件に関しては見逃してやるが、二度目はない」

「エリック！」

彼女が前を見た時、もう彼の姿はどこにも無かった。

「だって、もう・・・」

いつも好きで眺めていたはずの夕焼けも、今日ばかりは彼女には何の感動も与えてはくれなかった。

プロローグ5 閉ざされる『日常』

「遅かったな」

「う、うん。ちょっとね」

結局彼女が自分の部屋に戻ったのはエリックとの会話から20分後の事だった。心の中で何の結論も出せない自分にイラつき、また自分ではこの状況を何ら動かすこともできない無力感で彼女の頭は爆発寸前だった。

「さつき泊まるって言ったって事は、俺の家はやっぱりやばいのかな？」

「え？ まあ、当分は。何かあるの？」

珍しく何故か落胆している彼にエミルは問いかけた。が、返ってきた返答は予想外のものだった。

「お前からの誕生日プレゼント」

「へ？」

彼女の反応に拍子抜けしたのか、彼はあきれた顔で続ける。

「昨日折角貰ったのに、家に置いたまんまだ。まさかもう帰って来れないとは思わなかったからな。蓋も開けてない」

何かフェイトやライトについて責められるのではないかと内心緊張していた彼女は一旦その警戒を解く。この状況でそんなことに頭が回るのは、まだ今の状況に頭が追いついていないか、ただの鈍感か、それともこの状況においてすら平然と振る舞える強さを持っているのか。ただ、自分の事を気にかけてくれる嬉しさが自然と言葉にも表れる。

「何だ・・・そんなことか」

「そんなことかって、俺にとっては初めて女の子から貰ったプレゼントなんだ。大事にも思うさ」

その言葉が必要以上に今の彼女の心には響いてしまう。いけない、と思いながらも彼女は聞かずにはいられなかった。

「大事？ 私からのプレゼントが？」

「ああ、とても」

一つ一つの言葉に心が弾んでしまう。もう、彼女の行動の選択肢は決まっていた。

「分かった」

「？ 何がだ？」

「私が、君の家にそれを取りに行くよ。そして、改めて君に渡す。その時」

「その時？」

「ううん、何でも無い。その時のお楽しみ」

大丈夫、きっと彼に渡して、それから返事を聞いて、彼に全てを話して説得しよう。大丈夫、きっと分かってくれる。結局のところ、こんな願望を抱いている彼女もまた、この状況を樂觀視していた。

「何も今からいなくても・・・」

「早いうちに行っておくよ。すぐに戻るから待ってて」

「分かった。気をつけるよ」

「うん、ありがと」

彼の見送りの言葉を背に、彼女は車のエンジンを始動させ、出発した。そして、それを確認するかのように、駐車場から部屋へと戻っていく彼にとぅとぅ、その影は真後ろにまで迫った。

「お兄ちゃん」

「！」

「来ちゃった」

「フェイト！」

部屋に戻るためエレベーターに乗った彼が後ろの気配に気付いたのは、すでに上昇を始めてからの事だった。いや、それまで気付かせなかった、と言った方が正しいだろう。

「フェイト！ 何のために俺を襲うんだ！？ 目的はなんだ！？」

密室状態の中事実上追い詰められた彼は叫ぶ。身体能力の異常さは先程嫌と言っほど見ている。まともに戦って勝てる相手ではなかつ

た。というより見たはずだ、確か頭が転がって・・・。

「私はね、フェイトなんだけどフェイトじゃないの。同じ顔、年齢も近いけど、あの役立たずとは少し違うんだよ」

彼の心を読んだかのようにして発せられた言葉は人としての何かを持ち合わせていなかった。何の心の動きもない、ただの声。そして何より、顔が全くの無表情のまま、フェイトらしき何かは、ゆつくりと腕を振り上げた。

「死んじゃえ」

ゆつくりと彼女の腕が振り下ろされるのを彼は黙って見ることはできなかった。ああ、これで終わりかとか、とにかくスロウモーションの様に流れる現在の光景をただ見つめることしかできなかった。

「止めなさい」

いきなりエレベーターが動きを止め、扉が丁度よく外への扉を開く。「なっ」

その振動で体勢が崩れた隙を見逃さず、彼は彼女を突き飛ばしながら外へ出て、階段を駆け下り、家の方角へと走り出す。

「やるじゃない。動揺して無いとは」

「おかげ様でそこそ慣れてきたんだよ」

そう言つて彼は隣を走る人物を見てぎよっとする事になる。てつきりエミルが助けに来てくれたものと思い込んでいた彼の隣にいたのは――ライトだった。

「ライト・・・か？」

「そう、他に誰だと思つてるの？ ほら、証拠」

そう言つて、彼女は自分のおでこをこちらに向ける。そこには確かに銃弾の跡がきっちり残っていた。

「生きてたのか」

「もう聞いたでしょ。始めから生きてないって」

どこか自嘲気味には話す彼女に彼は感謝の意も込めて、兄として告げた。

「生きててくれて嬉しい」

「ふん、あんくらいじゃ機能は停止しない、というより、あの撃ってきた娘、始めからこれ撃ち抜くのが狙いだっただけだ」

そう言っただけで彼女はこちらにチップを投げつけてきた。

「何だこれ？」

「まあ、早い話が受信機。それ使っただけで私作った人はこっち指令よこすんだけど、正確無比に撃ち込むなんて彼女相当のやり手」

「じゃあ、フェイトがおかしくなったのって・・・」

「指令が出た。私に来たのは貴方を殺害しろって」

「じゃあ、何で泣いてばっかで殺しに来なかった？ フェイトと一緒に襲ってたら、簡単に殺せただろうに」

そう言っただけで、彼女は盛大に溜息をついた。

「自分で考えなさい、お馬鹿さん」

「なっ」

「悔しかったら、強くなりなさい。もっと」

家の前に辿り着いた時、妙な事に彼は気がついた。

「なあ、中に誰かいないか？」

「あなたの彼女がプレゼント探してるんじゃない？」

「彼女って・・・ていうか聞いてたのか？」

「中々スリリングな体験してたっていう自覚ある？ LIGHTS
の三幹部と会っただけ、軍に乗り込むわ」

「知ってるのか？ LIGHTS」

「ええ、私は嫌い」

「何故だ？」

返ってきた言葉は予期してないものだった。

「私を作ったから」

時が止まった。いや、それはつまり――

「お前たちとLIGHTSは味方？ じゃあ何で戦ってたんだよ？」

「その答えは、入ってから」

家に入った瞬間、前を歩く彼女が急にこちらの体を伏せさせると同

時に、銃声が部屋に響いた。

「おやおや、お早いお帰りじゃないか」

「ええ、やっぱり家が一番ですから」

ライトの返答を、訝しげに聞いた彼は納得したように笑い出す。

「そうかエミルか。フェイトは確実に破壊されたとの報告がカイルから来ていたが、君は未確認だったな」

「ええ、おかげさまでびんぴんしてます」

かろうじて視線を前にやると、そこには確かに男が一人立っていた。今までと違うのはこちらに銃を向けている事と、歳が今まで会ってきたLIGHTSのメンバーより20歳は上に見える、といったところか。

「ただ、今は君に用は無いんだ。あるのはそっちの坊や、てこずらせないでくれよ。奴等が来ちまうからな」

銃声が響いた瞬間彼女の蹴りによってそのまま外へと彼は弾き出される。

「お見事」

直ぐに男はライトの頭上を飛び越えルシファに再び銃口を突き付ける。が、銃声は彼からではなく横から響いた。

「ぐっ」

「あまり私をなめないで」

彼女の方を見ると、いつのまにかその右腕の先端は、銃口に変わっていた。

「ふっ、流石にシリーズのな・・・」

言葉は最後まで紡がれること無く、彼女によってその命は断ち切られた。

「・・・」

「軽蔑した？」

沈黙を続ける彼にライトは声をかけた。守れさえすれば、そんな事はもはやどうでもよかったが、それでも何となく聞いてみたのは、彼の顔があまりに見るに耐えない顔をしていたから。

「いや、守ってくれてありがとう。感謝してる。ただ・・・」
「ただ？」

ここで予期せぬ事態が起こる。彼女にとって世界が揺らいだ瞬間だった。誰が気付くと思うだろう。この短期間で。

「俺は」

「うん」

「人間じゃないよな」

「は？」

彼は聞こえていないと思ったのか、今度はゆっくり確認するかのようになに告げた。

「俺は、人間じゃないよな」

そう言う彼の顔が今にも泣き出しそうに見えたのは、偶々、光の加減がそう見せていたのか、それとも、彼女が涙で前がよく見えなかったせいだろうか。

「家・・・入ろっか」

「ああ」

彼等に運命はもはや、一片の慈悲も与えはしなかった。

「そ、そのご飯どうする？ 何か家にまだ結構残ってるし、私作るうか？」

先ほどからソファに座り込んだまま、彼は外の光景を見つめるばかりで、一言も発さないままだった。

「なあ、ライト」

キッチンで作り始めた彼女に彼は唐突に口を開いた。

「何？」

「いつから、自分が人間じゃないって知ってた？」

「生まれたときから、何となく。だって、生まれた瞬間から周りのことはきちんと認識できてたし、周りは研究者ばかりで、ああ、自分は違うんだなってそう思うしか・・・無かった」

「辛く・・・無いか」

「ううん、いい人もいたし何より、今まで私を管理してくれた人達

が、とてもいい人だったから」

「それって」

「うん、お父さん」

「父さんっていったい何を」

「もう分かってるでしょ？ 私を作った一人」

「母さんもか」

「ううん、あの人は何も知らなかった。ある日いきなり現れた私を何の疑いも無く引き取って、フェイトと二人、あなたと本当の兄弟のように育ててくれた」

「二人って、俺は？」

「大丈夫、貴方は真正銘あの二人の子。人間」

「いやでも、じゃあ何で俺は」

「それはね、君は人間のなかでもとびきり特別な部類に入るからだよ」

「！！」

いきなり第三者の声がするとともに、ライトはキッチンからこちらへ一飛びでダイニングに舞い戻る。

「私だよ、ライト」

そう言つて、陰から姿を現したのは、エミルだった。

「家の前で血の匂いがした。一応消してはあったけど、気配で何となく分かった」

「それで、私と彼をどうする気？」

ライトの言葉に彼女は無抵抗を示すかのように両手を上げ降参のポーズを作った。

「どうもしないよ。本当にある物を取りに来ただけなんだ。車を全開で飛ばしてきたんだけど、やっぱり間に合わなかった」

「ある物？」

ライトの警戒心はさらに高まったかのように、いつでも飛びかかれる態勢に入る。

「そう、だけど戻ってきてたんなら、その必要性も無くなったし、

今日はこれでお暇するよ」

「二度と来ないで」

ライトの言葉は鋭さを増し続ける。まるで、宿敵と対峙しているかのような、彼女にしては珍しい敵意丸出しの口調だった。

「どうして？　せつかく助けてあげたのに」

エミルはそんな彼女をいなすかのように、いつもの口調に、いつもの表情。

「貴方が何を考えていようと、敵は敵。あの時に免じて今は黙って帰すけど、次来たら容赦はしない」

「その意気なら安心かな。それじゃ、ルシファ」

「あ、ああ」

そう言つて、彼女は本当に出ていった。後に残るのは、何とも言えない微妙な雰囲気。

「ライト？」

それからピクリとも動かない彼女にさすがに気味が悪くなったルシファが声をかける。

「え？何？」

驚いたようにこちらを振り向いた彼女に彼は冷静に告げた。

「お湯が沸いてる」

慌ててキッチンへと向かう彼女を可笑しそうに眺めながら、彼は思っていた。例えば自分が人間だとしても、もうきつと、普通の生活には戻れないであろう事を。今まで、普通に暮らしてきた。家族の一員だと信じていた。それは今も変わらない。けれど、今までの話の中には、嘘が多すぎる。

「ライト、お前は信じてもいいのか？」

一人、誰にも聞こえないはずの声で彼は呟いた。

「・・・馬鹿」

一人、今度は本当に誰にも聞こえない声で彼女は呟いた。

プロローグ6 『日常』だったころ

半分以上残された皿を片付けながら、彼女は思う。これからどうする？　ここに長く続けるわけにもいかない。けれど、外に出ようにも狙われているのはルシファだ。彼の正体は何なのかは分からないが、むやみやたらに他人を頼るのは博打になるかもしれない。殺すように指令を出された理由が分からない以上、下手に行動するのはまずい。そして、ここで思考が一瞬止まる。何故、彼女は彼を助けたのだろうか？　確か彼女は高校に入ってから彼と同じクラスに入ったと聞いている。学校でルシファに会うことはあまり無かったこともあって、学校での彼を彼女は話としてしか知らなかった。本当に信用してもいいのかどうか、狙いは何なのか。確認する必要がある。もちろん、何故彼があんな事を言い出したのかについても。

『俺は、人間じゃないよな』

あんな顔をする彼を、彼女は初めて見た。いつも暖かくて、自分たちを大事にしてくれた。いきなりあんな指令が出た時は驚いて、フエイトを止めることもできず、ただ側にもいられず、結果あんな事になった。

「大丈夫、私は味方だから」

守ろうと思った。いつもいつも先が見えなくて、将来が不安で、自分がどんな事をさせられるのか分からず、不安だった毎日を何とか乗り切れたのは、ひとえに彼のおかげだった。だから今度は自分が守る。少なくとも自分より性能が上の固体はまだ生産されていないはず。フエイトが相手なら守りきれ。彼女に撃ち抜かれるようなミスももうしない。

そうだカラムホル、カナラズ、kanarazu・・・。

自身に起こっている変化に彼女が気付くのは、もう少し後の話になる。

「ただいま戻りました」

「ごくろう、何か変化は？」

「いえ、現在は自宅で、ライトと共に」

「そうか、フェイトはこちらで回収しておいた。彼は時期尚早だったな。ライトに一对一で勝負を挑んでも勝ち目は薄いだろうに・・・

。ああ、君はもう休め。明日、また新たに何か命じられるだろう」

「はい、失礼します」

ルシファが少し前まで休んでいた建物に、エミルはいた。上司への報告を簡単に済ませ、彼女は自分の部屋に入り、ベッドへと倒れこんだ。

「何やってるんだろう・・・」

本来なら今日はこの世界の自分の家で彼と一緒にいたはずなのに、組織によつて半ば強引な方法で彼女はここに呼び出されていた。ふと、ずっと服の下に隠して付けているペンダントに手を触れる。

「今頃家で二人か・・・」

ライト、決して嫌いなタイプではなかった。この組織が管理している固体の中で、彼女はとびきり優秀だった。様々な世界に任務として送り込んできたが、常に彼女の出す成果は一級品だった。だからこそ、彼女は妹役としてこのプロジェクトに選ばれ、特別な体を与えられ、ライトの名前を得た。それまでは単なるマネキンの様な外觀だったが、今では自分よりも女らしく見える。ただ、送り込んでから数年で、組織にとつて致命的な誤算が発生した。送り込んでから数年後、ライトが彼に恋をしたのだ。こればかりは誰も予想していなかった。彼女たちに同情的で常に庇ってきたアリアも、その報告を受けたときはまさか、という顔をして固まっていた。エミルやエリック、カイルはその時は気にも止めず、事後策として、完璧にコントロールできるフェイトを送り込んでこの問題は解決だと思っていた。

「まさか、フェイトもか？」

「分からない、けれど最近反応が鈍い。このままいくと、こちらの

命令を聞かなくなる可能性も出てくる」

エリックの驚きにエミルは事務的に返事を返す。

「ちよつと待て、ライトはともかく、フェイトも、って無理な相談だぜそれは。あいつは完璧に機械だろ？」

「そのはずなだけどね」

数年後、彼女たちは全く同じ問題に直面する事になっていた。生まれたときからこの世界の任務に携わっていて、彼のことについて現在最も詳しいはずの彼は首を捻る。

「あいつそんなにもてたっけ」

「分らないの？ この世界に何年いるのさ？」

「な、あいつは少しとっつきにくいんだよ。この仲になるまでどれだけ苦労したと思って　　る」

「どうだかね」

この時点では彼女は彼よりも立場が上だった。彼が『ハムルス』の関係者と上から告げられた瞬間、立場は大きく変わったが。

「ともかく、私も来年からそちらへ異動だ。よろしく頼むよ」

「はっ？ 高校から？」

とても嫌そうにこつちを見てくる彼に彼女は笑顔で続けた。

「そう、そこでは昔からの友人と称して彼に紹介してくれ」

「はいはい了解しましたよ、先生」

「分かればよろしい」

それで良かった。誰かができなければ、誰かがやる。それが今までのやり方だった。だが出会ってすぐ、フェイトの反応の鈍さの原因はフェイト自身の問題ではなかったことに直ぐに気付いた。

「何者ですか？」

転校初日、彼女はライトに呼び出されていた。まだこの時、ライトは中学生であり、そこで絶大な人気を持っている事を彼女は知っていたが、何故自分呼び出したのか、彼女は見当もつかなかった。

「君が予想している通り、組織の人間だよ」

相手は戦闘のエキスパートだ。こちらを襲ってくることはまず無いが、それでも若干の恐怖と警戒心を抱きながら、彼女はあくまで友好的に接しようとしていた。

「何が目的です？」

「自分の立場を分かっている？ 私はあなたの――」

「どうするつもりです？」

その瞳には何の迷いも見えなかった。ただあるのは、何がしかの決意、それだけ。

「私はただ監視するために来たただだよ」

「フエイトに気付きました？」

「――」

いきなり図星を突かれて、彼女は明らかに動揺した。失敗だったかもしれない。彼女は初めてそう思った。もし、本当にライトがルシファ側についたのであれば、エミルやエリックに勝ち目は無かった。それこそ隊長クラスがでてこなければ制圧できない。

「何をした？」

「少しいじくっただけです。あなた方の命令と共に、私の命令も聞くように」

「君の命令？」

「彼にいかなる被害も生じないように」

「君は……」

「手は出させません。もし、何かあれば、私はすぐにあなた方と敵対します。失敗でしたね。半ば高性能なのをつくって、ある程度の自由を与えた途端、反逆されるなんて」

「だが……」

まさかここまでとは思っていなかった。ほんの気まぐれ、もし好きでも、彼女なら命令には従うだろうという先入観は未だあった。今まで彼女は様々なものを見てきたはずだ。戦い、戦って殺し続けて、嫌というほど人間の醜さを知っているはずなのに。

「私は組織の命令に従う。もし何らかの命令が下れば、君も処分さ

れる事になる」

「どうぞ、できるものなら」

何が彼女をここまで突き動かしているのか全く分からなかった。ルシファは今日すでに会っていたが、別段魅力的な男でもなかった。容姿はこの世界では優れている方なのかもしれないが、この世界と自分がいた世界では美的感覚が若干ずれている。

「君は人間じゃない。例えどんな気持ちを抱いていようが、彼は君の思いに応えてはくれない。分かっているんだろう？」

その時、彼女が見せた顔をエミルは見た。一生忘れる事ができそうも無い、そんな壮絶な笑みだった。

「ええ」

もう、何も言えなかった。ここまで来たら、もう処分するしかない。いかなる方法を使おうとも、危険と判断したら消さなければ、こちらが潰される。

「へえ、妹がいるんだ」

「かなりの美人だぜ。中学の頃一年一緒だったが、相当の人気があった」

後日、彼等は予定通りに三人で行動するようになっていた。彼が一人でいる事を何とも思わない性格の持ち主だったことが幸いして、高校ではこの三人の組み合わせが普通になっていた。

「別に」

「謙遜しちゃって」

「うるさい、これでも食ってる」

ルシファが自分の弁当のトマトをエリックの口に放り込む。いきなり嫌いなものを口に放り込まれ、トイレへと走り去るエリック。こんな日常が当たり前となっていた。

「何で、俺に打ち明けたんだ？」

「え？」

「自分がイリア人だって」

彼女は自分をイリア人だと彼には告げていた事を思い出す。近づくことが目的なら、できるだけ彼が自分に興味を持つように仕向けるのが一番だと考えての結果だった。予想通り、彼は興味を持ち、こうして話しかけてくる。

「どうしてだろうね」

彼女はさらりと告げる。正直、いずれは処分が下されるであろうこの人物に対し、彼女は素の自分を見せた事は無かった。それなりにクラスメイトを誘いもするし、かなりの人気も得て、学校内では非常に動きやすい立場となっていたが、どうにも彼はエリックの言う通り、とっつきにくい人物だった。まず、何を考えているのかこちらには少しも悟らせない、かと思えば、時々こちらの心を読んでいるかのような発言もするし、気遣いも見せる。優しいのか冷たいのか、本当にこちらに興味を持ってくれているのか不安になって、毎日会話を思い出してみるが、彼の本質は全然見えてこなかった。「変わってるな、お前。『エミル様』が俺なんか側に置いてたら、評価が右下がりだぞ」

「大丈夫、できの悪い臣下を一人おいとしても、もう揺らがない程度にはなってるから」

実際、彼の存在はマイナスではなかった。周りの評価は思ったよりはるかに高く、何故一人でいるのか、皆目見当がつかなかった。

「じゃあ、そのできの悪い臣下が個人的なアドバイス」

「聞いてあげる」

「嘘っていうのは、積み重なるほど、重くなる」

「へ？」

一瞬ドキツとした。まさかバレた？ いや、そんな隙は見せてないはずだが・・・と彼女がパニックになっていると、彼は笑いながらから揚げを口の中に放り込んできた。

「俺も、嘘つき続けてるから、似たような人間は何となく分かる。エリックもかな。お前ら、持ってる空気が良く似てる」

「そ、そうかな。昔から一緒だったから、そのせいかな」

「もし、言える事なら、誰かに言ったほうがいい。それだけで楽になるから。一人で抱え込むと、ネガティブな方向にしか考えがいかなくなる」

「大きなお世話だよ」

何だか、こつちが一方的に見抜かれているかのような気がして腹が立つてくる。そんな彼女に彼は何かを思い出したかの様に、鞆から何かを取り出して、こちらに渡してきた。

「何、これ？」

「今日だろ」

「何が？」

本当に何か思い出せなかった。今日は特に何も無かったはずだが・・・、と彼女が考え込むのを見て、彼は少々不安そうに問いかけた。

「誕生日だろ、今日」

「あつ・・・」

すっかり忘れていた。確かに今日は誕生日だと、前に告げていた事を彼女は思い出す。だが、いつ以来だろうか、他人にこんな事をしてもらうのは。もう本当に自分が普通の暮らしをしていた頃、両親にもらって以来のような気がして、そのころの事が急に頭の中に蘇ってきて、彼女はいつのまにか涙を流していた。

「おйлシファ、何やってるんだよ」

「ひゅーひゅー、熱いねえ」

いつのまにか、クラス中の視線が彼等を集まっていた。慌てて、彼はハンカチを取り出して彼女に渡すが、涙は止まらず、困り果てた彼はとりあえず彼女を屋上まで連れて行いった。

「どうした？」

彼がこちらの顔を覗き込んでくる。正直、こんな顔を見せたくなくて、彼女は顔を伏せようとするが、彼の腕がそれを許さなかった。

「言いたくないなら言わなくてもいいが、もし俺に責任があるなら謝る、すまない」

「違つ、そうじゃない」

今、自分がどんな顔をしているのか全く分からなかった。ひどい顔をして、彼に迷惑をかけている。それだけで、泣くには十分な理由になっていた。

「誕生日にプレゼントを渡されるなんて、お前にとっては珍しい事でも無いだろ？」

「あ・・・」

ここで彼女は思い出した。そうだ、だからこそ彼女は忘れていたのだ。

「誕生日プレゼント、家族以外の人から貰うの、初めてだったから「は？」

彼のこんなに驚く顔を初めて見た。それはそうだろう。自分は学校の人気者で、リーダーで、率先して何事にも対応してミスもしない。そんな自分が、誕生日プレゼントを他人から貰った事が無いなんて。

「何で？ 友達ならたくさんいるだろ？」

祝う習慣が組織内には無かったことが主な原因だったが、それだけではなく、そこまで他人と近づこうとも思っていなかった自分の心の問題もあった。だから、誰にも教えていない。自分の誕生日を知っているのは、彼だけだった。

「何で、君に誕生日を教えたのか分かった」

「？」

不思議そうな顔をする彼に彼女は言った。

「誕生日、教えて」

どこか躊躇されているような気がして、彼女は不安になったが、彼はそこで、誕生日を彼女に告げた。実は、彼も家族以外には知る人はいなかったのだが、そこは敢えて隠した。こうして、二人だけの秘密ができる事になった。

「はあ、何考えてるのやら・・・」

そこで彼女の追想は一旦途切れる。思い出しても仕方の無い話だ

った。自分は組織の人間で、そこでしか生きる場所はない。住む世界を破壊された人間の生きる道は、そう多くは無かった。

「明日、どんな顔して会おう・・・」

憂鬱な夜はひっそりと更けてゆく。

プロローグ7 『日常』が壊れる前に

「どうする？ このまま放っておくか？」

同時刻、同じ建物内、エミルの部屋よりも数倍広い部屋で、セイバーたちは今後の方針を話し合っていた。

「異議」

「まずいだろうな、それでは」

ランスロットの苛立っているかのような発言にボルクとセイバーは答える。

「ライトねえ・・・殺れない事は無いが、どっか広い場所が欲しいな」

彼等の出した結論は、ライトの破壊だった。あの役立たずにもはや彼等は価値を見出してはいなかった。壊れたら作り直せばいい、ただそれだけ。あれに固執する必要はどこにも無かった。

「いい、私がやる」

「隊長自らかよ！」

「問題あるまい。私の下で起きた問題だ。それに長引けば、『ハムルス』がまたこちらに何か言ってこないとも限らん」

セイバーは簡単に告げ、会話を切り上げる。

「まあ、それでいいなら俺はいいけどよ」

「同意」

そのまま立ち去ろうとするセイバーに向かってランスロットは言う。

「あの坊やはどうする気だ？」

「予定通りだ。協力する気があるならこちらの隊に加える。する気が無いなら、監視をつけて放っておく、もし、魔女や他の組織に行きそうになれば切る。それだけだ」

扉を開けて出て行くセイバーを見送りながら、彼は溜息をついた。
「やれやれ。あいつも苦勞するな」

あまり嫌いなタイプではなかった。こちらの話を冷静に聞いてい

たし、考える力もある。恐らく、こちらの嘘にも気付いているだろう。

「できれば、味方に加えたいところなんだが」

外を見ながら彼は呟いた。この建物を照らす月は、ただあるだけで、何も言っではくれなかった。

「・・・」

もちろん、隣にいる同僚が何を考えていたのかも、彼には知る由も無かった。

「何が何やら・・・」

ルシファは部屋に閉じこもっていた。正直、今は誰かと話したい気分ではなかった。エミルから貰った腕時計を見つめながら、彼は思う。自分が何なのか、何のためにこんな所にいて、今から何をしなければならぬのか。

「まさか本当にくれるとはな」

「教えてもらったんだから当然だよ」

後日、いつもの屋上で、彼は本当に彼女からプレゼントを渡されていた。

「これでも少ない予算の中から必死に捻出したんだから、大事にするように」

「ご命令とあらば」

「よろしい」

彼は貰った物をまじまじと見つめて彼女に問いかける。

「で、これは何？ 石だろ？」

「アクアマリン、この国には無いから知らなくても無理は無いよ」
実際、別世界から取りよせた物で、ばれたら罰金物の品ではあった。

「へえ、綺麗だな。けど」

「けど？」

不審がつて彼女は彼の顔を覗き込む。そんな彼女を見て、彼は石を彼女の髪にと見比べ、納得したように言った。

「これは、お前の方が似合う」

「は？」

そう言つて彼は鞆から手ごろな紐を取り出し、器用にそれを石に結びつける。

「ほい、今はこれが精一杯だが、今度まともな物になるように加工してもらおう」

「え、あ・・・」

それは彼が作った即席のペンダントだった。

「きつと似合う」

「で、でもルシファの誕生日――」

「じゃあ、笑つてくれ」

「は？」

「笑顔でいるときに、一番映える」

「いや、でも」

とつさに彼女の気持ちに芽生えるのは拒否反応。いい友人でいられるなら、それに越した事は無い。だが、その先までいくのは危険だ。彼女の直感はその告げていた。

「どうした？」

「やっぱり、受け取れない」

頑なな意思を見て取った彼は考える。正直、彼の気持ちも彼女と似たり寄つたりな所はあった。これ以上他人に近づいては駄目だ。いざという時迷惑をかけるかもしれない。あげたのは母さんが偶々見つけたキーホルダーが、彼女に似合うと思つたから。ライトやフエイトに同じように何かを送る事は、これまでもいくらでもあった。これで、もう終わりしよう。その覚悟で彼は今日ここに来ていた。そのはずだった。

「だったら、こうしよう」

「え？」

彼は石から紐を外し、思ってもいなかった言葉を口から出していた。

「一旦は俺が貰う」

「う、うん」

「だから、次のエミルの誕生日に、ちゃんとペンダントにして渡す」

「は？ それじゃ何も変わらー」

「いいんだよ、俺がそうしたいんだから」

彼女は勝てないと思った。その一方で、ライトの気持ちが心から理解できた初めての瞬間だった。

「わ、分かった」

「よし、約束だ」

「うん、約束」

お互い笑顔で約束しあった。一方にとっては、友人が親友に、また一方にとっては、友人が何かに変わった瞬間だった。

回想が途切れる。こんなことを思い出しても、今更どうしようもない。結局の所、彼もまた、何の答えも出せないまま、朝を迎える事になる。

プロローグ 8 偽りの『日常』

「朝、か」

昨日からずっと眠れず、いつのまにか朝を迎えていた。

「一体、今日は何をさせられるのやら」

昨日の夜から抱えているもやもやした気持ちは朝日を見ても晴れる事は無かった。とりあえず身支度を整え、部屋の外に出る。この建物ももう慣れたが、できれば家に帰りたかった。

「おはよう」

「・・・おはようございます」

「つれない返事だな」

エリックだった。昨日とは打って変わって普通の態度。出会った時はまだ可愛げがあつたが、今ではもう何の感情も持つてはいない。

「もう少し組織内でも愛想良くしろよ、損だぜ」

「気を付けます」

会議室までの道のりが長く感じる。それも最近、嫌な噂を聞いたからだ。エリックが、エミルの事を好きだ、という。根も葉も無い噂だったが、無下にあしらうにはこの男の権力は強すぎる。結果、今でも会話が続けている。

「やれやれ、何させられるのか」

当然のように隣に座ってきた彼が彼女に問いかける。それを見て同情のそぶりを見せる者も何人かいたが、結局は黙って皆それぞれの場所に散って行く。

「さあね」

その点は彼女もまた気になる点だった。これから上層部がどう出るのか。セイバー達が決めるのだろうか、所詮彼女たちは傀儡、実質的な力を持っていない者たちに劇的な変化は起こせないはず、という彼女の予想はセイバーの開口一番で碎け散った。

「本日、ライト、ルシファ兩名を」

「？」

何故かルシファの名前が出てきた事に彼女は疑問を持った。何故？ 彼はもう少し長期的に見なければいけない存在であるはずなのに。自分の考えに没頭する彼女は隣の男の自分を見つめる視線には気付ける訳も無かった。

「LIGHTSへの反逆罪として、処分することが決まった」
「なっ！」

反逆罪、処分。二つの言葉が意味する結果は簡単に見えた。死刑だ。だが、彼等はまだ何もしていない。ライトだけを処分するなら納得だが、ルシファに何の罪があるというのか。

「後ほど詳細は追って連絡する。以上だ」
「待ってください！」

立ち上がりかけたセイバーをエミルが呼び止めた。

「何だ」

「何故、ライトだけでなく彼もなんですか？」

「不満か？」

「当然です！ LIGHTSはいつからこんなー」

「決まったことだ」

有無を言わさぬ口調でセイバーはこちらを見つめてくる。

「そういうことだ、何なら、今回はメンバーから外してもいいが？」

ランスロットの申し出に彼女は首を振った。決定したのであれば、自分は従うだけだ。そう、決めたのだから。

「やります」

そう、決めたのだから。

「朝、か」

「起きてたんだ」

「ライト」

彼はゆっくりベッドから体を起こし、彼女の方に向き直る。
「眠れたか？」

「私は寝なくても大丈夫だから、そっちは？」

「まあまあ、かな」

見つめ合う視線は彼の方から逸らされる。

「・・・ご飯作ったから」

「分かった。今行くよ」

あるのは日常と全く変わらない光景。違うのは、この家に彼等以外の誰もいないこと、そして、どこか彼等の間に流れる空気が重いこと、それだけでもう彼等は遠い異世界にいる様な気がしていた。

「あのね」

朝食を口に入れる作業を繰り返す中、ライトが口を開いた。

「何だ？」

「今日、二人でどこか行かない？」

「二人で？」

「そう、二人で」

珍しいことだったが、彼はもう何も言わなかった。手に入れた次の瞬間から、ポケットに密かに入れていた物を手で触れながら、答えた。

「分かった。行こう、どこかへ」

「うん」

最初で最後の彼等二人きりの一日が、始まった。

「嫌われたらどうな」

「構わん」

司令室までの道中、セイバー達は重い足取りだった。正直なところ、私情を抜きにしてもルシファまで殺すことに彼等は反対だった。現に、昨日の夜まではその方針で固まっていたのだ。にもかかわらず軌道修正せざるを得なくなったのは、『ハムルス』の圧力がかかったからだ。

「別に、今は何の力も無いんだし、放っておけばいいのに」

ランスロットの愚痴は軽く聞き流され、彼もまたこの重い空気に

押し黙る。部屋に入って彼等は、彼等の運命を決めた。
「始める」

運命の時は、もうすぐそこにまで迫っていた。

「さて、まずはどこへ行く？」

「ついてきて」

「了解」

前に行く彼女の後ろに彼が付く形となって、彼等は歩き出した。

「ここは・・・」

「次は、いつ来れるのかな」

「さあ、な」

彼等は校門の前に立っていた。今日は休日のため、学校にいる生徒は、部活か、補習を受けている生徒くらいで、いつもと比べて閑散としていた。

「なあ、何でお前部活入ってなかったんだ？」

「え？」

「ほら、お前、部活入ってないだろ？ 色んなとこの部長が俺の所に来て、妹を説得してくれ、ってうるさかった」

「え、ええと・・・」

「出る杭が討たれないように、ってか」

「あ、まあ、そ、そんな感じ」

「嘘つけ」

「へ？」

一瞬で嘘が見抜かれ、というより上手く誘導されている様な気がして、彼女は彼の方を見ると、その顔はいたずらっ子の様に笑っていた。

「処分された時、周りに迷惑をなるべくかけない様、あとイリア人って嘘ついてたのは、いなくなった時、理由がでっちあげやすいから。だから、LIGHTSはこんな世界を用意したんだろ」

「・・・どうしたら今の会話から、そんな結論が出てくるのよ」

本当に感心した。あれだけの情報でよくそんな仮説を立てられるものだ。

「俺が何も考えていなかったとでも？」

「う、ううん、賢いとは思ってた。結構冷静だし」

「本当かよ」

「ほ、本当。賢いし、しっかりしてるし」

「それは褒めすぎ、だぞ」

頭を小突きながら、彼は歩き出した。

「え、どこ行くの？」

「俺の行きたいところ」

「ちょ、ちよつと待ってよ」

「こ、ここ？」

「悪いかな？」

「いや、悪くは無いけど」

ライトが呆れたような口調で彼に言った。彼等がいたのは、街の中でも有名なショッピングセンターだった。この時期はただでさえどこも人で一杯だが、ここは別格だった。

「別にどつかで待ってても良かったのに」

「いや行く」

人混みを押し分けるようにして、彼等は進み、目的の店へと辿り着いた。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「ええ」

「こちらへどうぞ」

「ここって・・・」

「俺がよく来る店、いつもは空いてるんだが、今日は流石にすごいな」

彼等は何とか最後に残っていた席に滑り込んでいた。店の外に出ていた、『本日カップル以外お断り』の看板には当然ながら彼等が気付くことは無く。

「クリスマスってこと忘れてた？」

「もう12月だもんなあ」

「それにしてもカップルばかり」

店内は大いに賑わっていた。いつもはシックな室調でまとめられている店内は、今日ばかりは、クリスマスの飾りがふんだんに使われており、見事にクリスマスを演出していた。

「最初はエミルに連れてきてもらったんだ」

「・・・それで？」

ライトのメニューをめくる手が一瞬止まる。

「このコーヒーがかなり上手い。あいつは飲めないみたいだったけど。何か全然食文化が違うとか言ってたのは、こういうことだったのか・・・」

「私はこの世界の食べ物結構好き。この体になって初めて味が分かるようになったていうのもあるけど」

「どんな格好してたんだよ」

「manekinn」

「は？」

「あ、ごめん。何でだろ。言語翻訳が上手くいかなかった。マネキンみたいなの。コーワイーゾー」

「全然怖そうには聞こえん」

「そんなことない、あ、これおいしそう」

「どんだけ入るのか知らんが程ほどにしとけよ」

「ん」

楽しそうにメニューを眺める彼女を眺めながら、ふと外を見るとありえない人物と眼があった。エミルだった。

「おい」

「分かってる。でも、まだ何の指令も出てないし、彼女一人以外誰もいない。彼女だけでは私の制圧には力不足」

「大丈夫か？」

「大丈夫だって、忘れたの？ 私の正体」

「そうだったな」

LIGHTSの狙いは何なのかは分からなかった。助けてくれたり、狙われたり。大体、自分たちで作った物を、自分たちで壊す。何の意味があるのかさっぱり分からない。怖くなってもう一度、確認の為外を見た時、彼女の姿はもう無かった。

「じゃあ、これにしよう」

彼女が選んだのはストロベリーパフェ。

「好きだったな、そういうの」

「そ、好みに合う」

「俺はコーヒーで」

いつもの様に同じ物を頼む彼に、すっかり馴染みとなっていたウェイトレスは、何故か不思議そうな顔をして、彼に何やら囁いた。
「ちよつと、あなたいつもの彼女は？ さっきこっち見てたじゃない」

「は？」

「だーから、貴方かっこいいって言っても、こつもとつかえひつかえするのは問題よ、問題」

言っている事の意味がようやく分かった。

「こいつ、妹です」

「へ？ じゃあ何でここに？ あ、そうか混んでて看板が隠れて・・・」

「ご心配なく」

「ご、ごめんなさいね」

ウェイトレスが去っていった後、彼女が口を開いた。

「全部聞こえた」

「・・・高性能なのも問題だな」

一気に不機嫌になるライト。

「事実を言っただけだぞ」

「私、本当は貴方の妹でも何でも無いし」

「じゃあ、何だよ」

「貴方が決めなさい」

こうまでぶっきらぼうにされると、こちらも対抗したくなってくる。

「妹」

「・・・」

「どうした、不満なら言わんと分からんぞ？」

「koibitotoka」

「だから、さつきから何だよそれは？」

「分からない、今日不調だな」

肝心なところで上手くいかなかったことに不満を抱きながらも、この時はまだ、彼女はただの不調だと思い込んでいた。ただでさえ、頭にあんなショックを受けた後だ。後できっちり自分でメンテナンスしよう。それで済むと、彼女はそう思っていた。

プロローグ9 『日常』との決別

「どうだ？」

「順調です」

「そうか」

この世界のLIGHTSの司令室にセイバー達はいた。今のエミルからの報告は、こちら側からの干渉が上手く言っているかどうかのテストだった。

「嘘は何から何までばれているようですが、そこまで嫌悪感も持っていないかと」

「もうルシファがどう思っているようが、関係ない。周りに人気がないところに彼等が移動したら、実行に移る」

「すみません、失礼します」

そこで通信が途切れる。

「やれやれ、嫉妬かな。あれは」

「どうでもいいことだ。私はああいう感情は知らん」

「遺憾」

「こらこらボルク、怒るなって、嬢ちゃんも色々必死なんだろ」

カップル限定の店に入り、会話は楽しげに交わされ、二人に流れる空気はこの状況下に置いても穏やかだった。彼からしてみればそれは微笑ましい光景だったが、彼女にとって見れば複雑なものもあるだろう。今置かれてる立場を考えればなおさら、である。

「例の噂、聞いたか？」

ランスロットが今の会話の延長線上としてセイバーに尋ねる。が、返ってくるのはいつもと同じクールな返答のみ。

「ああ、だが干渉はしない」

「おいおい、嬢ちゃん発狂しちまうぜ？」

正直彼は心労で倒れそうだった。ただでさえ問題は組織内外に山積しているのだ。これ以上の揉め事は勘弁して欲しかった。

「仕方あるまい。今その道を回避しても、直に同じような事はまた起こる」

「そりゃ、俺たちが何かできるわけでもないけどよ」

「だから変える。こんなことは」

「そう、だったな」

彼は、そう言って会話を切り上げた。そう、だから今はこの任務に集中しなければならない。いつか本当に力を持って、LIGHT Sとして活動するためにも。

「さて、次はどこへ行く？」

「こつち」

店から出ると率先して彼女は歩き始めた。文句も言わず付いて行った彼の前に現れたのは・・・図書館。

「は、はは」

「何がはは、なの？」

「い、いや、えーと・・・」

正直彼は図書館にあまり良い思いではなかった、中学までは好きだったのだが、

「何、どうしたの？」

それがな、と前置きしてから彼は話した。

「ねえ、ここどこ？」

「図書館、お前がいた国には無かったのか？」

「いや、あったけど」

「じゃあ、何で目の前にあるものが本だと分かってないんだよ？」

エミルと二人で図書館に来た時のことだった。本を手にして固まり、挙句の果てに現在地まで聞いてきた彼女に、彼は呆れ、とりあえず図書館とは何か、事細かく説明する破目に陥っていた。

「え、本！？　これが？」

「じゃあ、お前の中の本ってどんなだよ」

「え、大容量集積チップで・・・」

「は？　何それ？」

「ご、ごめん何でも無い！」

「おかしなやつだな」

「気にしないで、へえ、これが本・・・」

その後、物珍しげにあれば？　これは？と聞き回る彼女に対し彼は一つ一つ説明していった。他人の物にまで指を刺し始めた時は、流石に彼が止めたが、彼女の好奇心はとどまる事を知らず、本一冊一冊の製造過程を問われるころには、とっくの昔に周りの見世物小屋と化していた。

「く、苦労してるね」

「ああ、お陰でそれ以来ここには来てない」

「・・・分かる」

その頃、LOGHTS内では、

「予習不足だ」

「違います、これもこれもコミュニケーションの為、やむを得ず、無知を装っただけです」

「対象の立場悪くしてどうすんだよ」

こんな会話が展開されていた。

「お前、いつも何読んでるんだ？」

「『森の夜に』とか、『陽炎の歌』とか」

「また随分古典だな」

彼は心底驚いた。どれも専門家位しか見向きもしない物だった。

案外、解読させれば研究も一気に進むかもしれない。

「うん、この国の古典はかなりレベルが高い。現代人が書いてる小説は展開が雑すぎてついていけない」

「へえ」

彼らは図書館内にいた。建造されて随分経つ館内は所々ガタが来ていたが、それもこの建物の魅力の一つとなっており、近隣の住民から親しまれていた。

「それ、僕が最初」

「違うもん」

「僕」

「私」

横目に展開される子供の会話を楽しげに見ながら、彼らはゆっくり言葉を紡いでいく。

「そっちはどんなの読むの？」

「展開が雑すぎる小説」

「例えば？」

「・・・『恋の魔法』」

言った瞬間彼女は吹き出していた。

「何だよ」

「い、いや、知らないけどタイトルからして似合わない」

「タイトルどおりの内容でもないからな」

ようやく笑いが収まった彼女に、彼は言った。

「どんな話し？」

聞かれて彼は一瞬言うべきかどうか迷ってから、静かに話し始めた。

「簡単に言うと、名前も親も分からない一人の少女が、ある日一人の男に出会う。その男も自分の名前も親も知らなくて、途方に暮れていた。お互い似たもの同士だった彼らは一緒に暮らし始めるんだが、その内少女が気付くんだ。自分の過去に」

「・・・どんな過去？」

「彼女はその前にも、その前にも今の男に恋をしていたんだ。その恋をしている時だけ、彼女は自分の過去をある程度まで思い出せる。そして、本当に彼女が彼に恋をした時、彼女は全てを思い出すんだ。自分が本当は人間じゃなかったことに」

「・・・彼女は、何だったの？」

「彼女は恋だった。恋そのもの。恋をしなければその存在は現れず、冷めれば存在は消える。恋をするために生きて、それだけに全てを懸ける。冷めれば、彼女は何者でもない存在に戻り、また無意識の内に恋を求めて、同じ相手を求めてさ迷うんだ」

「相手の男は？」

「恋が恋することができるのはまた、恋だけだよ」

「・・・」

「この話には続きがある。その内、彼女は何度と無く繰り返されるループを断ち切ろうとする。つまり、恋に絶望したんだ。いつか終わりが来るなら、記憶のある今の内に全て終わらせよう、そう思い、彼女は自分の頭に銃を突き付けた」

「死んじゃったの？」

「いや、彼女は死ななかった。彼女が死ねば、片割れは一人ぼっちだ。実は彼もまた、同じ事をしようとしていたのだけれど、二人がいなければ、世界から恋が消える。恋が無いという事は、愛も、悲しみも、憎しみも、楽しさも、全てが失われるということ。そんな世界を彼らは望んではいなかった。だから彼らは魔法をかけた。恋がかけた、たった一つの魔法」

「どんな魔法？」

「永遠に恋を忘れないように、と。少なくとも、自分たちはお互いをもう嫌いになつたりはしない。それはまた、別の役割をもった誰かがすること、自分達には、自分達の役割があるから。そして何より彼らは」

そこで彼は一呼吸置いてから主人公の最後の台詞を、願った。

「この魔法が叶う世界にいられるなら、私は何度でも夢を見られる。例えば私に何も残らなくても、この身が朽ちようと、廃れようと、見るも無残な墓標の上に立とうとも、思いは残る。確かに貴方を愛した思いはここに残る。それさえあれば、世界は、人は恋に絶望などせずに済む。例え一時、その気持ち失われ、他の思いがその人に降りかかるうとも、いつかまた、人は誰かに恋することができる。きっとその世界は、暖かく、心地いいものであるはずだから、生きよう！この道が誰かに閉ざされるその日まで、明日を笑顔で迎えよう！明日に希望を持ち続けよう！」

彼は自分の全てを吐き出すかのように言い切った。周りの人も、何

も言わずただ黙って彼を見つめていた。

「いい、話ね」

ライトがいつになく優しい声と共に、彼の手を取った。

「俺も、こうありたい。もし自分の正体を知った時、例え一時絶望する事があっても、それに打ち勝って、自分が何であつても、明日が来る事が楽しみになるような、そんな人生を送りたい」

「なれるよ」

「ああ、なる」

静かな時間が流れた。二人で一通り本談義を終えた後、ライトが切り出した。

「ねえ、さっきの『恋の魔法』っていう本のことなんだけど」

「何だ？」

「私たちが今日だけ、その本の登場人物になつてみない？」

「登場人物って、恋に？」

「そう、今日だけ、私たちが恋の代表」

「何か申し訳ないな」

「いいじゃない、行こ、ルシファ」

「分かつたよ、ライト」

腕を組み歩き出した彼女たちに残された時間は、もう多くは無かつた。

ブローグ10 『日常』はきつとまた、その手に

「久しぶり、かな。こうして二人で歩くの」

「大体、家族揃ってたからな」

二人は公園に来ていた、といつてもそんな大層な公園でもなく、遊ぶためのスペースしか無い、草原といつても差し支えない所だった。クリスマスは皆、街中へ出かけていくし、ただでさえ冷えるこの季節、人気は全く無かった。

「寒くないか？」

「もう、だから」

「もう少し寄って来いって事だ」

「・・・ん」

彼らの振る舞いはもはや演技ではなかった。完全に登場人物と同一化していた彼らは、目的の物を目指して進んでいた。

「ふっ」

「どうしたの？」

急に笑い出した彼に彼女はこちらを訝しがるように見てくる。まさか、その顔があまりにも綺麗に見えて、そんな自分がおかしくて、等と正直に言えるほど、彼は素直でもなかった。

「いや、思い出し笑い」

「もう、雰囲気ぶち壊しにしないでくれる？」

ライトが怒ったかのように、拗ねた口調でこちらを責めるが、顔は笑っていた。

「悪い悪い」

だから彼も笑顔で返す。自分が笑うと、いつも彼女も笑顔になっていた。その顔が好きだったから、彼は自分も笑顔であろうと、そう思った。

「本気じゃない」

「ばれたか」

「恋人ですから」

「そうだな」

「そうだよ」

ただ二人は歩き続けた。長い長い道の果てに、ようやく彼らはお目当ての物を見つけた。

「やっぱりいつ見ても凄いな」

彼の独白は目の前に滝に吸い込まれていく。行楽シーズンともなればここも賑わうのだが、今は人もおらず、静かな空間が広がっていた。幼い頃、初めてここに連れて来られたときの感動を、彼はまだ覚えていた。あまりにも大きかったそれは、自分が大きくなった今は幾分かスケールダウンしたように見えるものの、今もなお十分な威容を誇っていた。

「あのね」

見つめ続けてどれくらい経っただろうか。彼女は心に決めた。心など本当は無いかもしれないが、それでも今は『恋の少女』になるうと、そう決めた。

「何だ？」

「えっと・・・」

「いつになく今日は緊張してるな、どうした？」

「嫌、えと、その・・・」

「？ どうした、言ってみろよ」

「私は！」

彼女は思いのたけをぶつける覚悟で思いを言葉に出した。

「あなたに死んで欲しいの」

「は？」

「ち、ちが、え・・・何で？ わたしは・・・iyaiya
iyaiya iyaiya iyaiya sin ita kun
aikonomamahaiyakonomamajiyayan
noninanndeomoi gade tekonaino?」
「ライト、どうしたんだ？」

この時、彼女は全てを悟った。あの時から既に、自分の崩壊は始まっていたことを。

「onegai,nigete」

その言葉は、彼の耳には言語としては響かなかった。何がしかの記号を並べ続ける彼女に問いかけ続けるが、返ってくるのは同じような記号ばかり。

「daisuki,daisukinanonni,mamorutekimetanoni,onichannannteienakatta,datteninnengenjyakattakara,demootatakakute,okikute,daisukidatta,gomennne」

不思議と後悔は無かった。大丈夫、思いは残る。彼がそう言ったのだ。どんな事があっても、私は彼を好きでいられたから。恋の魔法はここにもある。

「ライト？」

「sayonara,honnounidasuki,sinnjirarenaikurai」

彼女は彼を突き飛ばした。その力は大きく、飛んだ彼の眼には、彼女の泣きながら、笑っている顔が映った。そして、次の瞬間、彼女の全てが吹き飛んだ。

「やったか？」

「駄目ですね、最後に抵抗されました」

指令室内、遠隔操作を行っていた技術員から、結果を聞いてセイバーは小さく溜息をついた。まとめて二人片付けられるならそれでよかったが、思わぬ抵抗が入った事で、彼女はまた頭の中で軌道修正を行う。

「エミルは？」

「もう少しです」

その連絡を聞いたランスロットが眉をひそめる。

「本当にあいつにやらせんのか？ 酷な事するな、隊長さん」

「志願したのだ。断る理由が無い」

彼女が言ったのだ。自分がやると。それもまた、慈悲だろうとセイバーは思い、命じた。

「いつだって、運命はこんなものだ」

彼女が見つめるのは目の前の彼等か、それとも、もっと遠くの何かか、それは誰も知る事は無い。

「もうすぐだ」

「分かつてる」

カイルの言葉にエミルは頷いた。彼等が公園に言った事は、ライトに撃ちこんだ爆弾つきの発信機によって既に確認済みだった。

「本当にお前やるのか？ 何なら俺でも」

「大丈夫、できる」

ハンドルを握りながら、こちらに気遣うような視線を送ってくる彼に感謝しながら、彼女は既に覚悟を決めていた。友人として接し、必要な人間なら仲間に、危険だと判断すれば殺す。いつもやってきたことだった。それがいつもより、ほんの少し、辛いだけ。それだけのことだった。

「着いたぞ」

彼の言葉で彼女は全てを振り払った。もう目の前には彼がいる。

驚いたような、泣いているような、そして、憎悪。

「ありや、気付いてるぜ。お前が何撃ちこんだか」

「だろうね」

恨まれるだけの事はした。後悔は無かった。結局、こんな道しか自分は歩けないのだから。車を降り、彼女は彼と向き合った。

「エミル！！」

「ばいばい、ルシファ。好きだったよ」

お互い淹の音で何を言っているか聞こえなかった。

「俺は、お前を許さない！」

「だから」

いつのまにか、彼女の手には拳銃が握られていた。組織で採用されているAMMA9021スピオン 彼女が最も得意とする銃だった。「さよならだよ」

銃口が、火を噴いた。

「駄目よ、そんなもつたいたい事したら」

銃弾が、彼の目の前で止まっていた。いや、それは正確には目の前ではなかった。少しだけ、ほんの少しだけそれた銃弾は、彼の右耳に触れるか触れないかの位置で、停止していた。

「サディケル・・・」

エミルは信じられないものを見るかのように、目の前に突如現れた漆黒の女を目の前にして、その名を呼んだ。

「あら、私の事知ってた？ 光栄ね」

何でも無い事のように平然と言葉を並べる彼女に、まず最初に対応したのは彼だった。

「誰だ？」

「あの子も言ってたでしょ、サディケル。まあ、魔女の方が名前は売れてるけど」

「魔女？」

どこかで聞いた名前だった。たしか・・・。

「ほらほら、ぼやぼやしてないで、行くわよ」

「行かつてどこに？」

「裏側」

彼女が彼の腕を取り、何やら呪文を唱え始める。

「！ まずい！」

その呪文の意味するものに気付いた彼女が銃口をそちらに向ける。「こつちの方が速い！」

カイルが言うやいなや黒い何かがサディケルのもとへ飛ぶ。もう少しで当たる、というところで、またもそれは直前で何かに食い止められる。

「へえ」

サディケルの感心した声が響く。その黒い何かを止めたのは八本の、交差状に組まれたサリッサ。ただ普通のサリッサと違うのは、刃が本来柄であるはずの部分にも付いている事、そして、そのどれもが宙に浮いていることだった。

「まさか!」

「マジかよ!」

彼らが驚くのも無理は無かった。いくら何でも覚醒が早すぎる。いや、それ以上にその制御には無駄が無かった。まるで、すでに能力を使いこなしているかのような雰囲気、ルシファは既に持っていた。

「お願いします」

彼はエミル達に注意を向けたまま、サディケルへ言った。

「そうね、ばいばい、あの金髪がくると面倒だから」

そう捨て台詞を置いて、彼女は彼と共に、この世界から姿を消した。

第一章 第一節 明かされる『世界』

「なあ、ライト」

「んー？」

ある日の午後、二人で机に向かいながら、ルシファはライトに声をかける。15歳になったばかりの彼女は昨日の夜、両親から呼び出されていた。

「昨日、父さんに何か言われなかったか？」

「言われたよ、イリア人だって」

あまりにも平然と告げる彼女に彼は面食らった。

「じゃあ、何で落ち着いてるんだよ」

「どうしてでしょうね」

自分が聞かされた時は一週間は悩み抜いたものだが、彼女に悩んでいる様子は全く見受けられなかった。

「もしかして、俺より相当度胸あるとか？」

「当然、見てきたものが違いますから」

「何を見てんだよ・・・」

「色々」

「凄いな、やつぱり」

感心したように告げる彼を彼女はまじまじと見つめる。

「どうした？」

「べつつに」

「何だよ」

「自分で考えなさい」

「いつもそれだな」

「悪い？」

「いや、ただ何かあれば俺に言えよ」

「何それ、学校でいじめられたら助けに来てくれる？」

「いじめられたら、な」

「学校でルシファに会いにいつでもいい？」

「それは駄目だ」

「何で」

「さあな」

拗ねる彼女を受け流すかのように彼はさらりと流す。

「頼りになるんだかならないんだか」

「結局は自分で決めることだ」

「やっぱり、頼りない」

「そ、俺は頼りないの」

思えば、彼女とはこんな他愛も無い会話を繰り返していた気がする。何かを言っては言い返す。その繰り返し。そんな何とも思っていないかった日常が崩れて、そう崩れて・・・。

「やっと起きた？」

目覚めると、小さな部屋の中に彼はいた。木調で統一された部屋は、彼に一定の落ち着きを取り戻させることに寄与する事となっていた。彼は冷静に目の前に足を組んで座っている女性に話しかける。

「ここは？」

「言っただでしょ、裏側」

「裏側、今までの世界の？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言える」

「説明を、お願いしてもよろしいですか」

「あら、冷静なのね」

「ライトが、助けてくれた命ですから。無駄にはしたくありません」

「どこまで分かっている？」

「あの世界は」

彼はここで言葉を一旦切った。これを言うという事は、今までの自分を否定することにもなりかねない。けれど、その覚悟こそがこれから必要になる。無意識の内に彼は必要なその覚悟を心に持っていた。

「全て嘘だ」

彼の言葉を聞いてサディケルは押し黙った。なるほど、この坊やは頭がいい。評判どおりの逸材を目の前にして、彼女はさらに質問を重ねる。

「自分が人間じゃないってどうして思った？」

「至近距離でグレネードが爆発して無傷、どう考えてもおかしいと思いました。それに、エミルが車を前回で飛ばしたにも関わらず、こちらの方が早く家に着いたり。家は街の外れにありますから、車の方が有利なはず。それに、フェイトを突き飛ばしたり、相手の攻撃をかわしたり。どう考えても普通の人間にできる動きじゃない、それに最後のあれも」

「へえ、じゃあ世界が嘘っていうのはどんな意味？」

「色々疑問に思いましたが、最大の疑問点は戦争です」

「戦争？ ああ、あれね」

「テストですよ」

「よくわかってるじゃない」

「彼は言いました。軍需産業の圧力によって戦争を強制されているのだ、と。けれどそれはおかしい。何故なら、軍にとって必要なのは権力とお金、そして世論の後押し。そもそも何故戦争が人から支持されるのか。それはその後自国に更に大きな利益が得られると期待するから」

「けれど実際は」

「ええ、戦争は長期化の様相を示しています。誰がどうみても国力は互角の状況の中、すぐに終わる事は到底考えられない。けれど戦争は実際に続いています」

「何故だと思う？」

「だからテストなんです。大体、クリスマスとはいえ、あんなに国中が活気付いているのはおかしい。実際に戦闘、というものを目の当たりにして初めて思いました。辺境が軒並み壊滅しているにも関わらず、あの状況。どう考えたって、作威的なものを感じます」

「続けて」

「LIGHTSの施設とやらに行くための車の中、僕らは見たことも無い道を進みました。でも、それはおかしい。『僕ら』が見たことも無い道なんてあるはず無いのに。何故ならあそこには」

「ライトがいた」

「そうです。あのとき何も言い出さなかったのは分かる。まだフェイトに比べて自由があったとはいえ、彼女は組織の管理下に置かれていますから、下手に行動はできない。けれどエミルの銃弾、結果的にあれが問題でしたが、あの後彼女は、自分は彼女の銃弾で受信機を外された。少なくとも彼女はそう思い込んだ。彼女たちの間に何があったのかは知りませんが、少なくともそう信用する事のできるフアクターが何かしらあったんでしょう。」

それから家では二人、自分に真実を知らせる時間はいくらでもあったはずなのに、彼女が知っていた情報はそう多くは無かった。精々私の両親の情報と、自分が何がしかの理由でここに送り込まれたということだけ。任務も何も知らない中、彼女は知らない道を通る車の中で考えたはずです。おかしい、と」

「どうして？ 知らないのなら何も言い出さなくてもおかしくは無いでしょ？」

「いいえ、おかしいんです。知らないのなら、彼女はエミルに言わなくてはならなかった。『ねえ、ここはどこ？』とね」

「別に言わなくても問題はなさそうだけど？」

「ところが彼女はその後の私の行動を知っていたんです。誰と会っていたかも。知らない道を通ってきた所からどこかへ行くのは相当ハードなはずなのに」

「だって彼女は――」

「ええ、人じゃない。だからレーダーでも何でも駆使すればいい。これで最初の疑問に戻るんです。じゃあ、何故あそこが何か自分に言わなかったのか？ 調べる事は可能でしょう、別に一人や二人捕らえなくても、少し誰かの会話を盗み聞きするだけで事は足りたは

「ずですから」

「・・・」

「答えが何かは分かりません。この推測もでたらめかもしれませんが。けれど一つの可能性があります。彼女は私に隠したんです、何かを」

「何故？」

「それを、私には知られたく無かったから」

そして、改めて彼は彼女を見た。決意と共に。

「それを、知りたい。絶対に」

「いいでしょう、合格」

ここで初めて彼女は笑みを見せた。

「合格？」

「ええ、ただの馬鹿ならこのまま殺しちゃってもよかったけれど、それなりには考えているみたいだから」

「必死ですから」

彼女は座っていた椅子から立ち上がり、棚からある本を取り出した。

「これは？」

受け渡されたものを見ながら彼は尋ねる。自分が住んでいた世界には無かったものだ。

「本よ」

「これが・・・」

それは紙ではなく、携帯を一回り大きくしたような銀色の箱だった。周りにボタンが付いており、液晶にはこうタイトルが表示されていた。

『LIGHTS能力者養成マニュアル』

「これ・・・」

「LIGHTSの能力者はそんなに多いわけじゃない。どんな集団も力は喉から手が出るほど欲しいから、彼らは能力を覚醒しそうな人物を発見次第、自分たちが管理する世界に随時、強制的に送り込

む。そこで貴方は育てられた。彼らの話しに本当の事なんて一つも無いわよ。勝手に敵をでっち上げて、信じれば儲け物。見破られれば、監視付きで放っておくか、殺すか」

「一体、私は何なんですか？ 確かに能力者、と言える存在なんでしょうけど」

「さあ、貴方って結構謎が多いのよ。私が興味持ったのも、彼らがあまりにも貴方の存在をひた隠しにしてたからだし。お陰で苦労したわ、潜り込むの」

「隠す？ でもそれはどんな能力者も――」

「同じじゃない。私や、ロクニとかエデフィとか、結構な力を持つ者はその位の情報を得るのは楽なの。だけど、大概がつまらない人ばかりだった」

「・・・今回は面白そうだった」

「ええ、だって全力で対抗してきたのよ。あのセイバーが」

面白そうに言う彼女の口から出てきた名前を彼は反芻する。あの金色の女剣士。

「セイバー」

「ええ、彼女は有数の実力者の一人で、無駄が嫌いな。少しでも手間を省こうとするから、強者には強者をきっちりぶつけてくる。それはいつもの事だったけれど、少しちよっかいをかけたなら何と三幹部が揃いも揃って動いた。驚いたわよ、ここ100年は無かったことだから。だから、何かあるとその三幹部を追った、そして貴方を見つけた」

「よく来れましたね」

「私がこんなに早く潜り込めるとは思ってたんでしょ。甘く見られたものね」

大きく溜息をつく彼女に彼は冷静に応える。いくらなんでもこの位の嘘は見破れる。

「潜り込まされたんでしょうけど」

すると彼女は別の意味で溜息をついた。全く、賢すぎるというの

もつまらない。

「ふう・・・ここは笑うところなの」

「すいません、でも利用されてると分かって来たんですよ」

「ええ、どうせハムルスの爺さん連中に圧力かけられたんですよ。

ただど殺したくないから私でも情報が分かるように世界の気配を見せた。一部の実力者にしか分からないレベルで。考えてる事はすぐに分かったから、直ぐに来たわよ」

「ハムルス？」

聞いた事ある名前だった。確か軍需産業で手広く展開していた企業のはず、という彼の考えは彼女によって半ば肯定される。

「LIGHTSのスポンサー、かしら。詳しい事は興味ないから知らないけど、何やら色々やってるみたいね」

「あまり、いい噂は聞いた事はありませんけれど」

「あら、知ってた？ 人、武器、殺し、株価操作、思いつく悪事は全部やってるんじゃない」

「ええ、そうか・・・なるほど」

「何？」

「いえ、どうも彼らのやってることが矛盾だらけに感じていたので、その影響なのかな、と」

「ま、どこもそんなもんよ、組織なんて。来なさい」

第一章 第二節 『世界』への扉

部屋から出て、初めて彼はこの建物の構造を知った。リビングとダイニングが中央にあり、そこから五つの部屋が壁一面に並んでいた。「そこ座って」

言われた通りリビングにあるソファに座ると、一人の男が自分がいた部屋の右の扉から出てきた。

「へえ、裏側で最初に会った能力者がサディケル様だなんて、ついでるな、お前」

「サディケル様？」

長い黒髪をたなびかせながら、揚々とした男は盛大に型を落とした。顔の各パーツも、その体も豪快、という言葉が見事に似合う人物だった。

「何だよ、知らないのか？ 仕方ないな」

彼はそこらいかにかサディケルという人物が素晴らしいかを説明ししたが、10秒もしない内に別の男の澄んだ声によって中断される。

「アヌレイク、客人が困惑してるぜ」

「うるさいケルーズ、お前に言われる筋合いは無い」

いつのまにかルシファの隣に座っていた彼は、ルシファに握手を求めながら自己紹介を始めた。

「よろしく、名前は？ へえ、ルシファか。俺はケルーズ。ここでサディケル様の、まあ、手伝い？ 雑用？ まあ、そんな事をしていく。ああ、あいつはうるさいから放つとけ」

そう言っただけで彼は目の前の男を指差す。

「放つとけとは何だ？ お前誰を相手に――」

そんな言葉は鶴の一声で簡単に片付けられる。

「はいはい、分かってる？ 何も遊びで――」

「分かっております」

ケルーズがそう言って恭しく跪き、ルシファに向き直る。

「こちらへ」

彼らに連れられ外への扉を開くと、そこには一面の草原と湖、そして大きな一本立っているだけの、そんな空間が広がっていた。

「ここは・・・」

彼の疑問を先読みしたかの様にサディケルは答える。

「私の空間。狭いけれど、誰も入って来れないから、安心していいわよ」

アヌレイクがそれに同調するかの様に声を張り上げる。

「おう、ここなら思う存分力も使えるしな」

「力？ いったいどういうこと―」

「こういうことさ」

ケルーズの声と共に、彼の手に現れたのは、槍。そして、同じようにアヌレイクの手には大鉞が、握られていた。

「何を？」

「力試しよ、あなた、さっきの自分の力の感覚覚えてる？」

サディケルの声に彼はどこか曖昧な口調で答える。

「いや、それはまあ、何となく」

半ば夢中だった為、あまり実感は無かったが、それでも彼の体にはあの時の感覚がまだ残っていた。

「大丈夫よ、さっきみたいに力を出したショックで気絶、なんてことはもう無いでしょうから、やりなさい」

「おうっしや！」

アヌレイクの一声で、突如として戦闘は始まった。

「おいおい」

「おいケルーズ！ ぼけつとしないで援護しろ！」

彼らは予想外の苦戦を強いられていた。ひよつこと聞いていて最初は油断もあったが、そんなものは直ぐに消し飛んでいた。

「ちい！」

繰り出した槍がいとも簡単にかわされ、ケルーズは舌打ちする。
お返しとばかりすぐさま直線状に飛んでくるサリツサを、やっとの
思いで8本とも交わすが、どうにも手加減されているようで面白く
ない。

「はあっ！」

背後からアヌレイクが雄たけびと共に繰り出した攻撃は、2本のサ
リツサで受け止められ、逆に残りの六本が彼の周りを取り囲み、彼
本体は彼の頭上へと飛び上がる。そう、珍しく彼は飛行能力まで兼
ね備えていた。それを滅多にこの戦闘内で使用しないことが、彼ら
のプライドに傷をつけていた。

「六式」

「来るぞ！」

「分かつてる！」

戦闘を開始してから十分もしない内に、彼は何かしら口にするよ
うになっていた。注意深く聞き取ると、『式』、と彼が口にする
度、八本の陣形が変化していた。今ので、アヌレイクの周りを取り
囲んでいた六本は、六角形の陣を取り、その中に六芒星を浮かび上
がらせる。

「ぐうっ！」

「おい！」

次の瞬間、その範囲内に重力の負荷がかかる。身動きが取れなく
なり、彼は手にしていた大鉞を地面に落とす。

「これでも！」

ケルーズは槍を両手で持ち、短く呪文を唱える。

「グライスルト！」

その瞬間槍が肥大化し、彼の下へ投擲される、ガルシファはすぐ
さま残りの二本を十字状にさせ、唱えた。

「八十式」

投擲された槍は十字のサリツサの中心部に吸い込まれる様にして
受け止められ、その向きを彼に変える。

「つて、ちょっと待て！」

彼の願いも虚しく、彼の放った技は、彼の下へと飛んで来る事になる。

「すみません」

申し訳なさそうに上空で頭を下げる彼は、もう悪魔にしか見えなかった。

「だつたらすんー」

目の前に落ちた槍の衝撃で、彼は数回回った拳句、湖の中へ落ちていった。

「すみません」

ケルーズの部屋で、ベッドに横になっている彼に対し、ルシファは先ほどから謝罪し続けていた。最初は慎重に戦いを進めていたが、途中から自分の中にある力をどれだけ使えるか、ということに重点を置いてしまっていたため、相手の状況に目がいついていなかった。「いいって、お前強いな。本当は能力覚醒してからどの位経つんだ？」

ケルーズは先ほどから平謝りする彼に何でもなさそうな声で答える。実際水の中に落ちたお陰で衝撃は随分と緩和されていたし、あれをモロに食らったところで、自分の技くらいは自分で防げていた。ただ、目の前に落ちたお陰で、何の対応もできないままクルクルと回る羽目になったのだが。

「昨日です」

「は？」

こちらの声はアヌレイクだった。信じられないといった目で、何でも無い風に答えた彼を見る。

「お二人とも手加減していただいて、有難うございました。おかげで、少しは自分の戦い方が見えてきた気がします」

「・・・・・・・・」

嘘をついているようには見えなかった。負けたのか、自分が。この

昨日能力を得たばかりの少年に。彼は自分の思い上りを恥じた。いくらか名を売っていたところで、強者は突然現れる。それを彼らは痛いほど知っていた。

「時代は流れるんだな」

「え？」

「いや、何でも。強くなれるぜ、お前」

サディケルと初めて会ったときに感じた程、屈辱的でも無かったが、それでも彼は充分強者の枠組みに入る人物だった。

「ようこそ、『グリゴリ』へ」

「俺達は、まあ言うなれば調停者、かな」

「調停者、ですか？」

戦闘後、ルシファは彼らから説明を受けていた。

「ああ、例えばLIGHTSは、実際に世界を周り、必要とあれば世界を制圧もするし、表に自分たちの世界を持っている。それに対して俺達は表には世界を持っていない。あるのは裏側にあるこんな小さな世界が後数十個つてところかな」

「はあ」

「ああ、それに俺達はLIGHTSほど世界に干渉はしない。揉め事が起きても、あくまで解決すればその世界からは出て行くし、干渉しない」

「何のために？」

「裏側の安定のため、というのは建前で、実際はその褒賞が目当て。俺たちの存在を知ってるような連中が末端に接触して、俺たちがその対価を決める。まあ、大概の依頼は受けてるんだけどな」

「食っていけないからな」

「・・・それを言うな、アヌレイク」

「あなた方は、普段から？」

「ああ、だからサディケル様の雑用、って言ったんだ。あの人は自分では動かないから、基本俺たち任せ。まあ、何の能力も持ってな

い人間同士のいざこざ何て、俺達で充分」

そこでドアを開く音がして、サディケルが室内に入ってくる。

「好都合でしょ？ 分かるかもしれないわよ？ 貴方の知りたい事」

彼は一瞬考え、すぐに結論を出した。どの道、やる事は変わらないのだ。ライトが何を知ったか知りたい、今の彼の生きる理由はそこにあった。

「はい、やらせて下さい」

「ここ、ですか？」

「そう、まずはこの世界に行きなさい。世界移動の呪文は覚えてたわね？」

「はい」

彼はその後、『グリゴリ』制服に着替えていた。黒を基調としたその服は、今の自分にあっている様な気がした。これから、何が待っているのか、分からなかったが、彼は世界への扉を、自分で開いた。

「行きます」

第一章 第三節 『世界』との接触

「逃げられた、な」

「くそっ！」

セイバーは壁を叩き、いつもは決して見せない感情を見せる。

「魔女はともかく、あいつの覚醒は予想外だったなあ」

セイバーたちはとある世界にある本部へと戻り、事後策を協議していた。

「呑気な事を言っている場合か！」

鋭い剣幕を見せるセイバーにランスロットは飄々とした声で答える。

「仕方ないだろ？ 予想外だった事は事実だ。現にあいつは今頃魔女と一緒にだ。もう、こちらからは手出しできない」

「余計な事を・・・」

「まったくだな」

協議するとはいつても、結局の所彼らにはどうすることもできなかった。

「覚醒するパターンは色々あるが、あれは・・・」

「憤慨」

ボルクの言葉に彼は同意を示すように頷く。

「だろうな。あのライトの事がよほど大事だったらしいな、あの坊やは」

「そんなことは関係ない」

セイバーは素早く命令を下す。

「魔女の所に行ったという事は、恐らく『グリゴリ』に入っただろっ」

「だろうな、表に出てきたところを待つて叩く。それしかないわな」
正直彼はもう無理かもしれない、と諦め始めていた。カイルのあれを初見で完璧に防いだ腕、どう考えても弱くは無い。まさか自分

たちより上、ということはありませんだろうが、バックにはあのサディケルがついている。サディケル相手に勝てるのは全世界ひくくめて僅か数人。ここにその内の一人がいるが、彼女は逃げるのがとにかく上手い。追いかけられる相手ではなかった。

「サディケルか・・・」

その数人の内の一人が口を開く。彼女とは幾度と無く戦ってきたが、明確な勝敗が付く勝負は未だ無かった。

「はあ・・・」

エミルは部屋に本部に戻った後、部屋にそのまま倒れ込んだ。撃ち込んだはずの銃弾は、結果的に当たる事は無かったとはいえ、明らかに狙いからは逸れていた。

「気にすんな、無理も無い」

そう言つてカイルは励ましてくれたが、今はそんな気遣いも彼女には辛かった。撃てなかった、ただその事実だけが彼女に重くのしかかった。

「何故、どうして？ 任務なのに、撃たなきゃだめだったのに」

繰り返される自問自答の中、無意識に彼女が求めたのは胸のペンダント。

「あつ」

駄目だ、触つてはいけない。思いは捨てたのに。そんな彼女の心の声は、実際の泣き声で霞んでいった。

「ルシファ・・・」

彼女は一晩中泣き続けた。ありもしない温もりを求めてすすり泣く彼女は、もはやただの『少女』と何ら変わりはしなかった。

「ふむ、逃げられたか」

「なかなかやつてくれるな、あの『魔女』は」

本部と世界を同じくする空間のまた別の場所で、彼らは話し合っていた。暗闇の中、誰が誰とも分からぬ部屋の中で、十人程の影が

ゆつくりと言葉を発していく。

「まあ、問題ありますまい。既に手は打ってあります」

「ほう、まさか」

一人の声に一人が反応する。声だけではそれぞれの個性が全く見えず、まるで同じ人物がひとりで話しているかのような錯覚を聞く者に与える。

「ええ、簡単ですよ。どんなに力があるうと、所詮ひよっこ」

「分かった。任せよう」

こうして、これだけの会話で、彼の運命は決定する。

「精々、今の内に束の間の自由を満喫することだ、ルシファ」

「ここ、か」

彼は新たな世界へと降り立っていた。見渡す限り赤土の台地が広がるそこには、生き物の気配は微塵も感じられなかった。

「どうだ？ 初めての異世界は？」

そう隣でこちらに声を掛けてくるのは、カリジュ。今回の仕事のパートナーだった。

「まだ、よく分かりません。魔物の討伐、との事でしたが」

「そ、だけど普通の人間からすれば厄介なだけ、俺達なら楽勝楽勝」
明るく話す彼の声にルシファは幾分か緊張が和らぐ。大きな金色の瞳は、人懐っこそうにこちらを見てくる。ふと、その中に自分が見えて、彼は思わず目を伏せる。

「どうした？」

「いえ・・・」

彼の問いかけにも彼は上手く答えられなかった。ライトに、いやエミルにも助けられて残ったこの命。果たして、彼女の命ほどの価値が自分にあるのか、彼には分からなかった。

「行こうぜ。ちゃっちゃと終わらせちまおう」

「ああ」

カリジュの声に彼は努めて明るい声を出した。笑顔でいよう、せ

めて自分は彼女の分まで、この世界を生きよう。そう思い、彼は第一歩を踏み出した。

「あれ、おつかしいなあ」

歩き出してから数十分程経った後、カリジユは足を止め、周りを見渡す。

「何か？」

「いや、そろそろ魔物の出現地点なんだけど・・・」

ルシファも同じようにして周りを見渡すが、魔物どころか、草一つ生えてはいなかった。

「何もいませんね」

「な？ だからおかしー」

「！」

彼の言葉は最後まで言い終わる前に、地面が揺れた。

「これは！」

「来るぞ！」

いい終わるやいなや彼の手には見たことも無い武器が握られていた。近い物でそれを表現するならそれは銃だったが、銃口が無く、変わりにそこには剣が付いている。まさに剣銃だった。

「これか？ カリジユスペシャル」

不思議そうに見つめる彼にカリジユは自慢気に手にしている物を掲げて見せた。

「・・・」

「何だよ？」

「いえ・・・」

ネーミングセンスに同調はできなかったが、それなりの実力者なのだろう。そう彼は勝手に判断して、自身も力の展開を開始する。

「ほう、すげえな」

展開が終わると同時にカリジユの賞賛の声が響く。その間にも揺れは激しさを増し、とうとうその正体が目の前に現れた。

「おいおい」

「へえ、これがドラゴン」

馬鹿でかい雄たけびと共に現れたのは、カマスドラゴン。

「馬鹿、逃げろ！ 勝ち目あるか！」

「え？」

振り向くとそこには既に逃亡している同僚の姿。

「え、でも任務が」

「命捨てたいのか！」

言っているうちにドラゴンは口から大量の土砂を吐き出してくる。

「80式」

彼はそう言うやいなやサリツサを展開してその土砂を反射、され対象の右へと回り込み、今度は3本を展開させて唱える。

「32式」

目潰しされる形となったドラゴンはようやく彼を視界に納めるが、その時既に頭上に矢印状に展開されたサリツサが、頭から体までを引き裂いていた。

「・・・ごめん」

でかい音をたてて倒れるドラゴンを目にして彼は小さく謝罪の言葉を告げる。

「強い・・・」

カリジュは目の前の光景が未だに信じられないでいた。お互いほとんどひよっこ同士だから、と彼は簡単な任務が与えられるとばかり思っていたのだ。ところが現れたのは滅多に現れないドラゴン、今のはその中では弱い部類に入るものだったが、一人で倒すにはそれなりの技量が必要とされていた。

「これ、どうします？」

気付けばルシファはこちらに戻ってきていた。逃げたのを咎める訳でもなくさっさと告げる彼にカリジュは多少の後ろめたさを感じながらも先輩として、彼に命じた。

「依頼者を探せ」

「あ・・・」

ルシファも思い当たった、そうだ、倒したところで褒章が出なければ意味が無い。

「どこ・・・いるんですかね」

「知らん」

ただ、彼らの周りには乾いた風が吹くだけだった。

「いました、あそこ！」

「よくやった！」

結局彼らが取った方法は、ルシファの能力をフルに生かすこと。つまり、縦横無尽に当たりを飛び回ることだった。10分ほど辺りを飛び回った結果、彼は小さな集落を見つけたいた。

「やっと来てくださいましたか」

「探すのにこつちも一苦労だったが」

何もしていない彼が、目の前の初老の男性に皮肉たっぷりに答える。

「すみません、どうやら連絡ミスがあったようで」

申し訳なさそうに話す彼にカリジュはさっさと本題にはいる。

「それで褒章だが」

ここで依頼者は驚いたような顔を見せた。

「え？　これからでは？」

「え、さっきのドラゴンでは？」

「は？　ドラゴン？　そんなものここにはいませんけれど」

「・・・」

「・・・」

結局その後、

「あー、もう！　何なんだよ！」

「・・・」

彼らはその集落から数キロ離れた高台に立っていた。カリジュがいらついている理由は至極明快だ。何せ、倒さなくてもいい物を勝手に倒していたから。

「あのドラゴン、縄張り荒らされて怒っただけだよ」

ルシファは先ほどから落ち込んでいた。まさか降り立ったあそこが巢のど真ん中だったとは、彼は知る由も無かった。

「気配隠すのだけは上手かったな」

「はい、全く気付きませんでした」

だからこそ、彼らは勘違いしたのだ。結局カマスドラゴンでも何でも無かったドラゴンみたいな何かは、ただの馬鹿でかいトカゲだった。

「逃げた自分が恥ずかしい」

「私でも倒せたものでしたし」

慰めるように声を掛けたルシファに彼は不満げな声で言う。

「なあ、おい」

「？ はい？」

「その言葉遣い止める。気持ち悪い」

「いえ、でも先輩ですし・・・」

なおも躊躇する彼にカリジユはとどめの言葉を告げた。

「こんな命の張ってる所で俺を萎えさせたいのか？」

「あ、じゃあ、はい、分かった」

「よろしい」

ようやく納得した様子の彼を満足げに見つめた矢先、誤算は起こった。

「それにしてー」

突如として彼の体がルシファの目の前から消える。

「カリジユ！」

叫んだときには彼の体は真っ二つに引きちぎられ、鮮血が彼の周りを舞った。

第一章 第四節 ぶつかり合う『世界

「くそ！」

直ぐに展開し、上昇。が、見渡してもどこにも相手が見当たらない。

「どこだ？」

その瞬間何かがこちらに飛来する。

「！」

気付いたときにはそれはもう目の前にまで迫っていた。

「つつ！八十式！」

何とか受け止めたが、跳ね返すことなくそのまま勢いで押し切られる。地面に着地し前を向いた彼の目前に剣先が突き付けられる。

「ここにいたか」

「セイバー・・・」

彼は目の前にいる彼女の眼を真っ向から受け止め、その名前を呼んだ。当の本人はその言葉も視線も気付いていないかのように、その剣を振りかぶる。

「悪いが、死んでもらう」

が、彼の目にはまだ余裕があった。

「嫌だね。六式」

「なっ！」

その瞬間残りの六本が彼女の周囲に展開し重力を発生させる。

「ぐうつつ」

その隙に彼は距離を取り次の攻撃に移る。

「四十五式」

残りの二本が縦方向に並び、彼女に襲い掛かる。が、既に彼女は重力に抗い自身を転回させ、周りの六本を叩き切っていた。

「ライトニング」

剣を振った瞬間その剣筋から光の竜が飛び出してくる。先ほど飛

来して来たのもこれだった。その竜は飛来する二本を飲み込み、彼へと向かう。

「まずい」

彼は上昇するも今度は追尾され、中々振り切る事ができない。

「八十九式！」

そう言い放つと、四本のサリッサが縦に二本、二列になって並ぶ。

「これなら！」

「甘い」

彼女はその隙に背後に跳躍し、最後の攻撃態勢に移る。

「終わりだ」

「そつちがな」

そう言った瞬間光の竜はそのサリッサの間に入った瞬間、ルシファの頭上を飛び越え、セイバーの下へと向かう。展開されたサリッサはいつのまにか、竜とセイバーの橋渡しをするかのような形を取っていた。

「効くとも思ったか」

セイバーは竜を切り捨て、なおも彼の方へ向かう。

「思わないさ」

彼はすぐに残りの四本を彼の前に横に展開し、剣を受け止める。

サリッサの間から漏れてくる圧力に一瞬顔を顰めるが、それに負けじと彼は問う。

「何の用だ！？」

「知る必要は無い！」

さらに彼女は力を込め、彼を叩き落とす。

「ぐはっ！」

「さらばだ」

そのまま下突きの要領で飛び込んでくる彼女にサリッサを飛ばすも、全て弾き飛ばされる。対抗する術は、もう彼には残っていないかった。

「くっそーーーーー」

雄たけびと共に、彼らの目前に現れたのは、ドラゴンだった。

「何！？」

「嘘！？」

そんな彼らの声を無視し、そのドラゴンは正真正銘のプレスを空中で身動きの取れない彼女へと吐き出す。

「抵抗するな！」

彼は再び彼女にサリッサを飛ばす。彼女を最小限の力で地面へと着地させ、自身も体勢を立て直す。

「まさかお前が呼んだのではなかるうな？」

「できるなら始めからやつてる」

彼女の問いかけに彼は真顔で返す。ドラゴンはこちらに向き直り、不適な笑みを浮かべた。

「いるじゃん・・・ドラゴン」

「ほう、珍しい。ヘンダーだな」

「ヘンダー？」

すると彼女はそんなことも知らないのか、という目でこちらを見、解説を始める。

「時々出てくるドラゴンだ。自分で世界移動できるのが特徴で、稀にこうして鉢合わせる。中々歯ごたえのある面白いやつだ」

「・・・」

「何だ？」

黙って彼女を見つめる彼に彼女は不審そうに彼に声をかける。

「以外に饒舌だな」

「黙れ」

「すみません冗談です」

剣先を向けられ彼は降参の意を示す。と、そこにまたプレスが飛んでくる。両者ともそれを左右にかわし、挟み撃ちの格好を取る。

「はあ！」

咆哮と共に俊足を飛ばし、一刀両断しようとするセイバーと、八本のサリッサをドラゴンの腹へ飛ばすルシファ。それで勝負は付き

たかに見えた。

「グアア！」

その雄たけびと共に大きな図体がそれへ飛ぶ、その下を潜り抜けるような形となったセイバーとサリツサは向きを変え、攻撃を繰り出す。風圧に跳ね返され届かない。

「あれはどん位強いんだ？」

「ここまでではないはずだが・・・」

セイバーは自分と彼の実力を正確に推し量った結果、一撃で方が付くと考えていた。

「おかしい」

そう言っただけ彼女はライトニングを放つが、当たる直前に光の竜は掻き消えた。

「おいおいおいおい」

ルシファは驚愕する。自分があんなに苦労した技を一瞬で。正直、勝てる気がなくなっていた。

「おもしろい」

「へ？」

そう言っただけ、彼女の周囲には光の紋様がいくつも浮かび上がり、それは剣へと集積されていく。

「タケミカヅチ」

そう唱えた瞬間剣が幾倍にも肥大化し、光を纏う。

「はあっ！」

そして上空へと舞い上がり、目の前のドラゴンを一刀両断した。

「・・・」

大きな音と共に落ちてきた死体を見て、彼は考えていた。先ほどいないと言われたはずのドラゴンは何故か絶妙なタイミングで現れた。世界移動ができるという事は、依頼者がいう魔物とは違うということだ。つまり

「・・・」

それは、まだ待たなければならぬことを意味していた。

「つて、おい！」

気付くとセイバーはカリジユの下へ向かっていた。慌てて間にはいり、彼女の進路を塞ぐ。

「何をする？」

「それはこっちの台詞だ」

「どけ、このままでは忍びなかつた」

「えっ」

彼女は彼の脇を通り抜け、彼の前に立ち、祈りを捧げる。そして次の瞬間剣を天に掲げ、太陽から照らされる光を徐々に集めた後、彼に照射した。

「！」

一瞬で灰となり、舞い上がる灰を見て、彼は驚愕する。

「供養した。私なりの方法ですまないが、死んでいては元の世界にも戻れない」

「いや・・・ありがとう」

世界移動には力だけでは無く、意思が必要だった。それも、必ずこの世界に行く、という明確な意思が。死んでいては連れて行くこうとしても、どこかでまた別の世界に紛れ込むのが目に見えていた。

彼は彼女の後ろ姿から注意を逸らさず、見つめ続ける。あれを倒した時の彼女を見てすぐに分かった。自分と相手にはとんでもないほどの力の差がある。本来なら瞬殺できるレベルの自分と何故あんなお遊びをしたのかは分からないが、まともにやり合えば勝ち目が無いということは分かっていた。

「警戒するな。今日はもうやる気が失せた。見逃してやる」

「は？」

ほかんとする彼を見て、彼女は慌てて、言葉を付け足した。

「勘違いするな。先ほどの礼だ」

少しだけ、ほんの少しだけ微笑んだ後、彼女はその世界から去った。それを見届けた後、彼もまた、その数時間後世界から姿を消した。

結局、魔物は現れず、あつたはずの集落は姿を消していた。

第一章 第五節 信仰の『世界』

「甘いですねえ」

「誰に言っている？」

本部から帰還した彼女を廊下で出迎えたのは、その体には大きすぎるコートと帽子を身に付けた小さな少年だった。セイバーの言葉を受け、字面だけは丁寧な言葉に変える。

「いえ、すみません。ただ殺せ、と命令を出したのは貴方ではありませんでしたか？」

「それがどうした」

「無責任では？ 彼女にあんな事をさせて」

「エミルについては処分する気は無い」

「貴方はそれでいいんでしょうけど、彼女はそうもいかないでしょう。ただでさえ、隊内の立場は前々から微妙なものでしたのに」

「それに関しては、ノーコメントだ」

「ふうん、まあいいですけど。頑張ってください、隊長さん」

言い終わると彼は、霧のように姿を消した。

「気にすんなよ」

「分かっている」

ランスロットが反対側の角から出てくる。全て聞いていた彼は、何とも無い風に彼女に言う。

「昔からの癖だな。ちよつと将来に見込みがありそうな奴に甘いのは」

「貴重な才能はなるべく潰したくは無い。それに」

「それに？」

「・・・何でも無い」

聞いてきた彼の横を通り、彼女は歩き出した。そう、それに、あれが現れる直前まで自分を殺そうとしていた彼女を彼は助けた。生き延びたもの勝ちの風潮が色濃いこの時代に、あんな行動を取る者は

稀だった。

「そしてあれか・・・」

あのドラゴン、戦って感じた強さは以前の比ではなかった。そもそもこの世界に来たのは、何がしかの強い力を感知したからだ。最初はルシファのものかと思ったが、どうにも力の質が違ふような気がした。

「調べてみるか」

何かが始まっているのかもしれない。この時の彼女の直感はいろいろな意味で大当たりしていた。

「すみません」

彼はサディケルに頭を下げた。結局彼が最初の仕事でできたのは、出会ったばかりの同僚を一人失った事だけ。何もできずに帰ってきた事に罪の意識を感じて、彼は謝らずにはいられなかった。

「セイバー相手に死ななかったただけ上出来。謝る必要なんてどこにもない。そんなことしてる暇があるなら強くなりなさい、もっと」
リビングでソファに横になっていたサディケルは起き上がりながら彼に告げた。

「・・・」

俯いて拳を握り締める彼に対し、彼女は続ける。

「いい？これからこんなことは何度でも起こる。当然、貴方も私も何時死ぬかなんてわかったもんじゃない。けれどね、その生きている時間を後悔になんて使うのは止めなさい。そんなもの、死んでからいくらでもできる。行きなさい、話しは以上。次の仕事はまた今度伝えるから」

「・・・はい」

そう言つて、部屋へと戻つて行く彼を見送り、彼女は溜息をついた。まさか、セイバーがこんなにも早く動いてくるとは。正直、彼から話を聞かされた時は心底驚いたし、帰ってきただけ本当に上出来だった。でも、と彼女はさらに考えを深める。彼に言われるまでも無く、セイバーは強い。その彼女が何故彼を殺さなかったのか、興味

があつた。

「何かあるのかしら」

笑みを浮かべながら、彼女は決めていた。いや、彼にちよつかいをだそうとした時点で、既に決まっていたのかもしれない。この件に首をつっこむことを。

「久々にあの金髪娘にも会えそうだし」

あのどこまでも真つ直ぐな瞳を思い出して彼女は噴出しそうになる。全く、どのような環境で育てられれば、あんなふうになれるのやら。

「かんぱーい」

月を見ながら、彼女は持ち手のいないグラスに自分のグラスを軽くぶつけた。

「凄い」

「だろう？ この国一番の繁華街だからな」

一ヶ月後、彼はまた別の世界に来ていた。現地で自分を迎えてくれた案内人と共に、彼は両側に並び立つ店を興味深げに見つめる。ある者は家畜を連れ、あるものは白菜の様な野菜を背負い歩いている。産業の発展度だけを考慮すれば、その国は決して豊かな国では無かったが、他の世界には無い活気に満ち溢れていた。

「あれは？」

彼が目にしたのは、御輿の様なものを担いで歩いてくる一団。今まで賑わっていた通りは一瞬にして静まり返り、次々と脇へと移動し、その御輿へ頭を下げた。

「ほら、名にやってるんだ」

そう言われて彼も周りに習って頭を下げる。目の前を通り過ぎていく御輿の中には、人の気配が確かにあつた。

「あれは？」

謎の一団が通り過ぎてから、彼は今の状況の説明を案内人に求める。

「あれはここら一帯を治めている領主、みたいなもんだな。ちなみに、ああやって領主に敬意を払わなければあなる」

彼が指差した方向を見れば、裸の老若男女が鞭で打たれている光景が目に入る。時折、悲鳴があがったり、周囲の人間が痛ましげに彼らを見るが、止めるものは誰もいない。

「罪人扱いか・・・」

「そう、あんたもこの世界にいる間は用心した方がいい、ほれ、鍵はこれ。宿はここ」

彼から鍵を受け取り、彼は今日宿泊する宿を見上げる。会話なら力を使えばどうとでもなるが、『紅葉荘』、と書かれた看板は彼には読めなかった。その宿の周りには、紅い葉っぱが覆いかぶさるようになって、その宿を包み込んでいた。

「何で片付けないんだろう？」

彼の感想に案内人は思わず噴出す。

「ま、まあこの世界の住人の趣味みたいなもんだ。じゃあ、今日の深夜ここで」

「分かりました」

彼とは一旦別れ、ルシファは宿への一步を踏み出した。

「さつきから思っていたんですが、その服は？」

彼は目の前を歩く女性の後ろに続きながら、疑問を口に出す。それでもそうだったが

、一枚の布で体を包み込むようにして巻き、それを紐で綴じる―彼が何か言っていた気がするが忘れた―何かが、彼は気になって仕方が無かった。

「ああ、多分和服のことを言われているんでしょうね。お客様のその服は外国の？」

「え、ええそうです」

今日の彼はまだ制服ではなく、Ｔシャツにジーンズそしてその上に上着を羽織っただけのラフな格好をしていた。

「この国に昔から、と言いましても今では大分昔とは変わりました

けれど、よろしければ後で着て見てください」

そう言って彼女は目の前の紙の扉を横に引き、彼を部屋へと招き入れる。

「何これ・・・」

「あら、畳を御存知ない？」

「あ、すいません。無知なものですから」

正直、世界についてあらかじめ情報が欲しい。この時彼は心底そう思った。

「い草、というものを使って編んであるんです、外国ではふろーりんぐというものだとか」

「はい、フローリングですね」

どうやらこの世界の国ごとの文化的差異は自分がいた世界よりも大きいらしい、彼のそんな考えを他所に、彼女は部屋を出て行こうとする。

「あ、あのすみません」

「はい？」

彼は自分にとって死活問題ともなる疑問を口にした。

「お風呂とトイレはどこですか？」

「へえ・・・温泉、ねえ」

湯船に浸かりながら彼は珍しい体験をしていた。少し早い時間らしく、入っているのは自分ひとりだけだった。外で湯に浸かるという行為そのものが楽しくなり、腕と足を伸ばしてみる。

「はあ・・・」

この一週間の中、思えば随分働いた気がする。ここよりも危険な世界ばかりで、初めて彼は異世界でリラックスできる時間を得ていた。今日の仕事は単純作業だし、最初に自分で調査した結果、見つけたものはこの世界の中だけで完結するもので、『ハムルス』との繋がりはどこにも無かった。そうと決まれば仕事を片付け、さつさと帰る。干渉する気は無いし、それでこの世界が更に崩れてしまえば元も子もなかった。

「うつ・・・」

「どうした？体調が悪そうだが？」

「いえ・・・」

夕飯時、生の魚を食べてみたのが失敗だったのだろうか、それともちゃわんむしとやらが駄目だったのか、それともあの臭い豆か。無理して食べたが、白飯以外は見たことも無い料理ばかりで、彼の胃は爆発寸前だった。

「ほら、これを打ち合わせどおりに。しっかりしろ」

「はい・・・」

彼は気を取り直して小包を受け取る。中に何が入っているかは知らないが、相当重要なものなのだろう。でなければ大金を支払ってまで、自分達には頼まない。

「ここに、ですね」

「頼んだ」

そう言って彼は案内人の役目を終え、裏側へと戻って行く。彼は誰も周りにいないことを確認して自分の周囲に力を展開する。

「・・・」

静かに自分の周囲を飛び交うサリツサを見て、彼はゆっくりと浮かび上がる。目指すはここから500キロほど北にあるこの国の辺境、そこが今回の目的地だった。2時間ほどで着くだろう、と彼は見積もりを立て、飛び立った。

「星・・・か」

先ほどいた地上から遙かに高高度を飛んでいた。周囲を巡るサリツサが外からの干渉を防ぐ役割を担い、彼は空の散歩を楽しんでいた、のに。

「はあ・・・」

彼はあからさまにテンションを落とし、後ろへと注意を向ける。

誰かにつけられていた。

「対象はこちらにはまだ気付いていません」

「よし、ならば最後まで背後に着け、渡す相手が分かれば思惑も分

かる」

彼女は彼の遙か下を飛んでいた。黒尽くめの服は周りの闇と相まって、彼女の姿を隠していた。

「大丈夫、大丈夫」

「何がだ」

「ひっ！」

驚いて落下しかけた彼女を彼が掴む。

「何をしている。返答しだいでは」

「縛るのか！」

「・・・」

「さては、裸にして鞭で打つ気か！」

「いや、これで串刺しにしようかなって」

何だかどうでもよくなり、彼は周囲に展開するサリッサの一本を握り刃先を突き付ける。

「え、ええっと」

「5」

「え？」

「4」

「ちょ、ちょっと待って」

「3」

「いや、ほら5秒追加」

「2」

「すいませんつけてました」

「・・・」

「何、言ったでしょ。早くどけて」

「1」

「ごめんなさい許して全て吐きます」

「0」

「どうして!？」

ここでルシファの時計が鳴った。

「時間だ」

「は？」

「奴らがくる」

ここで彼女も思い当たった。正直この男を尾行するのに必死で肝心な事に頭が回っていなかった。

「戦えるな？」

戦う必要は無いが万が一という事もある。そう考え尋ねた彼の耳に力強く返答が帰ってくる。

「勿論」

「ならいい」

そう言つて彼は力を更に込める。先ほどから周りを巡るサリツサのスピードがどんどん上がっていく。

「能力者？」

「じゃあ、何で飛べてるんだよ」

そう言い残して彼は飛来する物達へ体の向きを移動させ、唱えた。
「三式」

八本のサリツサが凄まじいスピードで回転しながらランダムに移動し、相手に襲い掛かる。

「ギャグルアア！」

「朱雀・・・」

彼の技が全てかわされるのを見て、彼女は改めて現れた物の強さを思い知る。この世界の神と呼ばれる物の一つ朱雀。その翼は見る者を魅了し、崇める者もいたが、今はこちらが縄張りに入った立場だった。

「やつぱりかわされたか。まあ殺したら罰が当たるな」

なおもこちらに向かつてくる朱雀を見て彼は落ち着き払って態勢を整える。誰であれ何であれ殺したくは無い。どうすればこれをあそこに連れて行き、小包を開放するか、それが問題だった。

「やつぱりあんた！」

「ああ、知ってたのか。こっちもあんたの正体は分かった。申し訳

ないがこつちも仕事だ。悪く思うな」

「ちよつと待て！」

彼は全速力で離脱し、朱雀から距離を取る。が、いきなり攻撃をくらった朱雀は彼を上回るスピードで彼に肉薄し、炎を周りに顕現させる。

「ほう」

自身に肉薄されてなお彼には余裕があった。朱雀と戦え、と言われたときは我が耳を疑ったものだが、詳細を聞けば、それは単純作業だった。

「ほら」

彼はまたもやさつきと同じようにサリツサを飛ばす、今度は直線的ではなく、朱雀の周りに一旦配置し、そこから逃げるように移動させる。問題は上手く誘導できるかどうかだが、ここまでは上手くいっていた。

「グア？」

朱雀はサリツサの後を追いつけ回す。絶大な力を持つといっても何も神の如き知能を持っているわけでもない。適当に後は展開させながら彼はゆつくりと朱雀を誘導していった。

「よし、見えた」

それから2時間後、予定通り見えてきた物に安堵し、彼は小包を空にばら撒いた。

「ああ・・・」

後ろから追つて来ていた彼女が落胆の声を挙げる。ばら撒かれたのは金銀の小判だった。

「やっぱり」

彼は納得して朱雀の方にサリツサを向ける。するとその炎がみるみる内に膨れ上がり、八本のサリツサばかりか空一帯を赤に染める。

「目的はこれか」

その影響で小判は液体になり、下で待っている同僚達が回収、担当の物がある程度の形の型に入れ、裏でも通用する通貨にその形を

作り変える。これが報酬、そして依頼者の目的は下を見れば一目瞭然だった。

「あーあ、こんなものに使うなら頂いたのに・・・」

「価値なんて人それぞれだ。俺は仕事だったからしたまで。お前はそれを盗もうとしただけ。盗賊か何か？」

「義賊だ」

「成る程、泥棒ね」

「だから」

怒り出すか彼女の言葉を遮り、彼は炎を巻き上げらせる朱雀を見た。

「この世界には4方向にそれぞれ神様が一体ずついるんだろ？一度くらい他の方角の神様を見たい、なんて可愛い夢だと俺は思うぞ」

北方地方特有の雪が降る中、彼は下で喝采を挙げる住人達を見た。

「じゃあな、ああそうだ」

「何？」

彼は隠し持っていた何枚かの小判を彼女に手渡した。

「くれるの？」

「いや、賄賂」

「賄賂？ 何のために？」

「それで殿様とやらにあの鞭打ち制度無くすように頼んでみてくれ。何なら、こんなものを見せてもいい」

「げっ！」

彼が手にしていたのは、領主に送られた商人からの手紙。自身の積荷の関税を操作する事を黙認してくれるよう依頼する内容で、そこには女性が5人献上されていることが示されていた。

ちなみに、彼は賄賂と言う概念をこの世界で始めて知った。

「見つけたけど、いらないし」

「どうやって・・・」

彼はウインクして言った。

「禁則事項だ」

第一章 第六節 『世界』の成れの果て

「ふう」

彼は今自分が住んでいる世界へと戻ってきていた。あれから、いつまでもサディケルと共に住むのは色々とまずいと考え、一つの世界を提供してもらっていた。小さな世界ではあったが、一人で落ち着くには充分だった。小さな家が一軒建ち、その周りには石畳が続く簡素な空間。サディケルだからこそその技術と力に彼は感嘆する。

家の中に入り、彼は上着を脱ぎ捨てベッドの上に横になった。最近、毎日どこかの世界に入っては情報を求め、仕事をこなす日々。さすがに体力も限界が近づいていた。

「あらあら、お疲れ？」

声が響いた。慌てて起き上がると机にもたれる様にして彼女は立っていた。ただでさえこの家は狭く、キッチンとベッド、そして机を置けば、後はもう大したスペースは残っていない。その中で彼女は完璧に気配を消していた。

「サディケルさん、いたのなら気配位見せて下さい」

そう言つと彼女は悪戯が見つかった子供のように笑いながら言う。

「驚かそうと思ったのに、いきなり寝ちやうから」

彼はそんないつもの会話を切り上げ本題に入る。

「何か御用ですか？ ここに来るのってこの世界を作ったとき以来ですよ」

「あら、用が無くちゃ来ちゃ駄目？」

「そんなわけでも無いですけど、時間が時間ですから本来ならとつくの昔に寝ている時間ではあった。

「貴方が驚く話を一つ仕入れてきたから、教えてあげようと思って何ですか？」

次の言葉はまさに寝耳に水だった。

「エリックって知ってる？」

いきなり出てきた友人の名前に彼はただ肯定を返す。彼に何かあったのだろうか。とはいえ、彼と今の自分に接点などあるはずが無い、そう彼は思っていた。

「え、ええ。友人です」

「LIGHTSだったわ」

「まさか！」

彼女の言葉を聞いて彼は耳を疑った。エミルはまだ分かる。付き合いは高校からだし、あの容姿なら少なくともあの世界では不自然には思われない。けれど彼は小さい頃から共にいたのだ、いくらなんでも子供ができる任務は無いだろう。

「じゃあ、何故貴方と友人だったのかしらね」

「それは偶々小学校から一緒に席も近くて話しかけてきて・・・」
言っているうちに気付いた。元来友人付き合いが多い方ではないが、何故か彼は終始一緒にいた気がする。

「俺と友達だったことが不自然、か」

「別に貴方に魅力が無い、何て言う気は無いわよ。ただ気になって調べたらヒットした」

「彼も俺の監視を？」

「とはまだ断定しないし、したくない」

彼女の妙な言い回しに彼は疑問符を浮かべる。

「したくない？」

「嫌でしょ、唯一の昔からの友人がフェイクだなんて」

何だ、と彼は彼女の気遣いに感謝する一方で、微笑を浮かべて返答を返す。

「そんなことはありませんよ」

いい加減慣れてはいた。あの世界が彼らによって作られた、あるいは用意されたものではないか、という考えを持った時点で覚悟はできていたのだ。ただ、この事実が予想外だったが。

「それで、彼は今どこに？」

その問いかけに彼女は首を振って、苛立ちそのままに言葉を発す

る。

「それがぶつつん。足取りも掴めやしない。ただ・・・」

一つ間を置いて彼女は自分の推定を話し始める。

「ただ？」

「妙な世界が彼らのテリトリーの中に一つある」

「妙？」

「どうにも世界が世界として成り立っているようにには思えない。何かこう、世界になる一つ前の段階みたいな」

「一つ前？ でも」

「ええ、表で世界は新しく作れない。できるのは既存の世界間の移動のみ。昔誰かが作った裏でなら貴方も知ってる通り、作り放題なんだけれど」

実際、可能とは言っても作り放題、と言えるのは彼女を含むトゥブグループのみである。

「可能性としては？」

この分野では桁違いの知識と技量を誇る彼女は一つの仮説を提示する。

「何か動いてる。何か」

「関係、あると思いますか？」

「分からない。どの道LGHTSの誰かはいるでしょうし、場合によつては何か聞き出せるかも」

「よく場所を突き止めましたね」

LGHTSのテリトリーはかなり巧妙に隠されている。普通の能力者にはまず気配を追えないし、大概がダミーだったり、いくつも罠が用意されているのが常だった。

「ま、こんなもんよ」

自信たつぷりの彼女に、彼は残された問題を問う。誰が行くかだ。何せそこは言わば敵陣だった。行った瞬間八つ裂きにされても文句は言えない。

「でも、どうします？ 危険なら一人でも――」

「私もいくわ」

さも当然、といった口調での返事に彼は呆気にとられる。

「はい？」

「あら、いや？」

「い、いえ。でも何故？」

「気になったからよ、明日迎えに来るから」

「分かりました」

そう言い置いて彼女は姿を消す。詳しい理由は聞けなかったが、直に分かるだろう。そう思い、彼はゆっくりと眠りに落ちていった。翌朝、彼は外で静かに精神を集中させる。徐々に展開される力を感じながら、サリツサが形を成す直前で力を抜き、その過程を繰り返す。以前サディケルに教えてもらった力の調整方法だった。戦闘時、常に全開だとすぐにバテが来る。力の最大値はそう簡単には増えないが、節約ならいくらでもできる。そう考えての訓練だった。もう、負けないために。

「準備はいい？」

何回目かの展開に入った時、彼女が姿を現した。いつものその漆黒の衣装は、今日は少し華やいで見える。

「服変えました？」

「毎日同じ服着てるわけ無いじゃない」

「すみません」

素直に謝る彼に、彼女は以前尋ねた疑問をもう一度口に出した。

「どうしてあそこから出て行こうと思ったの？」

彼はどうしてこんな時に、と思いながらも同じ返答を返す。

「あそこは、『グリゴリ』のいわば拠点。常に組織の中心人物が入る部屋に常に新人がいるのはおかしいですよ。実際、色々言われましたし」

何故か自分の事を強者と勘違いして喧嘩を吹っかけて来る者や、奴隷、または愛人、果ては捕獲された魔物かと勘違いされ、彼は別の場所に住みたいと申し出たのだ。てつきり他の新人と同じように集

団部屋に送り込まれると思っていた彼に用意されたのは、彼専用の世界だった。

「ここも、もつたいない位なんですけれど」

当然聞こえてきたのはやつかみだった。最近はその声も止んできているが、ただでさえ自分は能力者の中でも特殊なのだ。あまり目立つ行為は避けたい、と言う彼にその時彼女はこう告げたのだ。

『これ位乗り越えられなければ、貴方はいずれつぶれてしまう』

これまで、彼は彼女にお世話になりつつ放しだった。少しは恩返ししたいが、自分の力ではまだまだ力不足、ということも彼は自覚していたため、その結果ハードワークとなっていた。

「何言ってるの、自身持ちなさい。才能あるわよ、貴方」

少なくとも、今まで見てきた者達とは違う、何かを持っていた。

それがいいのか悪いのかは分からなかったが、LIGHTS、ひいてはハムルスが彼の存在を隠してきた理由は何となく分かった。殺そうとした理由は全く分からないが。

「はい」

「よろしい」

そう言つて彼女は眼を細める、最初あれだけ落ち込んで帰ってきたときはどうなることかと思つたが、今ではそれなりに風格が着いてきていた。あえて厳しい所ばかりに送り込んできたが、無駄では無かつたらしい。

「では、行くわよ」

「はい」

まっすぐこちらに向かつてくる視線を受け止め、彼女は呪文を唱えはじめる。目的地の特殊性から、彼女はいつもよりも慎重に術を重ねていき準備を整え、旅立った。

「ここが・・・」

「そうみたいね」

彼らが降り立ったのは古びた機械が乱雑に置かれた、いわゆる産

業廃棄物処分場だった。

「どうします？」

「ここにいっても仕方が無いわね」

彼女は自身に力を集中させ二人分の範囲に魔法陣の様なものを出現させる。

「ラスキューヴ」

ふわん、という音と共に彼らにその魔法陣が巻きつくようにして吸い込まれた。

「今のは？」

「こんな所で力盛大に使ったらすぐに感づかれる。だからその気配をなるべく外に漏らさない様に、完璧じゃないけどね」

そのまま歩き出すのに従って彼は機械でできた台地をひたすら歩く。どれ位の時間が経っただろうか、と彼が上を見上げた瞬間、空から何かが降ってきた。

「何か嫌な予感」

「同感」

憂鬱そうな彼の呟きを聞き取り、彼女も似たような口調で答えた。

「予想通りか・・・」

降ってきたのは、同じような機械だった。歯車か、それともチップか分からないが、とにかく数々の部品を撒き散らし派手に散ったそれを見て、彼はある事に気がついた。

「これ、確かライトが」

彼が摘み挙げたのは半分に折れたチップだった。ただその形状が彼女が見せてくれた受信機と酷使していた。

「もしかして」

彼は自身の推理を確かめるため、飛び散った部品をかき集めある程度の形を作る。

「これは」

「マネキン？」

彼女の声には彼は頷いた。あの時のライトの声が蘇る。

「確かに怖いよ、ライト」

その何も瞳に宿していない無機的な顔は、静かに空を見上げている。まさに、人造人間とでも呼べる代物だった。

「ここは」

「ゴミ捨て場、かしらね」

彼らはそう結論付けた。行けども行けどもあるのは部品の山ばかりで、生物が生きていける環境ではない。降ってきたということは、上空に何かいる、ということの意味しているが、特に何も無く、彼は途方に暮れた。

「やっぱりな」

何も無い、と言おうとした彼は息を飲んだ。

「どちらさま？」

後ろから柔らかな声が響いた。慌てて振り向くと、そこには淡い黄色のワンピースを身に着けた茶髪の若い女性が一人、微笑みながら立っていた。

「いつのまに？」

サディケルは密かに力を体中に集め、戦闘態勢をつくる。それを見て取ったルシファは手で制しつつ、質問を開始する。

「すいません、ちょっと迷い込んでしまいました。ここはどこだかご存知ですか？」

そう言うと、彼女は何故か彼を手招きする。警戒を解かない彼女に、彼女はまるで子供と接するかのように彼を見つめお茶をすする動作をする。

「お誘いしてもよろしいですか？」

どの道存在はばれている。断つてもよかったが、そこは好奇心の方が勝った。

「ええ、ぜひ」

彼女に連れられて、彼らはあくまで警戒は解かないまま、小声で会話していた。

「あの子何者？」

「さあ、でも殺気は感じませんし、危険ではないかと」

「殺気見せずに殺しせる奴なんていくらでもいるわよ」

「でも、このまま帰るわけにもいきませんよ」

「まあ、ね。いざとなったら、直ぐに逃げれば言い話だし」

「こちらです」

彼らは白い家の前に立っていた。2階建ての洋風の館は、場違いなほどに優雅だった。周りには花が咲き誇り、その館の裏側からは子供の声が響いている。

「ここは？」

そう聞くと、彼女は門を開きながら説明を始める。

「ここは私が住んでいる家の一つです。孤児院を兼ねていまして。

ああ、聞こえてきますね。あの声がそうです」

「こんなところで？」

彼はそんな話は信じなかった。いくらなんでも場違いにも程がある。どうやつても生活していけそうには無い。

「そうですね。こんなところで、です」

ドアを開け、彼女は彼らを館の中へと迎え入れる。中の様子は外観を見た時創造した通りの内装。シャンデリラに、左右の階段はよくドラマで見る物と同じ左右から伸びてくるタイプの物。真ん中には大理石で蝶が現され、彼女は丁度その上に立って彼らにここまで来るよう手招きする。

「いい趣味ね」

サディケルがまずは一定の評価を下す。好みは違うが、使用されている材料は悪い物ではなかった。

「ありがとうございます。こちらへどうぞ」

彼女はそのまま奥の部屋への扉を開ける。現れたのは、これまた長い机を擁した部屋。

椅子に座るように薦められ、彼らは腰を落ち着ける。と同時に彼女は、部屋の右端にあるドアに入っていった。

「毒でも盛られているかもしれませんね」

「あら、だったら貴方に全部プレゼント」

冗談を言った事を彼は後悔した。何を言っても勝てない気がする。というより、何を言おうが相手は勝敗を気にする人ではない。

「……」

「……冗談よ」

不機嫌そうに言われたが、彼も何て言えばいいのかも分からない。

「分かりませんよ。そんな自然に言われては」

そんなやり取りが続く中、彼女がカップに紅茶をついで戻ってきた。

「すみません」

「いいえ、ゆつくりしてして下さい」

立ち上がりかけた彼を制し、彼女は二人の前にカップを置いていく。

「それで、誘った本当の理由は？」

サディケルが単刀直入に切り出す。

「本当？ さて、本当って何ですか？」

紅茶に口をつけ、彼女はサディケルの言葉に動じず落ち着いて答える。

「あの」

ルシファは彼女の方を見て、発言の許可を求める。

「はい？」

「周りのあれは、何か知っていますか？」

「はい」

「教えていただけませんか？」

「あれは」

「あれは？」

意気込む彼に対し、彼女は答えを簡潔に告げた。

「私です」

時が止まった。

「何か、おかしい事を言いました？」

固まった彼らに彼女は困ったような口調で彼らに問いかける。

「えっと、あの」

「もうなんなの・・・」

彼らは彼女の真意を測りかねていた。まず意味が分からない。あれは私。では、ここに居る彼女は何なのだ。

「ちなみに、外で遊んでいるのも私です」

「・・・」

「ああ、さっき降ってきたでしょう。あれも私なんですよ」

楽しそうに語る彼女を前にして、彼は考え込んだ。今まで見てきた機械の正体はライト達と同じと見ていいだろう。エミルは、同一固体は5体と言っていたが、そんなものは何の当てにもならない。5体作れるのならもっと作って当然だろう。機械とはいえあれだけの戦闘力。使えないはずは無い。この状況は確かに異常だが、言っている意味は何となく分かってきた。つまり、ここは生産から廃棄までを一括に行う工場だとしたら、辻褄は合う。どこにも工場は無いが、彼女達は恐らく生まれ、時にこの世界から出され働き、終われば捨てられる。使えるようになるまでここで教育を施せば、簡単に使い捨ての手駒はできあがる。

「分かりました。では、子供達を見せていただけませんか？」

「はい、ではどうぞ」

彼は彼女の後について外への扉を通り抜け、裏へと廻る。きっと何かある、何でもいい、それで少なくとも決心はつく。彼の期待は、『子供達』を見た瞬間、後悔へと変わる。

「ふーん。なるほどね」

彼の後ろからその光景を見たサディケルは一言感想を漏らす。だが、彼はそれ所ではなかった。

「どうしました？」

青ざめて立ちすくむ彼に彼女は心配そうに眼線をやる、がそれも彼の目には入ってこない。ただ、目の前の光景が、彼の全てを止め

ていた。

「おい！ それ俺の！」

「ねえ、次はサッカーしょ」

「あ、お姉ちゃんその人達誰？」

「いえーい、俺がいちばーん」

交わされる言葉は不自然ではない。おかしかったのは、その姿だった。ある者は頭が無い、ある者は腕が無い。ある者は胸に大きな穴が、またある者は、機械の部分が全て剥き出しに。それも、子供ではなく、姿は彼女と全く同じだった。

「こ、これ」

声が震えた。一体これは、もし、もし、そこで戦闘訓練でも何でもしていてくれたら彼は躊躇する事は無かった。またどこかである事が起こる位なら、全てを消しても構いはしなかった。ただ、体が動かない。

「無理も無いわね。中々シユールな光景だもの」

「サディケルさん」

彼女の声で彼は何とか冷静さを取り戻す。

「ここの正体分かった？」

「何となく」

彼らはもう、ここが何か分かっていた。ここは、処理場であることは間違い無い。ただ処分するのは使った後の物ではなく、不良品使えないものは捨てて置く。たまにまだ意識の残っている稀な個体は、こうしてまだ稼働しているが、いずれ周りの機械と同じ運命を辿るのだろう。勿論、今隣にいる彼女も。

「ライトとは、違う」

「ええ。その一步前の段階、かしら」

マネキンとはよく言ったものだ。確かに全てが同じ顔、同じ身長、同じ服。個性が一切無いそれは『マネキン』だった。

「そして、おそらく」

「消えるわね、この世界」

サディケルが感じた妙な、とはまさにこのことだった。この世界は確かに以前は世界としてあっただろう。ただ、今はもう、終わりを待つばかり。世界が消える事は滅多に無いが、時として、世界は呆気なく消滅する。原因は様々だが、おそらくここは文明の発展がまず文明そのものを崩壊させ、そして世界を食い潰した。世界が存在するには、その世界が存在できるだけのエネルギーが必要となる。そして、それが消えれば世界も消える。そういった法則が無視できる裏と違つて表で世界が作れないのは、そのエネルギーを供給できるだけの力を持つ者が存在しないことが原因だった。

「あなたは、ここから出たいとは思いませんか？」

彼は答えが分かっているながらも彼女に問いかけた。少なくとも、ここから出さえすれば彼女は消えずにすむだろう。けれど――。

「いいえ、ここはとても心地のよい場所ですから」

彼女は笑つて答えた。花のような、明るい顔をして。

「そう、ですか」

「はい」

ここが彼女の居場所なのだろう、彼はそう思い背を向けて歩き出した。けして譲れない何かは、誰にでもある。

「俺は優しい世界を作りたい。毎日、明日を笑つて迎えられる様な花びらが宙を舞い、彼女達を取り囲んだ。楽しそうにする彼女達を見て、彼は最後に微笑んだ。

「美味しかった。ありがとう」

次の瞬間、彼らはこの世界に別れを告げ、それからほどなくして、この世界は世界としての役割を終えた。

第一章 第七節 それは未知の『世界』

「なあ、アリア」

「何、カイル？」

ある世界のLIGHTS支部、彼らは食堂で向かい合って座っていた。カイルの手にはコーヒーが、アリアはそんな彼を頼杖をついて見ている。食堂は昼時ともなれば賑わうが、今は数人の退院がまばらに座っているばかりで、静かな空間だった。

「また一つ処理場が消えたらしいな」

「・・・うん」

彼女は顔を伏せ、彼女達の事を思い浮かべる。

「少しプログラムがずれていたただけなのに」

「仕方ないさ、上が使えないと判断すればそうなる。ライトだってそうだったんだから」

「現場に、いたんだって？」

カイルは自分のコーヒーを掻き混ぜなら、あの時の事を思い出す。

「大変だったさ。魔女が現れたのも勿論だし、何よりエミルがな」

「まだ、部屋に？」

「いや、俺も忙しくてな、聞いて無い」

カイルはあの後、他への支部へ異動を命じられていた。仕事上本部への配属が当たり前となっていた彼女と違って、カイルは色々な所へ飛ばされている。実際、アリアと会うのも数年ぶりの事だった。

「大変ね・・・」

友人の一人として彼女は溜息をついた。

「全くな」

そう言つとカイルはコーヒーを飲み干し、立ち上がる。

「任務？」

「ああ、俺も少しは休みが欲しいな」

「もし、休みが取れたら」

「分かつてる。その時は連絡するよ」

そう言つて、カイルは彼女の頬に口付けをして、出て行った。その後ろ姿を見送りながらも、彼女の頭の中はエミルの事で一杯だった。たった一つの事件で全てを無くした、不幸の子。

「できることなら、してあげたいんだけど・・・」

そう言つて、彼女もまた立ち上がり任務のため食堂を出る。得たデータを下に、彼女は新たな翼の研究を命じられていた。

「もし、これが成功したら」

きつと変わる、と彼女は確信する。作られたもの達は、それ自身の意思で行動し、世界を変えることができる。そのために、彼女は今も彼女達を作り続けている。

ある研究所に、彼はいた。白衣に身を包んだその男は、持っていた書類を見て喝采をあげた。

「やったああああああ！」

ざまあ見る！ 俺を散々馬鹿にしゃがって！ これで俺も、俺も！

「あつはははははははは！」

他に誰もいない研究室内で、彼は笑い続けた。

「お疲れ」

「ああ、偶にはこっちにも顔見せろよ。それいしてもまったくお前って奴はほんと」

「それを言つな。困ってるんだよ」

ルシファはにやにやしているケルーズに別れを告げ、自分の住む世界へと戻る。あれから色々と世界を巡ったが、未だ必要な情報を得られず、彼は焦っていた。

「このままじゃ、いつまでたつても埒が明かない」

いや、と彼は自分を戒める。この程度の力ではいざという時何も出来ないまま終わりがねない。それに、厄介な問題も抱える事になつてしまつたし。彼はあの時の事を思い出し、若干憂鬱になりなが

らも、眠りについた。

「サディケルさん」

「はい？ ああルシファ何か用？」

「用が無かったら来ちゃいけないんですか？」

「へえ、言うようになったじゃない」

「もまれてますから」

後日、彼は拠点でもあるサディケルの家を訪れていた。彼は、相変わらずソファで横になってワインを飲んでいる彼女の向かいの椅子に座る。

「実は、お願い事があるんです」

「いきなり前言撤回？」

サディケルに彼は頭を下げる。

「すみません、実は」

「実は？」

サディケルは考える。彼がこんな風に頼みごとをしてくるのは初めてだった。好奇心本位で、彼女は彼の答えを待った。

「わた、いや、俺の彼女になって欲しいんです」

彼女は口に含まれていたワインを全て吹き出した。

「どういうこと？」

ようやく落ち着いた彼女は彼に尋ねる。愛の告白なら散々受けてきたが、彼の雰囲気はそれらとは少々違った。

「はい、あの・・・」

彼は話し始めた。それは、彼がケルーズと共に生態調査にかけた時から始まる。

「56、57・・・」

「343・・・904・・・」

彼らはある世界の自然公園で、絶滅を危惧されている生物の生態調査を行っていた。何故彼らにそんな仕事が舞い込んできたかという、生物の生息地息が、猛獣が数多く出る危険地域だからだった。今、ルシファはフルという馬によく似ている動物の数を数え、そ

の位置を記録していく。一方ケルーズは、ハトルリという昆虫の数を調査していた。

「よし、これでこの地域は終了」

「こっちもだ。いいなあお前は。上空から見れば一発だ」

「はは、そっちも飛べればよかったのにねえ」

「このやろう」

彼らは無駄口を叩きながら、次の地域へと向かう。移動手段はケルーズに合わせて徒歩。鬱蒼としたジャングルやどこまで広がる草原が広がる公園内は、多種多様の生物が共存していた。

「とりあえず、今日はこんなところかな」

「おし、報告にこうぜ」

日も暮れかけた頃、彼らは一旦調査を打ち切って小屋へと戻る。

国の調査機関から提供されたそれは決して広くは無いものの、外の動物が壊すことが無いようにとしつかりとした作りとなっている。

部屋の中は部屋が二つに、ダイニングが一つ。それから風呂とトイレが一個ずつあり、ルシファをほっとさせた。

「トイレの無い世界があつたんだって？」

戻ってから彼らは思い思いに寛いでいた。ケルーズは床に寝転がり、ルシファは椅子に座り、もう一方の椅子に足を乗せる。

「ああ、まったく参ったよ。あんな世界があるとは思ってもなかった」

彼はその時の事を思い出し、軽くブルーになる。本当に、どうしようかと思ったが、この世界の住民には排泄、という習慣が無いのだから、どうあがいても一旦世界を離れるしか選択肢はなかった。

「ただ一旦世界を離れると」

「そこはもう賭けだった」

彼はケルーズの言葉を先読みして答える。当然ながら、各世界では時間の進み方が全く違う。一旦世界を離れば、その世界がどの位時間が進んでいるのか分からなくなるのだ。その世界では大して時差が無かったから良かったものの、もしかなりの開きがあれば、

離れることも出来ず彼は毎回どこか外でする羽目になっていたことだろう。

「ま、そんなこともあるって」

「もう嫌だな」

ケルーズはそう彼を慰めて、夕飯の準備に取り掛かった。自分がやる、とルシファは申し出たのだが、彼は、

「いいって、お前、働きすぎだし」

そう言っ、さっさとご飯の準備にとりかかったのだから、彼はどうすることも出来ず、落ち着かないまま料理が出来るまでを過ごす事になった。

「これ、何だ？」

「夕飯だが」

「ほう」

「おう」

その二十分後、彼の目の前には、見たことも無い料理が並んでいた。

「こここの世界の物で作ったのか？」

彼は確認不安そうに匂いを嗅いだり、色合いを見る。まずそうではないが、苦い経験をした事があるため、どうしても慎重になる。

「失礼な奴だな、いいから食ってみろ。さっき捕まえた魚を適当にさばいて蒸してみただけだ」

彼は器用にナイフとフォークを扱い口に入れていく。

「よ、よし」

ルシファは覚悟を決めて口に放り込んだ。

「どうだ？」

ケルーズがまだ口に物を入れた状態で彼の感想を待つ。

「おいしい・・・」

悪くは無い、というより絶品だった。このあっさりとした食感好きだし、添えられているソースも穏やかな香りがする。上手く溶けあい、それは一つの料理として見事に成り立っていた。

「で、明日はどうする？」

ケルーズが食後の一服をしながら、ゆっくりと煙を吐き出す。煙草、というらしいが、彼にはその良さがさっぱり分らない。彼は一旦皿を洗う手を止め、考えていた予定を告げる。

「午前中で全て終わるだろうから、後は依頼者に報告して終わり。」

予想してたより早く終わってよかった」

「報酬も弾むかな」

「それは分かんないけど」

お金のマークが頭からちらほらと出てくる彼を無視して、彼は作業を再開する。明日で終われば少しは休みも取れる。その間どうしようか、という彼の考えは、明日起こる出来事によって全てが崩壊する事になる。

「よし、行こう」

翌日彼らは予定通り依頼内容を終えた。後は依頼者であるこの国の保護施設へ報告するだけだった。

「やっと帰れる」

「三日も自然の中だったからな、帰ったら久しぶりに一杯やろうぜ」

「俺、未成年」

「何だよ、そんな法律は破るためにあるんだ。遠慮するな」

「やれやれ」

彼らは道を歩きながら会話を続けていた。と、前から車がやってくる。彼らは運転できなかったし、そもそも走れば車よりも早く走れる為借りはしなかったが、この世界でもそれは普通の人間にとって重要な交通機関となっていた。

「お疲れ様。はい、これ」

ここの調査員であるクリアがケルーズに報酬を手渡す。

「よく終わった事が分かりましたね」

ルシファは彼女から報酬を受け取りながら尋ねた。本来の予定は明日までだった。たまたま今日で終わったから戻ってきたのであって、何故帰り道偶然彼女と会えたのかが分からない。

「それは、その。様子を見に行こうかなあつて」

「はあ・・・」

ケルーズが彼の横で溜息をついた。会ったときから分かっていたことだが、中々積極的なお嬢さんじゃねえか、しかもかわいい、あかわいいいちくしょー！ などと心の中で叫んでいることなど露とも、知らずルシファはきよとした顔をする。

「それはそれは、ありがとうございます」

彼は素直に頭を下げて、帰ろうとする。さすがに一般人の前で力を使えないので、そのまま森にでも入ってから戻るつもりだった。

「え、えつとあの」

クリアは赤い肩まで伸びた髪を手でいじりながら、彼を上目遣いで見る。

「何か？」

彼は自分を見続ける彼女に何故か悪寒を感じて、その行動の理由を求める。

「あ、あのルシファさんて」

彼女は意を決したように彼の前に立つ。

「はい」

「彼女いる？」

時が止まった。

「え、いや、あの、その」

「いるの？」

「え、えつと」

勢い込んでこちらに迫る彼女に対し彼はケルーズに助けを求めた。彼は一度肩を竦め何故か天を見上げた後、彼へのフォーローを開始した。

「あーあのだな、お嬢さんにとっては残念だが」

彼はほつとした。さすがだ。さすが今まで長いこと戦ってきた歴戦の勇者だけの事はある。だが、そんな彼の期待はもろくも崩れ去る。

「そいつはホモだ」

「・・・は？」

彼は言われた言葉を頭の中で十回は反芻した。ホモ、つまり同性愛者。

「ちよつと待て・・・」

肩を落とす彼と驚く彼女。

「そうなの？」

すぐさま繰り出される質問を彼は片っ端から否定していく。

「そんなわけあるか！」

「男のどこが いい の？」

「だから好きじゃない！」

「彼女 いない の？」

「違 う っ て ！」

「え？」

「は？」

クリアとケルーズはそれぞれ驚いて彼を見やる。

「・・・あ」

言ってから彼も気がついた。

「やっぱりいるんだー」

「いや、えと、今は勢いで」

「へーえ、俺は知らなかったけどなあ」

ケルーズに非難めいた目を送られて彼は途方に暮れた。彼女、彼の人生において最も縁遠い言葉。親しい女性はエミルしかいなかったし、ライトとはデートまがいの事もして、何かいい雰囲気にはなっていたが、所詮兄と妹。いくら何でも突然の事態に彼は頭が回転しない。

「誰？どこの人？」

彼らを彼女はただの何でも屋だと思っている。国のトップから依頼された仕事ではあるが、それが末端にまで正確な情報がいくことはない。

「あー、まあ綺麗な人だよ」

彼は適当にごまかしてこの場を切り抜けるつもりだった。どうせもうこの世界に来る事も無いのだ。適当に言って後はとんずらすればいい、そう彼は頭の中で結論付けていた。

「じゃあ、一回見せて！」

「ま、まあ機会があつたら」

「おい」

ここでケルーズが彼に忠告めたものを送ろうとした瞬間、ルシファは返事を返してしまっていた。

「何？」

不思議に思つてルシファが彼を見るが、彼はご愁傷様、とポーズを取る。

「それなら大丈夫」

「え？」

「来週もまた調査をお願いしてるでしょ？ その時連れてきて。勿論、報酬も出すから」

「あ」

忘れていた。本来、来週は彼はこの世界に来る必要は無かった。

この調査はローテーションで回されており、空いている人員が調査に当たる。彼はこれで当分回つてこないはずであつたが、今ので彼の予定にひびが入る。

「あ、でも」

「指名は出来るんでしょう？」

「・・・まあ」

断りかけた彼に先んじて彼女はケルーズに詰め寄る。さすがに怖くなつて彼は正直に話した。

「ケルーズ・・・」

「知らん。恨むなら自分を恨め。このフラグー級建築士」

正直に答えた彼にルシファはがっくりと肩を落とした。確かに、常にうちに仕事を供給してくれている彼らは上客であり、無下に断

るわけにもいかなかった。

「約束だからね。分かった？」

「はい・・・」

押し切られる形で彼は同意を示す。去っていく彼女を見送りながら彼は隣と同僚へ視線を向ける。

「なあ、俺は来週風邪に――」

「駄目だ。何とかするんだな」

一羽の鳥が、あほー、と間拔けな声で鳴いた。

第一章 第八節 二度目の『世界』 二度目の邂逅

「と、いうことなんですが」

彼は不安そうに彼女を見た。というのも話が進み本題に入った途端、サディケルの顔が急速に不機嫌になっていったからだ。

「あなた、どれだけの女性とそんな事してきたの？」

「してません」

「本当？」

「はい」

「さあて、どうしましょうかねえ」

彼女は考え込む振りをする。不安そうにこちらを見ている彼に、恩を売っておくのも悪くは無いし、あそこの世界の仕事を無くすのは痛い。

「やってあげてもいいけど」

「本当ですか？」

彼は心の中で歓喜した。実際問題こんな事を頼めるのは彼女くらいしかないなかった。他の女性にしようかとも思っただが、それはケルーズに、

「しゃれにならないから止めておけ」

と言われたので誰なら大丈夫そうか、と聞いたところ彼は彼女の名前を挙げたのだ。

「ただし」

彼女はここでまったをかける。そう、ただお願いを聞くだけではつまらない。

「私のお願いを一つ聞く事」

「う・・・」

サディケルのお願い。どんなものか考えたくは無かったが、彼はもうそれを飲むしかなかった。
「分かりました」

うなだれる彼の肩を叩き、彼女は立ち上がった。

「泣くな少年、人生とは辛いものだ」

一週間後、彼は彼女と共に、再びかの地に舞い降りた。

「それで、例の彼女はどこ？」

まず彼女はそう言っ、辺りを見渡す。

「多分施設でしょう、打ち合わせ通りをお願いします」

ここで彼女はやれやれ、といった顔をして彼の顔を覗き込む。

「今、私達の関係は？」

「あ・・・」

「何？」

「恋人、です」

「だったら？」

「は、はい？」

本気で戸惑っている彼を見て、彼女は心底落胆した。どうにもこうにもこの男はこういう問題に弱すぎる。一気に押し切るか引くかすればいいのに、変に優しくするからこうなるのだ。と、彼女は彼の性格を分析していた。実際、裏でも彼は評判だった。容姿の面での評価はさすがに割れたが、その強さと性格に多くの女性が魅かれていたのだ。ケルソー達がつけた『一級フラグ建築士』のあだ名は彼女も大いに賛同するところだった。

ま、本人はそれどころじゃないんでしょうし、と彼女は納得して彼の手を取った。

「丁寧語は止めなさい。それから名前はサディケルでいいから」

「あ、は、はい。あ、いや分かった。そうだった・・・タメ口か」

そうして不安な彼の一日は始まる事になった。

「それですね」

「・・・」

「あ、あのですから」

「・・・」

「二人っきりの時にもこの口調でいくのか？」

「慣れておかないとぼろが出るわよ」

ここは例の小屋、彼らは結局ここで一泊する事になっていた。実の所、他の者が今は仕事にあたっており、彼らは彼女に会う事だけを目的としていた。彼女は忙しい身分であつたし、彼は次の仕事が控えている。にもかかわらずこんな事態になつたのは、彼女が今日は休暇を取っていたからだつた。

「連絡しておいたのに・・・」

彼は窓の外を見ながら一人ぼやく。会えるのは明日。つまり彼女と一晩、二人つきり。拷問だろうか、試練だろうか、それともこれは神が与えた罰か。

「失礼な事考えてない？」

椅子に座つて、雑誌を眺めていた彼女が急にこちらに声を掛けてきて、彼はどう返答したものか迷う。実際、と彼は彼女について自分が集めた情報を整理する。

『グリゴリ』というのは本来こんなどこかに拠点を置くような組織ではなかった。どこかにある受付所である者が依頼を出し、出された依頼はすぐに裏に公表される。その中から気が向いたものが仕事を運び、報酬を受け取る。これがサディケルが取り仕切るまでの仕組みだつた。

ただ、このシステムには大きな問題点があつた。それは、依頼内容が公表される事、この一点に尽きた。非合法的な依頼は勿論対象外だが、どこそこへ何かを運んで欲しいだのある重要な会談の警備だの頼めば、そこと対立している集団がその仕事を請けて、潰しに回るからだ。それに、裏に存在できるほどの実力者であれば、適当に世界を回つて金品を奪い取つていれば事は足りた。だから実際、『グリゴリ』はあつて無い様なものだつた。

そこに現れたのがサディケルだつた。彼女は依頼が来るとまず、それを自らの元に全て集め、それを担当の者に合法非合法を選別させる。そしてその中から仕事を、『グリゴリ』に登録しているメンバーにそれぞれ割り振り、報酬を得て、利益を分配する。

公表もされず、また彼女はどの組織に対しても中立の立場を崩さなかったため、概ね彼女の手法は裏にも表にも受け入られて、今に至る。そして、と彼は思う。彼女はそれ故に絶大な人気を誇っていた。光のセイバー、黄昏のシュトラウス、そして闇のサディケル。

三皇、と呼ばれる彼らはそれぞれが力、知性、人気を誇る、表裏含めた中で、三大勢力となっていた。

「やっぱり凄い人だ」

そんなサディケルの右腕、と評され始めている事など知らず、彼は目の前の人物に尊敬の念を抱く。・・・ただどうしても苦手な感は拭えなかったが。

「さて、今日はどうする？ 特に予定も無いし」

ルシファは彼女の向かいに座り、内心びくびくしながら話を振る。「そうねえ、じゃあ」

彼女は読んでいた雑誌から目を離し、その今読んでいた雑誌の中からある単語を取り出した。

「映画見に行きましょうか」

やっぱり、と彼は思った。今日の前に置かれた雑誌のタイトルが『HORROR』、という名の映画雑誌。言い出すのも時間の問題だった。

「調べてるな、この世界の事」

「映画館があるかどうか、はね」

彼女は立ち上がり、黒のロングコートを羽織る。ちなみにこの世界の今の季節は夏だ。一体どんな体をしているのだろう、と思いいながら彼は立ち上がり、彼女の前に立ち手を差し伸べた。

「行こうか、サディケル」

「ふん、生意気」

そう言って二人は歩き出した。

「ん？」

時を同じくして、セイバーは不思議な状況に置かれていた。

「ほう」

隣でランスロットが感心したような声をあげ、ボルクは相変わらずの沈黙。

ここはLIGHTS本部の司令室。目の前に広がるモニターは主な能力者が今どこにいるか、を表示している。忙しそうに作業する数十人の作業員の一人が、セイバーにとある報告をしてきたのだ。

強力な能力者が二人一緒に行動している、と。

強力な力を持つものは誰かとつるむ事を嫌う傾向にある。現にシュトラウスもサディケルも今まで誰かと行動を共にする、と言う事は無く、その行動のほとんどはスタンドプレーだった。しかし、稀に例外も存在し、そのような者達は特にマークを受ける。現に今、この存在をキャッチできたのは、かなり探索の範囲を限定し、しつこくサーチをかけた結果やつと得た情報だった。

「誰だ？ あいつらか？ いや、あの変態共は追い払ったし、あの外道は今は大入りいはずだし・・・」

ランスロットが考えをまとめ始める中、彼女は一つの結論を出していた。

「あいつだろう」

「え？ ルシファ？」

彼の活躍は彼らも既に把握していた。『グリゴリ』内での仕事の達成率は九割を超え、今やサディケルの右腕、と評する声も出てくるほどだ。

「つてことは、一緒にいるのは・・・」

「魔女だろうな」

「うげ・・・」

何故かサディケルは彼を重用していた。仕事は大概が彼の元へ送られていたし、中には本当に過酷なものまであった。鍛えられているのか、使い捨てる気か、相変わらず彼女の真意は読めなかった。

失敗だったかもしれない。セイバーは後悔し始めていた。あの時殺しておけば良かったかもしれない、と彼女はここで気持ちを切り

替える。悩んでも仕方が無い。

「この世界へ向かう」

「分かった。誰か空いてる奴を」

「私が行く」

直ぐに出す、というランスロットの言葉は驚きと共に飲み込まれる。

「だから、何であいつのことそんなに気にするんだよ。どうせ、爺さん連中のおもちゃだろ？」

「私が見逃したのだ。責任はある」

「はあ、もう」

ここまで来るともうこの隊長は意思を曲げない。彼は諦め受話器を取った。

「隊長がご出陣だ。用意を」

セイバーは部屋を出て廊下歩き始める。

「何を考えているか知らんが」

セイバーは決意を固める。腰から提げる剣に力を込め、彼女は外への扉を開いた。

「次は切る」

「さて、どれ見る？」

「貴方さっきまで私の何を見てたの？」

「冗談だよ・・・」

彼らはこの国の首都の中心部にいた。自然公園から車で三十分程度の距離だが、彼らは密かに力を使い五分で着いていた。勿論、真っ先に向かったのはこの国最大の映画館。総スクリーン数78、総座席数は2万を超える超大型映画館である。上映されている映画も多岐に渡り、ファンタジー、アクション、スリラーにサスペンス。そして当然の様に、ホラーもあった。

「これか」

おどろおどろしいポスターには目もくれず彼は受付へと向かう。

こういう時は男が出すのがセオリーだろう、という考えの下での行動だったが、前にサディケルが立つ。

「どうした？」

「そこまで気を使われる筋合いはないわ」

「いや、ここは俺が」

「お金あるの？」

正直な話し、彼は金欠だった。原因は浪費では無く、報酬の安さにある。『グレゴリ』は仕事は誰彼構わず回すが、肝心の報酬は年棒制だった。それも支払いは年に一回一括で。おかしいだろう、と彼は思ったが、理由を聞くと、

「ここんとこ死ぬ奴が多くてな、大体一年くらい持つてくれる奴じゃないとこつちも困る。どこで死んだかなんて調べようが無いし、その時持つてる金が無駄だ」

と、財政担当に言われて引き下がっていた。結果、彼の生活資金はほぼゼロ。同僚から少しづつ恵んでもらいながらその日暮らしを続けていた。

「助かる・・・」

男としての悔しさをかみ締める彼をその場に置き、彼女は受付へと向かい彼が驚くような行動を取った。

「カップルシート一枚」

カップルシート、その名の通りカップルのためにあるシートで、その特徴は席がソファタイプになっており、密着して座れる事にある。特にホラー系はよからなぬ事をたくらむ男共によって、集客率は膨大に増えていた。

「そこまでする必要があるのか？」

彼はいい加減気味が悪くなっていた。一般シートもあれば座り心地の良いプレミアムシートも設定されているのだ。

「お金を払ったのは？」

彼女がチケットをひらひらさせる。

「・・・何でも無い」

嬉しそうな女性とその後にくどくどか困惑気味な表情で後ろを歩く男性。この世界では大して目立つ容姿ではなかった事もあって、彼らはこの国の中に見事に溶け込んでいた。

「ひっ」

上映中、彼は怯えていた。こんな芸術があるのかと感心する一方で、目を逸らしたくなる映像がどんどん流れていく。元々ホラーは得意ではなかったが、この映画は彼にとっては刺激が強すぎた。

「ふふっ」

時折、彼女はそんな彼を見て笑みを漏らす。今流れているのはミツクが人を食いちぎるシーン。実際にこの世界で見られる光景だったが、今は対策がきちんと取られている為、もう実際に怯える必要は無く、観衆達は純粹にエンターテイメントとして楽しめるだけの心の余裕を持つに至っていた。・・・一人を除いては。

何故だ、何故。タイトルは『妖精ガルファアの可憐な世界』だったはず。いくらホラーと銘打たれているとは言え、子供用ではないのか。ああ、今また一人の少女が猪の化け物に突き殺された、ガルファアの攻撃でその化け物は滅んだが、どこが可憐なんだ？ ああ、そうかきつと俺が馬鹿なんだ、そう、俺は強い、来ても倒せる、そうだ次はどこへ行こうああ何かそういえば、アイスクリームの店があったようなそうだそうしー。

彼はずっと、自分の頭の中に逃げ込む事で現実からの逃避に成功していた。

「ふう・・・」

映画を出てから彼らは本当にアイスクリーム店に来ていた。家族連れやカップル、友達同士で来ている者など、多岐に渡る客層の中で、今回は見事に彼らは浮いていた。

「そのロングコート、暑くないのか？」

映画館の中ならまだ奇異には思われていなかった。館内は暗かったし、冷房も効いていたため、少し厚着をしている者もいたため、浮く事はなかった。ただ、ここはアイスクリーム店、涼しさを求め

てやってくる客達の中で、彼女一人浮いている。勿論同席している彼も、である。

「何？　もしかして脱がしたい？」

彼は持っているソフトクリームを落としそうになった。

「何でそうなる？」

「事実じゃない？」

「あのなあ」

「ほら、落ちるわよ」

と、彼女は彼のを指差す。今にも溶けだしそうなそれを慌てて口の中に放り込み、頭を抑えるルシファ。

「馬鹿」

「くっ・・・」

何も言い返せないまま苦痛が過ぎるのを待つ。これはデートではない。ただのいじめだ。彼はこの時初めてこんなことになった事を後悔した。

「さて、と」

店を出て彼女は立ち止まり空を見上げた。晴れている事もあり日差しは厳しかったが、その眩しさが彼女は気にいった。

「次は？」

彼が立ち止まった彼女に追いついて同じように空を見上げる。彼女は空を見つめたまま彼の腕を取った。

「貴方が決めなさい」

「俺が？」

彼女より頭一つ高い彼が見下ろす格好となり、彼は隣の女性に聞き返す。

「何、エスコートしてくれないの？」

「では」

彼は行き場所を決めた。向かう場所は、ただ一つ。

「本が好きなの？」

「まあね」

図書館で彼は気になる本を適当に見繕っていく。貸し出しと同時に廃棄する本を無料で引き取る事も出来たため、彼はそのコーナーに真っ先に赴き、読める事を確認してから、これもただで貰った専用の手提げ袋に入れていく。

「昔、親に連れられてよく来たんだ、ライトやフェイトも一緒に。エミルと来た時は参っちゃったけど」

「そう・・・」

「本にはさ、色んな世界があるんだ。楽しい世界や、悲しい世界。今は本当に色んな世界に行ってるけど、あの頃の俺はここから覗ける世界が全てだったから、色んな世界を覗けるのが楽しくてしょうがなかった」

「今は、どう？」

彼女は楽しそうに話す彼を前にして不安になった。もしかして自分は、彼に間違った選択肢を選ばせたのかもしれない。あのままあの世界にいる方が、幸せだったのではないか。

例えばそこが偽りでも、LIGHTSの所にいた方が、よっぽど良かったのではないか。

LIGHTSの処分を知らない彼女からしてみれば、彼を救ったとは思っていない。

確かに銃は向けられていたが、彼女に彼が殺せない事は一目で分かったし、てつきり勧誘か何かしているものだと判断して、あんな冗談を言ったのだ。その後セイバーと戦い殺されなかった事から見てどうやらLIGHTSは彼に対して方針を変えたのか、と思い安心してしまった。

そんな彼女を見て彼は読んでいた本を綴じ、彼女に渡す。

「え？」

「読んでみたらいい、きつと気にいる」

タイトルは『明日への希望』。

「希望？」

タイトルを見て彼女は彼を見る。その顔は、笑顔だった。

「そう、いつでも希望を捨てない。いつか必ず心から笑えると信じて、俺は前を見続けたい。だから、今もこうして何とかしようと頑張ってる」

「それで、今はどう？」

「希望は持つてるよ、明日への。こうした今日があるのはサディケルのお陰だ。ありがとう」

彼は黙って手を差し出す。彼は彼女に感謝していた。今の自分を与えてくれた事を。彼女が自分を連れ出してくれなければ、自分は殺されていただろう。彼女は気付いていないようだったが、エミルと共にいた男のあれ。くらえばおそらく死んでいたほどの威力を向けられて、彼はとっさに防ごうとした。それが力の解放に繋がったのだろう、と彼は振り返る。

「どういたしまして」

彼女はそつと彼の手を取り、握手を交わす。笑顔で。そんな彼らを遠くから見ている視線に彼らが気付くのはそのすぐ後だった。

第一章 第九節 偽りの『世界』

「気づいたか？」

「誰に言ってるの？」

図書館を出てからすぐ、彼らは何者かの視線に気づいた。先ほどからつかず離れずの距離を保ち、尾行してくる何者かに注意を向けながら、彼らはなるべく人通りの多いほうへと歩いていく。

「誰でしょうね？」

「考えたくないな」

自分たちの足取りを掴め者はそう多くない。やはりあのテリトリ―内に入り込んだのが拙かったのだろうか。と彼は公開しつつ、いきなり路地へと入り込んだ。慌てて追いかけてきたその人物の後ろに彼らは舞い降りた。

「あれ？」

そこでルシファは素っ頓狂な声を挙げ、込めていた力を解く。それを見たサディケルも同じ様にして、彼の後ろに立った

「あ、すいません・・・ばれてました？」

当の本人のクリアはそんな彼らを見て罰の悪そうな顔をする。

「別に尾行なんかしなくても、声をかけてくれれば」

彼は緊張感から開放されたこともあって、大きく息を吐き出した。どうしてここにいるのかは知らないが、会えたことは好都合だった。これでもう今日で解放されるのだから。

「ですよ、あんまりにも仲が良さそうだったからつい・・・」

「ああ、約束どおり連れてきましたよ」

彼は一步横に移動し、後ろにいた彼女を紹介する。

「はじめまして、クリアさん。サディケルです」

と、彼が聞いたことも無いような丁寧な口調で挨拶する。

「あ、こ、こんにちは。きれいな人だなあ」

「ありがとう、彼がお世話になったみたいで」

「はい、でもこんな方なら、最初から勝ち目無かったですね」

嫌な予感によく当たるとは言ったもので、彼は後ろで、まるで馬鹿を見るかのような目で彼女を見つめ、次いで気づかなかった己の不注意を恥じた。

「これから、どこかへ行かれるんですか？」

ほら来た、と彼は判断し、適当に方便を並べる。

「ええ、これから二人で食事にでも」

サディケルが驚いてこちらを見るが、彼はそんなことなど気にせず彼女の腕をとり歩き出した

「では、これで」

「あ、待ってください。何なら、私が美味しいところ案内します。ご迷惑をおかけしたお詫びに」

彼は正直強引にでも逃げ出したかったが、彼女の言葉がそれを許さなかった。

「あら、いいじゃない。そうしましょうよ」

確かに上客には違いない。ただ、今日を最後にここの仕事を受けることはもう無いだろうが。

「いや、でも・・・」

なおも躊躇する彼に、彼女は睨みを利かせた。

「行くわよね？」

こうなると彼はもう断れなかった。それに、クリアの考えもよく分らない。サディケルがいるのに、何故誘うのか。

彼は彼女がLIGHTSであると確信していた。大体、と彼は考える。自分に一目ぼれなど有り得ないし、約束していた今日が休みだったのは、おそらく組織内で打ち合わせをするためだろう。となると、このままどこかへ連れ出して罠に嵌める。これが最も効率的な方法だが、問題は相手がサディケルだということ。それこそセイバークラスが出てこない限り勝ち目は無い。

「分かったよ、お願いします」

「はい、良い所紹介しますよ」

そう言つて彼女は歩き出した。後ろを上機嫌でついていくサディケルと考え込むルシファ。どこへ連れて行かれようと対策だけはしておかなければいけない、という彼の覚悟はまたもや折れることになる。

「ここです」

連れて行かれたのは焼肉店。まずは食べれそうで安心した彼だが、同時に警戒する。毒が入っているかもしれないし店員や客がいきなり襲い掛かつて来ないとも限らない。

辺りを見渡す彼を見て、サディケルはゆっくりとため息をついた。焼かれる肉に注意を払いつつ、彼は出てくる水や料理に何もおかしなところは無いかチェックする。

「さ、食べましょう」

「はお、じゃんじゃんどうぞ」

彼女たちが次々と口に入れていく一方で彼はどうにも嫌な予感が拭えない。今のところ彼女におかしな点は無。わざわざ食事に行ったところでコンディションが狂うことなど無いし、はっきり言って敵に対して取る行動としては無意味だ。

「食べないの？」

「いや、食べるけど・・・」

結局、食事もそこそこに、彼は考えに没頭し続けることになる。

「ありがとうございました、楽しかったです。また一緒にしてもよろしいですか？」

「ええ、楽しみにしています」

そう言つてクリアは帰つていった。啞然とする彼の隣で彼女は小屋へ戻るため人気の無いところへと向かう。

「なんでだ？」

未だに考え続ける彼に彼女は笑いをこらえ切れない。

「何だよ？」

彼はいきなり笑い出した彼女の方を見て尋ねた。正直今日はよく分からないことばかりだった。

「こんな日もあるってことよ」

「こんな？」

「ええ、だから今日くらいゆっくりしなさい。彼女は本当に貴方に一目惚れして、本当にそのお詫びのために連れて行った。信じてあげなさい」

「何でわかるんだ？」

彼女はウインクして微笑んだ。

「自分で考えなさい」

彼は思う、本当によく分からない。

彼らは小屋のすぐ近くに移動し、小屋への道を歩く。同一世界内のワープができる彼女だからこそその芸当だった。

「荷物取ったらさっさと帰りましょ？ 少し疲れたわ」

「全くだす」

「・・・」

「どうしました？」

なぜかこつちを見て黙り込んだ彼女の隣で、彼は足を止めた。

「お願い決めたわ」

「え？あ、ああお願いですか」

彼は悪い予感はこの事だったのかもしれない、と考え直していた。どんな事をさせられるのか分からなかったがとりあえず覚悟は決めた。

「さっきまでの口調を続けなさい」

「・・・タメ口？」

「あら、聞けないの？」

「分かったそうする」

彼は安堵していた。どんなのが来るのかと思ったら意外と楽なお願い。彼女にこの口調で話し続けるのは少々緊張するが、ほかの事に比べたらマシだろう、と彼は思い、小屋の扉を開けた。

「遅かったな」

彼は開いたドアをすぐに閉めた。

「気づいてたのか？」

「何に？」

彼が彼女に詰問し始めた途端、小屋が吹っ飛んだ。

「待っていたぞ」

「無茶苦茶だ・・・」

「あらら」

セイバーの姿を認めたサディケルが苦笑いする。

「気付かなくて当然だ」

「なるほどね」

納得したサディケルに彼は説明を求める。と彼女はセイバーの胸元を指した。

「あの星のマークした紋章、あれで気配を消してここまで来たんですよ。あれを持ち出してくるなんて、あの子本気」

「どうにかできないのか？」

慌てて彼が尋ねるがサディケルは首を横に振る。

「駄目ね、私の、というか呪文による戦闘を主とする大概の能力者は相手の気配が読めないと術が発動できない」

「ってことは」

「私今回無力」

「簡単に言っつなよ・・・」

「無駄話は終わりだ」

「げっ」

飛んでくるライトニングをから逃げるように彼らは森の中へと逃げ込む。

「あれさえ壊してくれればどうにかできる」

「あれさえ、って言ってもな」

彼女の胸元に攻撃が当たる位なら、と仮定した話だ。彼はすぐに状況を整理する。

「分かった、時間を稼ぐから――」

「了解、やるじゃない。冷静ね」

作戦を聞いた彼女は賛同の笑みを送る。

「死にたくないだけだ。頼んだ」

そう言つて彼らは二方に分かれる。後を追うセイバーは当然のよう
にルシファを追撃する。

「ライトニング」

後ろから二線、光の竜が彼を襲う。彼はスピードを上げ動物のい
ない高台までそれらを引きつけ、

「八十九式」

すると八本のサリツサが彼の周りに正方形を二つ作り出す。光の
竜はその二つの四角形の辺をなぞる様にして通り後ろで衝突し爆発
彼はその勢いに乗り彼女の方へ一直線に飛ぶ。

「三十八式」

五本が彼女の周りを取り囲み、

「三十二式」

それらに注意を向けた彼女に真上から矢印状に展開されていた残
りの三本を落とす。

「効かん！」

剣で一閃され、ばらばらになつた中から二本を掴み

「七十一式」

体中に竜巻がまとい、彼女のほうへとサリツサを投擲する。竜巻
と爆発の勢いそのままに投げられたサリツサはそのままセイバーの
剣身に受け止められ、セイバーは態勢を崩す。

「三式！」

その隙を突き八本のサリツサがそれぞれ急速な回転を始め、彼女
に襲い掛かった。

「ちいっ」

次々と繰り出される技にセイバーは舌打ちする。『魔女』サディ
ケルと、その右腕と評されているルシファ。いくらセイバーといえ

ども二人同時に相手にするのは酷だった。

それでも一人で行くと言い張る彼女にランスロットが手配したのがスターチャーム、LIGHTS内でも使用する事が出来る人物は限られており、また強力な効果とは引き換えに、副作用が大きかった。

「つつ」

徐々に彼女を取り囲む輪が小さくなり、徐々に彼女の体に傷が増えていく。何とか必死に回避するが、前回よりも相手の動きが段違いだった。

「ライトニング！」

やっとの思いで放ったものの、彼に届く前に相殺され、再び彼女に残りの七本が襲い掛かる。

ねえ、あのこが新しい『セイバー』？あんなのが……。

先代の『セイバー』様の名前を汚すことが無きよう……。

ふと、彼女の頭に忌々しい記憶が蘇る。そうだ、私はこんな所で立ち止まるわけにはいかない。倒すだけだ。どんな敵だろうと！

彼女の体に力がみなぎり、先ほどの思いと相まって莫大な気迫が放たれる。

「紫電！」

周りに数百もの光の矢が形成され、放射状に放たれる。

「げっ」

ルシファはすぐさま上昇するが、サリッサは全て破壊され、彼は数秒無防備になる。

「ライトニング！」

その彼に五線、光の竜が向かい、

「界雷！」

彼の周りで爆発を起こす。その衝撃で下に落ちてくる彼に彼女は飛び掛る。

「タケミカヅチ！」

「六式！」

「その技は効かん！」

そのまま彼女は彼に向かう、が届かない。

「自分にかけて何が悪い。八十式」

彼は自分に重力をかけ落下スピードを速める。その間に態勢を立て直し、タケミカツチを受け止めようとする。

「舐めるなああああ！」

凄まじい気迫と共にセイバーはルシファに切りかかる。が、そこで変化は起こった。

「！」

「はい、まいどあり」

「何！？」

いつのまにかセイバーは動きを止められ、宙に浮いた形となっていた。

「まともに戦っても勝てないからな。少しずるさせてもらった」

ルシファがゆっくりと彼女の方へ移動して行き、スターチャームを彼女から外す。

「返せ！」

「お前、自分の立場分かってんのか？」

彼がやれやれ、といった風に肩を竦める。

「残念だったわね」

「サディケル、何をした？」

ようやく落ち着いたセイバーは彼女を睨みつける。

「罠に嵌めさせてもらったわ」

「罠？」

「これ、付けると相手の気配感知ることができなくなるんだろ？」

「・・・何故、分かる？」

彼はそれを眺めながら口を開く。

「お前、俺達が小屋に入るまで存在に気付かなかったみたいだし、殺す気ならドアの前に立った瞬間切りつけばいい話だ。それに、今日のお前は前回に比べて回避が下手だ。視覚だけで動かなきゃな

らないのはきついよなあ」

彼は自分の能力を考えて、セイバーの實力に驚嘆する。あの高速移動するサリツサを視覚だけである程度かわし、全て叩き落とした拳句、彼に大技まで見舞ってきたのだ。やはりまだ、力の差があると彼は反省する。

「それで？」

「だから対策は簡単。対象さえいれば術は発動するんだ。だったら俺に発動させて、それをお前に反射させれば、ほらこの通り」

自慢げに話す彼に対してセイバーは悔やんでも悔やみきれない。あんな事を思い出したばかりに不覚を取り、いつも以上に気を使わなければならぬ状態にも関わらず我を忘れて突っ込む。素人以下の戦いをしてしまった自分が腹立たしくて仕方が無かった。

「もういい、殺せ」

彼女は諦めて頭を彼の方へ差し出す。どのみち自分は負けたのだ。いい訳など彼女には無用だった。

「あのなあ・・・」

ルシファはそんな彼女を見て途方に暮れた。そもそも彼はセイバーと戦う理由など無かった。ただ聞きたいのは、

「なあ、教えてくれないか？ 何故俺を狙う？ 命差し出すくらいなら教えて欲しいんだが」

「教えたらず首を切るのか？」

「何でだよ！」

事務的な口調で問う彼女にとうとうルシファは切れた。

「敵だぞ」

「敵でも殺すか！」

「何故だ？」

「誰かが悲しむだろうが！」

「いないさ、そんな者」

「うるさい！ ああ、もう！ さっさと答えろ！ 調子が狂う」

セイバーは何故か笑った。笑って、

「お前、馬鹿だな」

「腕の一本でも切り落としてやろうか？」

ルシファの怒りに全く動じることなく、彼女は真面目な顔になる。

「お前に関して詳しい事は私も知らー」

ここで彼女の言葉は途切れる。目に映るのは鮮血。

「がつ！」

「ルシファ！」

サディケルの悲鳴が響き、セイバーのロックは解除され着地。そしてルシファは右足の太ももを赤い何かに貫かれ、そこから出血し続けながら地上へと落下して行く。

「駄目ですよ？ 『セイバー』ともあるうものがそんなんでは」

「クリア！」

セイバーの声に慌ててルシファの落ちていく地点に駆けつけた彼女も声のする方を見る。と確かにそこにはさつきまで共に食事をしていた彼女がいた。そして彼女はゆっくりとルシファに狙いを定めて、

「ルシファは殺さなくては」

冷たい目で彼を見た。殺意と共に。

第一章 第十節 『世界』の約束

「やっぱり・・・」

彼は苦悶の表情で彼女を見た。ただ、その服装は彼の記憶にあるLIGHTSの制服とは違う。白を基調とし、袖には何かのマーク、ズボンには青のラインが入った服だ。

「とどめです」

刹那、彼女の髪が伸び彼へと向かう。

「デフレクター」

サディケルがルシファの前に立ち髪を受け止める。

「何をしているんです？ セイバー。撃つのでしょうか？ 彼を」

彼女はそれを見てセイバーの方に顔を向ける。丁度正面に対峙する格好となった両者はにらみ合い、セイバーはいつでも戦闘態勢に入れる様剣を構えた。

「あーあ、そんな態度を取るんですか？ それじゃその剣も泣きますよ。折角受け継いだのに」

「今回の件は私に全権があるはずだ」

「言われた事も出来ない者が何を言っんですか。折角手助けに来て挙げたんです。早くして下さい。それとも、セイバーである事を放棄しますか？」

「くっ！」

セイバーは剣の切っ先をサディケルへと向ける。

「悪く思っな」

「あら、切れるとも思ってる？」

「ああ」

「無理よ、だってあなたもっ」

彼女はスターチャームをセイバーに見せて、

「これ無しのまま私と戦って、貴方勝てるの？」

「勝っさ！」

気合一閃、ライトニングを放ちその間合いを詰めるセイバー。

「レミエファ」

サディケルの周りから黒い球状の何かが数十個取り囲み、それはやがて一つとなって、大きな黒い塊を形成する。

「界雷」

それを見たセイバーはライトニングを爆発させ、サディケルの視界を奪う。あれを持っていると言う事はこちらの気配が見えないはず。そしてルシファは動けない。

「はあっ！」

セイバーは彼女がいるはずの場所に剣で薙ぎ払う。

「鬼さんこちら」

ルシファを抱えて彼女は後ろへと後退、ついでと言わんばかりに大きな黒い球体はそこで弾ける。

「まずい」

クリアはそこで離脱。が、セイバーはその弾けた中を突っ切る。一瞬周りが闇に包まれ、その後視界が開けるとそこは最初の小屋。

「逃げられたか・・・」

彼女は剣を鞘に戻そうとした。が、

「いや」

彼女は見た。必死にルシファを抱えて走り行くサディケルの姿を。焦って移動させる場所を間違えたようだ、魔女」

セイバーはすぐに走り出した。

どうする？ サディケルは頭の中で事後策を必死に考えていた。ルシファは既に意識を失い動けない。ということは世界移動も出来ず、今は走り回ることしかできない。病院に行けばいいが、この住人と彼では体の構造に若干の違いがある。

「とにかく人通りの多い所まで」

走れば十分もしない内に街に出られる。その後応急処置をして意識が回復するのを待って脱出すればいい。そう思った彼女の横を、

竜が通り過ぎた。

「！」

慌てて後ろを見るとセイバーの姿。

「逃がさん」

「まさか！」

もつと遠くに飛ばす予定がこんな近くに。予想外の邂逅にサディケルは焦った。本来自分の命を最優先するなら、ここでルシファを置いていくのが一番なのだが、彼女の頭にそんな考えは無かった。「ほう、観念したか？」

サディケルは草原の真ん中で静かに彼を横たえ、その首にスターチャームをかけた。そしてそのままセイバーに向き直り、彼女はセイバーに対して向き直った。

「あなたが、でしょ？」

いつにも増して自信満々なサディケルにセイバーは訝しむ。

「真っ向から戦って私に――」

「勝てるわ」

サディケルは言い切って、呪文を詠唱し始める。彼女にとって久々の攻撃呪文となるそれは、青空の中高々と響いた。

「フィガルランス」

空が割れ、一瞬にして空から巨大な闇の大砲が姿を現す。

「馬鹿な！」

「消えなさい、セイバー」

ありえない質量を持つ者の出現にセイバーは面食らう。放ったライティングも効果が無く、彼女はサディケルへの間合いを詰め切りかかる。

「無駄」

紙一重でかわされ、反撃として腹部に蹴りが飛ぶ。

「はあっ！」

その衝撃で後ろに飛ばされつつ、セイバーは剣を構える。

「タケミカヅチ！」

それはサディケルの頭と、体を切り裂く、はずだった。

「アラエリックヒューガル」

サディケルの体が闇に包まれ、タケミカヅチはその彼女を通り抜けるようにして通過。

「！」

何の感触も無いことにセイバーは驚き、その瞬間、上から巨大な闇の竜が彼女に襲い掛かった。

「なっ！」

今まで戦ってきた彼女とは全く違う戦い方にセイバーは恐怖を覚える。まさか、とセイバーは思い、必死でその考えを振り払う。今まで手加減されていた、などと認める事が出来るはずもない。

「負けるわけにはいかない」

サディケルはこちらに集中している。ならば、とセイバーは竜が自らに降りかかる直前、ルシファへの間合いを一瞬に詰め、剣を下ろした。

「道連れだ」

その瞬間、咆哮と共に、莫大な質量を持った竜は自動的にセイバーを追い、結果両名共々を巻き込んで爆発した。

「ルシファ！」

彼女はセイバーの行動を見て取って彼にデフレクターをかけようとするが、スターチャームの存在に気付き舌打ちする。

「しょうがないわね・・・」

彼女は止む無く、その対象をセイバーに変えた。爆発した直後すぐさま駆けつけるが、大穴が形成され、下はよく見えなかった。

「セイバー・・・」

彼女は援軍を呼ぶため、一旦この世界から姿を消した。

「ぐっ！」

セイバーは身を起こし周りを見渡した。

「ここは・・・」

彼女は上を見て嘩然とした。見える青空は遙か上にあった。

「これでは・・・」

「上にはいけないだろうな」

「なっ」

いきなり返事が聞こえ、セイバーは距離を取り剣を構える。

「おいおい、俺はこの状態でお前と戦えるほど強くないぞ」

言葉はいつもの通りだが、顔は青ざめ、足からは出血が続いている。仕留める直前、自らにシールドのようなものが形成されるのを見て、彼女はまず眼を疑った。その驚きで剣先がぶれ、それは彼の首の皮一枚を斬ることになった。

「首はひりひりするし、足は痛いし。やるならさっさとやって欲しいんだがな」

彼は一人ごちで、自分の服を破り止血を開始する。勿論セイバーへの警戒も怠らず、彼は器用に足を縛り、ひとまず出血を止める。

「さて、どうするかな」

ルシファはそのまま横たわり上を見上げる。飛ぶ力も残っていないければ、ここから歩く事も出来ない。と、セイバーは彼の隣に腰を下ろし、そのまま岩壁にもたれる。

「この穴は？」

セイバーの問いに彼は首を振る。サディケルのあの術の威力は強大だったが、ここまでの大穴は形成できない。ならば、自然にできた物に都合よく落っこちたか、それとも昔ここで誰かが何かを掘っていたか。

「お前、俺の事殺さなくていいのか？」

彼の問いに彼女は一瞬身をびくつとさせた後、

「怪我人を殺す趣味は無い」

そう言っただけで黙り込んだ。

「じゃあ、さっきのあの気迫はなんだったんだよ？」

彼はそう尋ねるが反応は無し。サディケルはどうしているだろうか。彼が目覚めたとき見たのは、自分に剣を振り下ろすセイバーと、

その上から向かってくる馬鹿でかい黒い竜。ただ、威力はセイバーの光の竜とは大違いだった。

そのまま時間は過ぎ、いつのまにか陽は傾き、段々辺りは暗くなっていく。

「『セイバー』は、元々LIGHTSの隊長の中でも、特別に優れた者に与えられる称号の様な物だった」

「え？」

陽も落ちて大分経った頃、セイバーは独り言のように、いや、独り言なのだろう。彼はそう判断して、黙って目を閉じた。

「先代の隊長はセイバーでは無かったが、強く、気高くそして自信に満ち溢れていた。そんな彼女を信頼し、また支える者は多く、誰もが彼女は将来セイバーの称号を与えられると信じていたそう」

陽は完全に沈み、あるのは静寂の中彼と彼女の二人きり。その中でゆっくり一つの物語は綴られていく。

「そんな彼女はある日、一つの問題を起こす。部下の一人と恋に落ちたのだ。当然のように批判は起こり、彼女はその部下と一緒に逃亡した。その後長らく隊長不在の期間が続き、私がそこに就任した」
彼は黙って彼女の方を見た。暗闇の中、彼女は必死に何かに耐えているようだった。

「それ以来私は、それこそ必死でセイバーになろうとした。先代によつて落ちたLIGHTSの信頼を取り戻すために。決して最初は順風満帆と言うわけでは無かった。私は元々の身分はスラムだ。『セイバー』就任の際は色々言われもした。先代の隊長のようにならぬよう、上は私に早々にセイバーの名前を与え、二度とこのような事が起こらぬよう、部下も厳選された」

「本当の名前は？」

彼の問いに彼女は寂しく首を振った。

「本名は知らない。気付いたときにはスラムでゴミ箱を漁っていたし、拾われても特に名前は付けられず、LIGHTSに入るまでは

奴隷のような日々を過ごした。少しお前と似ているかもな」

「そっちの方が随分と辛いさ」

「え？」

「俺は、家族がいるから。また会えると信じているから、こうやって今日を過ごして、明日を迎えられる」

彼がしみじみと語るのを聞いて、セイバーは彼の言葉を訂正する。

「いや、お前の両親は未確認だ」

「え？」

彼は驚きの声を挙げる。いや、確かにライトは言ったはずだ。自分分は両親との子供である、と。

「ああ、確かに公式の記録にはそうなっているし、それを疑うのもそうはいない」

「なら？」

「確かに出生届はあるし、生まれた直後からお前はあの二人の下で育った。が、出産したと言う証拠はどこにも無い。穿った考えをするなら、誰かが出産した直後にその子を奪って自分の子供にした事も考えられる」

「そんな馬鹿な」

彼はその考えを一蹴する。と、そこで彼の思考もめまぐるしく動く。確かエミルは言っていた。自分の血統パターンはこの世界には無いと。と言う事は両親が違う世界から来たのだとだろう、と彼は納得していた。のだが、

「・・・俺は、誰だ？」

彼は目の前の空間に問う。本当に何が本当で何が嘘なのか、どうしてここまでの状況が作られているのか、その全てが分からない。

「知らん、お前の存在を知らされたのはランスロットの言う通り二日前、魔女が動いたからだろう、全ての任務を放り出して駆けつけさせられた。こっちこそ知りたい、お前何者だ？」

返ってきた返答に彼は不機嫌そうに返す。

「何でそんな事も知らないのに俺を殺そうとするんだよ？」

「命令だ、『ハムレス』の」

俯いて彼女が漏らした言葉に、彼は彼女のここまでの行動を振り返る。なるほど、どうやら彼女はかなりのプレッシャーを与えられているらしい。けどどうやら殺したくも無い様で、あんな倒してくれと言わんばかりの猪突猛進な攻撃を繰り返していたのだろう。

「何でお前、そこまで『セイバー』にこだわるんだ？」

「私にはそれしかない」

ぶっきらぼうに返事を返す彼女を、彼は真っ直ぐ見返した。暗闇の中、確かに両者は目が合った。

「お前は『セイバー』であるために『セイバー』をしているのか？」

「何が言いたい？」

「お前、何のために生きてる？」

「・・・」

セイバーは黙り込んだ。確かに自分は何のために生きているのか。上と下との間に入って、あるのはいつも命じられるまま任務を繰り返し、ただそれだけ。LIGHTSに入ったのは名前が欲しかったから。半ば逃げ出すようにして彼女はLIGHTSに飛び込んで、そこで必死に努力して、掴んだ物は何だ？ 変えようとは思った。だが、今の自分は何をしている？

何もしてはいない。いつかは、やがていつかはとありもしない希望に縋るだけでは無かったか。

「世界を救え。セイバー」

唐突に彼は話しだした。思わず彼女は聞き返す。

「は？」

「お前が『セイバー』なら、その役目はこの世界の平和だろう？」

誰もが笑って暮らして、笑顔で明日を迎えられる、そんな世界を作れ」

「何を言って」

「でなければお前はいつまで経ってもお人形のままさ。『セイバー』に祭り挙げられて、上の思うがままに動き、行動する。そこにお前

「はいるのか？」

「黙れ！」

「なあ、『セイバー』、ここはお前と俺だけだ。何を怖がっている。地位か？ 信頼か？それとも・・・」

「お前に何が分かる！」

「だったら何でこんな所で俺に弱音なんか吐くんだよ！」

彼の叫びに彼女は言葉を詰まらせる。

「お前、本当は望みがあるんじゃないのか？」

彼の優しい声に、彼女はぽつりと呟いた。

「・・・笑って欲しい」

「え？」

「私を見て、笑って欲しい。尊敬でも、敬愛でもなく私自身を見て笑って、名前を読んで欲しい。そんな世界に私はいたい」

「はあ・・・」

その言葉を聞いて彼は呆れた。

「な、何がおかしい！」

彼は違う違う、と言う風に首を振り、セイバーの頬に触れた。

「だから、いたい、じゃなくて作れ。お前の望む世界を。だからこそ『セイバー』だろう？ セイバー」

「けれど、私には・・・」

「見ていてやる」

「え？」

「側にはいれないが見ていてやる。お前の後ろで。その世界、きっといい世界だろうし」

「何を・・・」

「お前は強い、だからこそ弱い。だからお前が進む後ろに俺はいる。困ったら後ろ振り返ってみろ。笑って、『なーにそんなことで悩んでんだばーか！』って言うてやる。」

望むままいけセイバー。ハムレスはどうしても俺を殺したいんだろ？ だったらそれだけの力を持つお前を、『ハムレス』はそう簡

単にどうかしようとは思わない」

「けれど」

「何だ？ 俺が後ろじゃ不満か？」

「いや・・・」

彼は笑った。例え見えなくても、届くように。

「『ハムレス』が何考えているかは知らないが、俺はあいつら嫌いなんだな。潰させてもらうぞ。その時、お前は――」

「分かった。私は前に立ち続けよう。この世界全てを『セイバー』として導く。私だけじゃなく、全ての人々が笑えるように。名前を読んでもらえるように」

決意を聞いて彼は始めてセイバーを知った気がした。なるほど、伊達に『セイバー』をしているわけでも無いらしい。

「どうするんだ？ 内部にいて」

彼は明日のの予定を聞くかのように彼女に問いかけた。彼女は笑って答える。

「できるだけ情報を掴む。もしまずい事があるなら、お前に知らせる。表立っては動けないからな。そのくらいはしてくるんだろう？」

「・・・はいはい。どうせ俺は働き蟻ですから」

二人は吹き出した。

「ふう・・・全くこいつは」

彼の寝息を聞きながら、彼女は彼に肩を貸していた。無関係だからこそ話せた話題だったが、どうやら話してよかったらしい。彼女ももう寝ようとしたその時、彼が寝言を言った。

「・・・ライト」

セイバーは黙って彼を姿勢を整え、少し離れた位置であるときの決断を後悔し続けた。殺した、私が彼の家族を。例え偽りでも、彼にとつては真実だったはずなのに。ならば、と彼女は彼の方を見る。「何故、私にあんな事を言うのだ？」

言ってから直ぐに答えに気がついた。彼はもう個人の幸せを見て

いない。見ているのはただ世界、それだけ。だからこだわらない。出来る事は全てる。その覚悟があひ言葉だった。

「誰もが笑って、笑顔で明日を迎える・・・」

彼女はそう言って微笑んだ。誰にも見せる事無い笑みを。

「やっぱりお前はおかしな奴だな」

そう言って、彼女は瞼を閉じ、眠りに着いた。

上から一本の糸が降りてきたかと思うと、その糸は姿を変え人の形を取る。

「やれやれ」

アヌレイクはそう言つと、ルシファを抱え、再び上昇。その時、セイバーの姿はもう無かった。

第二章 第一節 A SCHOOL LIFE

「あーあ」

中庭の中にある大きな木で彼は一人横になっていた。人はまばらで、友人と雑談に興じる者、必死に次の試験に備え予習する者、彼のように一人でぼうつとする者等、様々な人間が思い思いの時間を過ごしていた。

「だりい」

次の授業まではまだ間がある。今は昼休みで、彼は昼食も取らずにいた為、時々お腹がなる。

「腹減ったなあ」

着ている服は最上級学年である事を示す緑色のネクタイ。紺のブレザーにズボン、そして革靴を履いている彼は、ここの学校の生徒だった。

「次は体育だっけか」

「そうだ、だからこんな所で油売ってないで早く教室に戻れ」

「うるさい、マルク」

彼は横になりながら上から降ってきた声に答えた。

「そんなんだからお前はいつまで経っても成績が下の方をうろつろしてるんだ」

彼はそんな彼の言葉に身じろぎひとつせず言葉を返す。

「お前みたいに糞真面目でもないんで」

「まったく、才能はあるのに」

「お世辞はいらん」

「お世辞じゃないって」

「全く、俺と付き合ってもいい事無いぜ」

彼はそう言つてようやく声のする方を向いた。紅い短髪、勝気そうな目にひねくれていそうな口元、彼の名は桐林恭介。そして、
「そうか？ 俺は結構楽しいけどな」

そう切り替えしたのは先ほど呼ばれた通り、名前はマルク・シュターク。こちらは金髪に整った顔と気乗りのいい性格の持ち主であり、恭介とクラスメイトであり、相棒だった。

「やれやれ」

恭介は立ち上がり、マルクと共に教室へと戻り始める。

「俺は体育嫌いなんだよな」

「何でだ？ お前の数少ない得意科目だろ？」

「うるさい」

恭介はマルクの頭を小突く。廊下を歩く途中、適当にぶらぶらしていると、後ろから声がかかった。

「まーた変なのが歩いてる」

「お前ほどじゃ無えよ、凜」

凜、と呼ばれた少女は軽く胸を張って恭介に最悪の事実を告げる。

「今日の体育は内のクラスと合同授業だから」

「は？」

「つまり」

恭介とマルクは一瞬にして頭を回転させ、ある事実思いあたる。

「げっ！」

「ま、観念して大人しくしてたら？ そうすれば少しは甘くなるかもね」

「そんなわけ無いだろう・・・」

凜の慰めも今の恭介には何の意味も成さない。

「次は大変だなあ」

マルクが軽く伸びをする。そろそろ次の授業の時間も近くなってきたため、彼らは教室に戻り、運動服に着替えて外に出た。

「いいか！ これより持久走を行う。だから走らず皆真面目に走るように。距離は二十キロ、制限時間は――」

「あーあ、始まったよ・・・」

「黙って聞いてなさい」

退屈そうに欠伸をする恭介を凜がたしなめる。隣のクラスに在籍し

ている彼女の名は神谷凜。彼らとは腐れ縁で、長く伸びた黒髪がトレードマークとなっている。

「しっ！ 聞こえちゃうよ」

マルクの言葉で彼は前を向き、生徒達の前で熱弁を振るう教師の言葉を聞き流す。運動場には他にも授業が行われており、所々で銃声や掛け声が響いた。

「あーあ、俺も実践訓練がしてえなあ」

そう言う彼に突然頭に何か衝撃がかかり彼は後ろへ一メートル程飛んでから体を地面に打ちつける。

「これも避けられないで実践訓練とは、まだまだ早いな」

「ぐっ」

前を見ると先ほどの教師が拳を握り、こちらにパンチを繰り出していた。どうして何メートルも離れている彼に届いたのか、それは彼の能力に由来する。

「出た、空気パンチ」

「威力がそのまま距離関係無く伝わるんだもんねえ、ありや痛い」
マルクと凜はそれぞれ彼に同情する。空気パンチ、をともに受けた彼は頭を抱えながら立ち上がる。

「くそ」

「ほう、まだやるか？」

再び構えた教師の姿を見て、彼は両腕を挙げた。

「いえ、結構です」

辺りから笑い声が起こり、何事も無かったかのように授業は再開される。

「ちくしょー」

恭介は時折愚痴を吐きながらグラウンドを走っていた。吹いてくる風に顔を顰めながら淡々と走る彼に並ぶ者がいた。

「おーお、頑張るねえ」

「うるせえ、エリック」

エリック・ラ・クリウス。一年前にここに転入して来た男だ。性

格は一言で言えば傲慢、とにかく人の弱点を見つけては楽しむ。恭介とは相容れない男だった。そもそも、と彼は思う。いきなりこの学校に入ってきて学校の中で大きな顔をするのはどう言う事だ。転入自体はよくある話だったが、エリックの場合は待遇が破格だった。「では頑張れ、恭介君」

「さっさと行け」

彼は手を振って彼を追い払う。こんな所で勝とうが負けようが彼にはどうでもいい事だった。と、横手から歓声が挙がる。どうせマリクがトップでゴールしたのだらう、という彼の予想は見事に外れる。

「セイバー様だ！」

「かつこいい！」

「懂れるなあ」

彼が声に釣られて見ると、そこには金の髪を後ろでまとめ、銀の鎧で身を包み、代々伝わる宝剣を腰から提げた剣士がいた。その名を『セイバー』。ここ、LIGHTS養成学校の責任者であり、実際の任務を行う独立治安維持部隊の総司令官。目にするのはこれで三回目だったが、彼の目には他者とは違うものが浮かんでいた。

「いつか、必ず俺がそこに」

そこに移るは羨望。要するに彼は負けず嫌いだった、例え相手が何であれ。そんな視線を知ってか知らずか、セイバーはそのままグラウンドの脇を通り抜け校舎へと向かう。後ろにはいつもの様に男と鎧がくっ付いている。

「ストーカーかよ」

「こら、ランスロット様とボルク様。強さは知ってるでしょ」

「そりゃ知っていますけど」

「まだまだ遠い存在よ、あんたからは」

「ふん」

彼は横に並んだ凜を置いていくようにスピードを上げた。頭に浮かんできたのはつい先日発表された卒業試験の内容。

「三人一組でグループを組み、与えられた任務を達成せよ、か」

「大丈夫、三人なら」

凜がこちらを元気付けるように言う。この試験に合格すれば晴れてLIGHTSに入隊、来年の春からは任務に当たる。もし不合格なら、もう一年ここで過ごすか、普通にこの世界で生きていく道を選ぶか。

「絶対合格してやる」

彼は地面をより強く蹴り出した。

第二章 第二節 彼の理由

後日、詳しい試験の内容が発表され、生徒達は歓喜の声を挙げた。

「やっで行ける。異世界に！」

恭介は震える拳をぎゅつと握り締め、一人静かに呟いた。少数の例外を除いて、LIGHTSに入ろうとする者の志望理由は二つに分かれる。一つは、本来住んでいた世界を何物かに破壊され、偶々生き残ったところをLIGHTSに保護され、破壊した者への復讐の為に入る者。そしてもう一つは、自身の使命感や正義感からLIGHTS入隊を志望する者。ちなみに恭介も凜もマルクも、志望理由は前者である。LIGHTSのテリトリー内深くにあるここは、そついった子供達を集めて保護する役割も担っていた。

「まさか卒業試験は異世界での任務なんて」

「気合が入る」

凜とマルクも氣勢を上げる。が、そんな中、一人余裕の表情を作る者がいた。

「ま、俺は既に行ってるけどね」

その場が静まり返り皆が彼の方に注目する。

「エリック、それマジか？ 生まれた所以外だぞ」

「ああ、なんなら証拠を見せてもいい」

恭介はそう質問はしたが、この男が自分達とは違う事は重々承知していた。まず、本来この養成学校は四年間の厳しいプログラムによって選抜され、毎年約一割の生徒が選考によって振り落とされていく。入学できるのは毎年約百名。つまり卒業できるのは六十名ほど。

それ故にここを卒業した、というのは抜群のステータスになり、LIGHTSに入れば勿論の事、例えここから一般の企業に就職してもエリートとして扱われる事が約束されている。それ故に就職目当てでここに入学する者も存在する。

そしてエリックは一年前から転入してきてにも関わらず、今は恭介達と同学年、つまり三年分の授業は免除されていた。いつもギリギリで選考をパスして来た恭介に言えた義理ではないが、どう考えてもそれは異例だった。

「生まれたときから僕はLIGHTS入りを任されてたんでね。その位当たり前だよ」

「じゃあどんな任務に着いてたんだよ」

「言えると思うかい？」

「いいや！聞きたくも無い」

恐らく事実なのだろう、と恭介は思う。ここは学校そのもののひとつの世界を構成している。つまりこの学校の生徒で無かったのなら、そう言う事なのだろう。

「何を偉そうに、どうせ大した任務でもないでしょ」

凜が顔をしかめてあつかんべーのポーズを取る。嫌われてはいたが、エリックはそれを何とも思っていない表情で、教室に戻っている。恭介たちもそれに倣う一方で、密かに決意を固める。

「絶対にやってやる」

例え試験が何であろうと。

「で、あるからここは――」

彼は数学の授業を聞きながら、手もとではある人物の写真を見つめる。十年前、彼がまだ八歳だった頃、彼の世界を破壊した人物。その名を通称ケルベロス。数々の世界を破壊しつくす事で有名な彼によって、住みかを奪われた者はこの学校にも数多く存在した。

「殺してやる・・・」

彼は普通の一般家庭で育ち、よくある反抗期を迎える前に、両親が亡くなった。一人泣きながらさ迷っているのを保護されなければ、今頃飢えて死んでいただろう。

「絶対に・・・」

その目は密かに殺意に満ちていた。

「今日どうする？」

放課後彼に話しかけてきたのはマルクとフラグラス・ジュニーコ。同じクラスメイトで、彼とよくつるんでいる生徒の一人だ。

「どうすっかなー」

卒業試験までは一カ月を切っていたが、彼には自信があった。学力を問わず実力だけが選考の対象となるこの試験は、まず死者が出る事は無かつたし、任務そのものも隊員がバツクアップに当たる。そして実際の戦闘では、彼はトップクラスの実力の持ち主だった。

「でも、まさかパンチで吹っ飛ぶなんて、寝てたの？」

「ちげーよ、こんな所で本気出したって無駄だ」

「またまた」

寮への道を戻りながら、彼らが話題にするのはやはり試験について。この世界は学校と生徒達が暮らすための寮、そして少しばかりの娯楽施設で構成されている為、大概の者はそこへ行くか、寮で雑談に興じるか、学校で勉強に励むかしていた。

「どんな任務なんだろうなあ、試験」

フラグラスの言葉にマルクはある一人の教師の顔を思い浮かべる。

「さあ、エミル先生にでも聞いたら、案外」

「教えてくれるか？あのチビ」

「誰がチビ？」

恭介はそう切り返した事を心中で激しく後悔した。

「あ、ああ。エミル先生。こんにちは」

「はいこんにちは。それで？」

につこりと微笑むその笑みに恐怖を感じ、恭介は逆に顔を引きつらせる。二年半ほどどこかで任務に当たっていたらしく、久々にここに復帰した、若い容貌を持つ彼女はその実今年で年齢が三桁に――

「何か失礼な事が頭から見えるんだけどなあ」

「ま、まさか。なあ？」

「はい、試験について考えてただけです」

マルクが助け舟を出し、結果彼はこの話題から逸らす事に成功する。

「試験？ ああ、もうそんな時期だっけ」

彼女は頬に手を当て考え込む。

「何か？」

「ああ、いや何でも無いから。大丈夫。ここまできたら後は頑張るだけだよ」

「また気楽に」

と、ここで彼女を呼び出すアナウンスが入る。彼女は一瞬顔を曇らせながらも、すぐさま踵を返し走り出す。

「それじゃ」

「あ、あの」

廊下は走ったら駄目だろ、という彼の言葉は空気を震わすことなく消え、後に残るのはどこか沈んだ空気。

「あの先生さあ」

「何だよ？」

フラグラスが何か言いたげに顎に手を当てる。

「何であんな空元気なんだろ？」

「知るか」

どうにも彼女が持つ空気はどう見ても重かった。一体どんな過去を持っているのかは知らないが、半端ではない。まるで闇を背負っているかのような、そんなどす黒いものが宿っているのではないかとこちらが心配したくなる。

「ふう」

恭介は自分の部屋に辿り着き、一旦私服に着替えてから部屋を出て、そのままマルクの部屋へと向かう。

「よう」

「お、恭介来たか」

「何だよ、いきなり」

「これ、新しく出た小説」

マルクが差し出してきた本を取り、彼は軽くページをめくる。どうやら異世界の本のようで、かれは自動的に頭の中をその世界の

言語に合わせる。

「『恋の魔法』、ねえ。お前こんなの趣味だったのか？」

彼はそれをマルクに放り投げながらちやかす。

「ち、違うエミル先生が貸してくれたんだよ。面白いからって。それにタイトルどおりでもないぞ」

「どうだか」

「本当だって！」

そんな掛け合いをしている中、凜が入ってきた。

「やつほー、どしたの？ 何これ？」

「あ、えつと」

マルクが罰の悪そうな顔をする。ここぞとばかりに恭介は攻勢に出た。

「なあ凜コいつつてあほshfhphjp:」

「は？」

マルクは恭介の口を塞ぎつつ、器用に足で本をベッドの下に押し込む。

「何すんだよ？」

ようやく開放された恭介がマルクに抗議するが、軽くいなされ話題は未来について。

「どこに配属されるのかな？」

「さあな、俺は任務にでれるのならどこへでも」

「本当、実戦好きだよねえ」

「まだ負け無しだっけ？」

凜とマルクがある意味彼に感嘆する。学力は必要最低限で、能力は強力。確かに即戦力とは言われているし、まず問題ないと学校からも見られている。勿論他の二人も。

「ここで負けてるようじゃ終わりだ」

何の興味も無しに恭介が言うのを凜が不思議に思う。

「ねえ、何で強くなるうと思ったの？ その、やっぱり悔しいから？」

「殺したいから」

「・・・」

「ケルベロス？」

凜の変わりにマルクが返す。

「ああ、何としても」

「無意味だと分かっている？」

「それだけの為に生きて来たんだ。少なくともそれまでは自分の人生を変える気は無い」

凜とマルクの世界を滅ぼした者達はいく先日、何者かによって捕らえられ、処刑されていた。ばやばやしていたら誰かに先を越されかねない。だから急ぐ必要があった。彼は改めて宣言する。

「俺は次あいつに会ったら間違い無くこの手で、殺す」

第二章 第三節 前夜

「中々有望そうじゃないか」

「まあな、まだまだ鍛える必要はありそうだが」

「おお、手厳しい」

校舎内、呼ばない限り誰も来ない理事長室にセイバーはいた。そこに一緒にいるのは黒い髪に端正な顔立ちをした男。着ている服は黒を基調とした例の制服。

「これが・・・次のリストだ」

「ありがとう、どうした？」

彼は手渡されたリストに目を通しながら、何故か言い淀んだセイバーに問い掛ける。

「私は、こんな事を――」

「いざとなれば俺の単独行動って事にして切り捨てろ。変わりはいくらでもいる」

「違う！ そんな事を言っているのではない！」

必死になる彼女を見て彼はおかしそくに笑う。

「分かってるよ。大丈夫、俺は」

そのリストに書いてあるのは最近崩壊、あるいはその危機にまで陥っている世界を示したものだ。彼はそこに示された世界へ赴き犯人を特定し、LIGHTSに引き渡す。

引き渡された者は極秘裏に彼女の元へと召喚され、『ハムレス』

と関係が無いが徹底的に尋問し、時には特殊な術を使用してでも吐かせる。かなり強引な手法で、なおかつ違法だった。しかし、彼らは既に微々たる物ではあったが、成果を挙げていた。

「まだもしかしたら、の段階だからな」

「ああ、証拠が無くては」

彼らに必要なのは証拠だった。彼らが犯罪者を裏で指揮している、という。

「わかった。色々こつちも調べてみるよ、それじゃ」

立ち去りかけた彼をセイバーが呼びとめた。

「ルシファ」

彼は立ち止まり振り向く、とそこで彼女と目線が合った。

「何だ？」

「・・・気をつけて」

気恥ずかしそうに告げる彼女に、彼は照れながら軽くLIGHT
Sの敬礼のポーズを取った。

「行ってくるよ、セイバー」

笑顔でそう言っただけで彼は、姿を消した。

―その日の夜―

「で、どこに誰を付ける？」

「エリックには私が付く様上から言われている」

「そりゃ、また」

「仕方が無い」

「そうだが・・・」

ランスロットは思わず天井を見上げる。理事長室でセイバーとランスロット、ボルクは卒業試験について協議していた。議題はこのグループに誰をつけるか。現在の生徒数は七十八名、つまり二十グループ。エリックにはセイバーが、そしてルーカスにはランスロットがつく事は決定している。

「ルーカスねえ」

ランスロットは溜息をついた。優秀ではあったが、どうにも融通が効かないのだ。あの男は。もっと柔軟性を持って欲しいのだが、なまじ優秀なだけに扱いが難しい。だからこそ彼がついたのだが、正直頭が痛かった。

「で、恭介は？」

彼は最大の問題を議案に挙げた。復讐に取り付かれたあの男は、少し再教育しなければならぬかもしれない。が、

「彼らには誰もつけない」

返ってきたのは素っ気無い返事。

「は？おいおい」

ランスロットは耳を疑う。一人は絶対隊員をつけるのが鉄則なはず。そんな彼の心を見透かすように、セイバーは言った。

「優秀な人物が見守ってくれる」

彼は全てを察した。

「はいはい、相変わらず頑張るねえ、あの男は」

結局味方なのか敵なのかよく分からないポジションにいる男を、ひとまず彼は信頼していた。一度実力を見るため戦ったが、中々筋がいい。あの調子で強くなれたらいつか抜かれるな、と思いつつ彼の成長を楽しみにしていた。が、

「違う、あいつではない」

あつさり彼女に否定される。

「っておい」

「その、まさかだ」

彼女は意地の悪い笑みを彼に見せる。こんな笑みを見せるようになったのはつい最近の事だ。

「あいつかよ・・・」

ランスロットは頭に浮かんだ彼の姿に心が沈む。確かに悪い奴ではないが、あの男の趣味は彼にはさっぱり理解できなかった。

「苦労するな」

「その方がいい」

「わかりました。そうしておく」

ランスロットはそう言ってこの協議を打ち切った。後は適当にランダムで配置すればいい。どうせ受かる奴は受かるし落ちる奴は落ちる。そして、死ぬ奴はいつか死ぬのだから。

「おやおや、僕にこんな事を頼むなんてね」

彼は、届けられた手紙を見るなりそれをそっと胸のポケットに入

れた。長い耳、緑の髪に細長い目、いわゆるエルフの特徴を持つ彼は目の前の人物に語りかける。

「仕方なかるう、彼女も優秀な人材の獲得に必死なのだ」

髭を豊富に蓄えた老人はゆっくりと腰を上げ、窓から星を見上げる。

ここはどこからも遠い世界、誰も知らない世界に彼らはひっそりと存在していた。

「どうしてあげようかな」

「あまり、いじめても」

「分かっていますよ。ええ、理解していますとも」

彼はそう言いながらも楽しげに目を細めた。その名をエデフィ。強大な力を持つ能力者でありながら、彼は表の世界に興味を持っていなかった。

誰に味方するでもなく、敵になるでも無い。興味があればいいことまでやり、興味が無ければ何も手を出さない。そんな変人に老人―シュトラウス―はその険しい目を彼に向ける。

「力の使い方を間違えるではないぞ」

それは師としての忠告だった。

「はい、お師匠様」

が、そう答えながらも、彼の頭の中はもう、それ所ではなかった。卒業試験まで、もう日は残っていなかった。

第二章 第四節 卒業試験

「とうとう来たか」

卒業試験当日、彼はいつもより少し早く起きて制服に着替えた。

外は晴れているが、この世界の天気は今の自分達には無関係だった。

「おはよう、眠れた？」

凜が丁度ドアから出てきてこちらにやってくる。

「まあな、そっちは？」

「同じく」

二人は並んで歩きながら食堂への道に行く。この学校の食堂は一階の端っこに位置しており、そこでの朝食の時間に各グループに任務内容が言い渡される予定だった。

「おはよ」

「おう、そっちも今日は早いな」

「勝負の日だからな」

食堂に行くとマルクが既に席に座っていた。読んでいた本には丁寧なブックカバーが掛けてあった。例の本だろうな、と彼は思うが口には出さない。

その後、そろそろと人が集まりだし、グループの数だけ隊員が前に立ち、ランスロットが中央に立って説明を始めた。

「今から、各グループに卒業試験の課題を通達する。それぞれ隊員が一人ずつ同行するため、各員指示を聞き、LIGHTSの一員である事を自覚して試験に臨む事、以上だ」

しれから隊員が一人ずつ付くが、その中で一際歓声が挙がったのが、エリックの班だった。

「セイバー様が！？」

「どこからどこまでもVIP扱いだな」

凜とマルクは純粋に驚いているが、恭介は一人ほっとしていた。今の内から戦い方を知られるのは少々嫌だった。

その後も隊員が一人一人付いていくが、何故か彼らには誰も来ない。

いい加減不審に思ったのだろう、凜が手を挙げて質問した。

「すみません！ 私達は？」

「お前達の担当は現地で待っている」

「現地で？」

凜の質問に近くにいた隊員が答える。

「ああ、何だか知らんが期待されているみたいだぞ、頑張れ」

そう肩を叩かれ彼は行ってしまう。

「あれ・・・」

「ああ、カイルさんだ」

カイル・ロンダート、LIGHTSの若きエース。恭介の当面の目標でもある人物は、他の班に付いているエミルと一言二言交わり、担当の班に付く。

「現地だつてさ」

「現地つてどこだよ!？」

「さあ」

凜、恭介、マルクは顔を見合わせる。世界移動の呪文は力があればだれでも扱える易しいものだったが、行く場所が分かっていないとどうしようもない。

「ほら、ここだ」

「ランスロット様」

彼からメモを手渡され、彼らはそれを覗き込む。当然ながら世界の詳しい情報は分らないが、彼らは胸を膨らませる。周りを見ると、もう既に、この世界から離れている班もある。

「それじゃ」

「さつさと」

「行くぜ！」

凜、マルク、恭介はそれぞれ自分に気合をいれ、初めての異世界へと、その足を踏み入れた。

「ここ？」

「みたい」

マルクと凜が興味深そうに周りを見渡す中、恭介はおかしいと思
った。

「で、担当はどこだよ」

彼らは砂漠のど真ん中にいた。吹き荒れる風が彼らの髪を揺らし、
飛んでくる砂がたまに目に入り痛い。

「とりあえず歩こう、気配も無い」

そのマルクの声を合図に三人は歩き始めた。砂舞う地を足跡を残
しながらゆつくりと進む。そのまま歩いていくと、急に視界が開け
砂で出来た四角い建造物が現れた。

「何、これ？」

「聞くな・・・」

凜の質問に恭介は何も言えない。ただあるそれは、入り口を大き
な口のように開け、ただそこに建っている。入って来い、と言われ
た気がした。

「行こう」

恭介は足を踏み出す。後ろの二人も黙って歩き出し、彼らは建物
の中に足を踏み入れた。

「RPGかな？」

「ロールプレイングゲーム？」

凜が話しに乗ってきた事により、調子付いたマルクが嬉しそうに
話します。

「そう、主人公が一人とパーティーが一緒に同じ目的のため、ダン
ジョンや色んな世界を廻って冒険する。今は丁度そんな状況じゃな
い？ 主人公とヒロインが誰かは知らないけど」

「さあな」

恭介は向けられた視線を無視して前へと進む。入ってから一本道が
続く上、何も出てこない。これではダンジョンでも何でも無く、た

だの建物。つまらない、と思いながらも警戒は緩めずただ前に行く。
「ん？」

恭介は前を見た。そこは出口だろうか、彼らの前には入り口と同じように大きな口が開いている。暗く、その先は見えない。

「出口？」

それに合わせて足を止めたマルクが恭介に並ぶ。

「おかしいぞ」

「何が？」

「ああ」

凜が聞くのと同時にマルクが気付いた。

「ドアも無いのに先が見えない」

「あ」

「ご名答」

そこには先が見えなくなるような遮蔽物は存在しないにも関わらず、先は闇に包まれ何も見えなかった。

「誰か・・・いるってこと？」

「少なくとも、何かはここを見てる」

恭介は唾を飲み込んだ。ここまでの世界と建造物をこのためだけに作ったのだとしたら、相手は相当の能力者だ。まともに戦って勝ち目があるのかすら疑わしかったが、

「まあ、試験だ。相手も殺そうとはしてこないだろう」

そう言つてマルクは歩き出した。確かに、と彼は気を取り直し、マルクの後に続く。それを見て凜も続き、彼らはその向こう側を見た。

「あれ？」

「戻った？」

「・・・」

彼らは入り口に立っていた。何故入り口が分かったのかというと、自分達の足跡が何故かまだ残っていたから。

「どういう事だ？」

恭介は考え込む。今まで通ってきた道におかしな所は無かった。となると、

「誰かが何か―」

「僕だよ」

後ろを振り向くとそこにはいつぞや教科書で見たままのエルフがいた。

「誰だ？」

恭介は彼を睨みつける。彼は涼やかに答えた。

「エデフィ」

マルクが首を傾げる。確かに、と彼も思う。そんな男の名前は聞いた事が無かった。

「知らなくてもしょうがないよ。無知じゃない。活動してたのは百年も前の話だし」

「そんな昔話にできそうな奴が何のようだ？」

恭介の凄みにも彼は怯むことなく大仰に、

「知らされて無い？ 聞いてないのかな？ 君達の担当だよ。特別な」

「担当？」

「え、だってこの人」

「LIGHTSじゃない」

「おやおや、口々に言われても困るな。参っちゃうよ」
「で、どうすればいいんだ？」

人を茶化す態度を取り続ける彼に恭介は鋭く問う。

「簡単だよ、難しくない。僕に一撃与えれば合格」
「は？」

マルクが驚きの声を挙げた。

「随分と舐めてくれるじゃない」
「凜が直ぐに戦闘態勢に入る。」

「言っただな、後悔するなよ」

恭介が力の展開を開始する。

「上手くいくかな？ いかないかな？」

こうして、一見簡単そうな卒業試験は、幕を開けた。

第二章 第五節 とりあえずの終幕

「当たるかな？ 大丈夫かな？」

「くっそおおおおお！」

恭介は自身のバスタードソードを相手の首めがけて振り払うが、相手はひよいと頭を後ろに逸らせて余裕の表情。

「鋭いねえ、キレがあるよ」

「だったら当たれ！」

「無理だねえ、不可能だねえ」

頭を薙ぐと見せかけて足を切り払うが、ぴよんと飛んだ彼は剣の上立ってみせる。

「な・・・」

「残念でした、惜しかったよ」

「食らえ！」

横手からマルクのロングソードによる突進が来るが、胸を逸らし、紙一重で避け、彼の頭に数発の蹴りを入れる。

「がっ！」

そのまま吹っ飛ぶマルクを見て恭介は距離を取り、

「ギョールスキレッグ！」

剣から紅い闘気が立ち昇り、彼の体が力で漲る。

「凜！ 援護しろ！」

先ほどから距離を保っていた彼女は呪文の詠唱を完了させる。

「フレア！」

上空から巨大な岩石が炎を纏って飛来する。

「へえ」

彼は笑みを無くし、それらから距離を取る。最後の炎弾をかわし、息を付いた刹那、

「はああああっ！」

先ほどとは比べ物にならないほどのスピードで恭介が迫る。

「アデネ」

彼がこの戦いで始めて呪文を唱えた。すると、いきなり周りから大木が何本も伸び、彼の行く手を塞ぐ。

「邪魔だ！」

次々と生まれる木を切り倒していくが、とうとう捕まり、そのまま彼は上空へと放り出される。

「ハイルロム」

立ち直ったマルクが今度は高く飛び上がり上から下突きを見舞う。

「上手いねえ、巧みだよ」

彼はそれを手で受け止めた。

「え？」

信じられないものを見たかのような顔をする彼にエデフィは笑顔で詠唱を開始した。

「ギアジユローム」

幾千もの蔓が彼の四肢を縛り上げられ、その後足だけを縛られたまま、四方に叩きつけられ、彼は気絶した。

「む……り……、勝てない」

凜が膝をわなわな振るわせその場に座りこむ。

「ああ、無理も無い。楽にしますから、一瞬で済ませます」

彼は一歩ずつ彼女の方へ歩み寄る。

「止めおおおお！」

恭介が落下する勢いで彼に向かうが途中で蔓に弾き飛ばされる。

「がつ！」

「あ、ああ」

そこにあるのは圧倒的な恐怖、それだけだった。

「終わりですね。GAME OVER」

彼が彼女に手を向けた刹那――

「しつこい！」

「逃さん」

いきなり世界への乱入者が出現した。

「え？」

「何！？」

「あれは」

凜と恭介は驚き、エデフィは何か納得した様子でいきなり現れた二人の行方を見る。一人はフードを被り、顔がよく見えない。もう一人は黒尽くめの服を纏い彼を追う。

「リユーヒヤス」

一方の男から数々の獣が出現し、もう一方の男に向かう。
「七十三式」

すると彼の周りを旋回していた八本の大槍が黒い光りを纏い、それぞれが獣と線で結ばれ、一瞬にして全てを貫く。

「エヴァルレイド！」

つづいて出てきたのは巨大な鳥。その鳥は生きているかのように一度鳴いた後、彼に炎を吐く。

「危ない！」

「いや、大丈夫」

恭介の叫びに、エデフィは冷静に返す。巨大な鳥の吐いた炎は莫大な熱量を持って彼に襲い掛かる。

「十九式」

彼の周りのサリッサが旋回を止め、彼を包むように停止する。

「勝てるっても？」

その男はもう一方の男を挑発する様に言い、不敵に笑った。

「何が、この状況でそんな口が叩けるか！」

そこで初めて彼の顔が明らかになる。

「あれは！」

恭介の顔が驚愕に変わる。レルグラ、第一級の犯罪者で、今まで自分の欲望のままに数々の世界を破壊して来たならず者。ただ、持っている力は伊達では無く、LIGHTSでさえも逮捕に手を焼き、何度も見つけては殲滅されると言うことを繰り返していた。

「勝てるわけが無い」

恭介はそう判断した。いくらあの男が強かろうと、そんな事は関係無いほどの力をレルグラは持っている、そう思った。

「そうだね、正解だ」

エデフィが褒める様に彼を見つめる。

「だったら何で援護しないんだよ！」

恭介の怒りに彼は何で？という顔をする。

「犯罪者の味方をする趣味は無いなあ」

「は？ だって」

「見てみなよ」

今にも炎は彼を包み、彼はその熱によって溶けるかそのまま燃やしつくされるか、のはずだった。

「ははははは！ 俺に勝とうなんざ百年早えんだよ！」

レルグラが勝利を確信した瞬間だった。いきなり球状に炎が圧縮され、そのまま弾けるように炎が吹き飛んだ。そのまま彼は巨大な鳥へと向かい、

「三十二式」

上から矢印状に展開したサリツサが二つ落とされ、その鳥を裂く。

「六式」

その直後六本のサリツサが彼の周りの地面に突き刺さり六芒星を浮かび上がらせる。

「観念するんだな」

レルグラはいきなり膝を付き、そのまま体ごと叩きつけられる。

「があああああああ！」

「このままお前を引き渡す」

彼はゆっくりと歩いて行き、最後の技を告げた。

「九十九式」

サリツサが糸状に変化し、レルグラを縛りつけ、身動き取れないようにする。

「ちくしょー覚えてろよお前は——」

「転送」

彼は短く告げ、その瞬間、レルグラの姿は消える。

「ふう」

彼は短く息を吐き、力の展開を解く。

「久しぶりだねえ、2週間ぶりだねえ」

「ああ、エデフィか、久しぶり」

親密そうに会話を交わす彼らを見て、恭介は密かに力を込めた。

「フェルクー」

そう静かに呟き、彼は一瞬で彼の後ろに移動した。短距離とはいえ高難度であるはずの同一世界内での瞬間移動。これが彼の最大の切り札だった。

「チャンス」

そう告げ、切り払った。

「ふう」

ギリギリで避けてあげたエデフィは、彼に手刀を突き付けた。

「凄いいじゃないか、流石じゃないか」

「ぐっ！」

首を締められ持ち上げられる。必死に抵抗するが、体は蔓でロックされ動けない。

「それくらいにしとけ、もう終わりだろ？」

その時、後ろで成り行きを見守っていた男がエデフィの肩を掴んだ。彼は微笑み、ゆっくりと恭介を地面に降ろした。

「大丈夫かな？」

「な、何とか」

「ごほほと咳をしながらも、彼は何とか立ち上がる。」

「どうして降ろした？ 勝負はまだ」

「終わったよ、君達の勝ちだ。クリアだよ。奇襲、見事だった」

エデフィはそう言っ、自身の服を彼に見せる。白い布を纏っている彼の服はよく見ると、ほんの少しだけ切れていた。

「こ、こんな勝ちが欲しかったんじゃない！」

彼のプライドがその勝利を受け入れなかった。

「ワザと切られたな！」

彼は非難の口調でエデフィに剣を突き付ける。

「ああ、だから強くなれ」

「彼の言う通り、強くなれるよ、精進するといい」

目の前の二人は穏やかにそう言った。

彼は歯を食いしばってその言葉を受け入れた。この二人、自分とは力の桁が違う。そんな彼らがくれた仮初めの勝利。

「分かった」

「え？」

エデフィが思わず聞き返す。

「俺が、俺はいつか必ず強くなって、絶対強くなって、『セイバー』になる！その時、もう一度勝負しろ！」

何故かエデフィが意味ありげにもう一人の男を見た。彼は肩を竦め、恭介に言った。

「ああ、今はそれでいい」

恭介は彼からの視線を真っ向から受け止めた。

「待っている」

「熱いねえ、情熱的だ」

エデフィが茶化し、彼はやっと闘いの緊張感から開放され倒れる。

「恭介！」

見守っていた少女が彼の下に駆け寄り、様子を見た後で安堵する。

「ねえ、もしかしてこの世界に来たの——」

「言っな、期待料だ」

エデフィが小声で彼に耳打ちするのを彼は制した。そのまま振り向き、彼はエデフィに別れを告げる。

「それじゃ、また」

「そうだねえ、会えるといいねえ」

彼は姿を消し、卒業試験は幕を閉じた。

第二章 第六節 意外な結果

「それで、どうなったの？」

「そのまま二人とも消えちゃって、私は途方に暮れたんだけど、すぐにLIGHTSから迎えが来て」

「予定通りだったわけか」

ここはLIGHTSの本部の敷地内にある病室。マルクと恭介は二人、大事を取って入院していた。白で統一された室内に彼らのベッドが二つ。そして今はお見舞いに凧が訪れている。

特に異常も無いため明日には退院できるとの事で、ひとまず安堵した彼女はすっかり調子を取り戻し、彼らに事の顛末を語っていた。

「あれで合格なんてな。他の奴らはどんだけ甘い試験受けてんだか」
恭介はベッドで横になり、天井を見上げる。あれだけの戦闘の後にも関わらず体に特に怪我は無く、注意して闘われていた事を実感する。

「俺なんか直ぐに気絶だぞ・・・情け無いやら悔しいやら」

「あの人が来なかったら私もやられてた。マルクだけじゃないよ」

凧はあの時の事を思い出して、背中がゾクツとするような感じを覚え、一人身震いする。

「あいつか」

「あいつだなんて」

「感謝はしてる、けど」

圧倒的な強さを見せ付けられた彼は、自分がいかに井の中の蛙であるか思い知らされていた。

「強い、あんなのが世界にはごろごろしてるんだろっな」

マルクの感想に恭介は頷いた。

「ああ、だから俺達も強くならなきゃいけない。もっと」

「強くなれるよ、私達」

「とりあえず、スタートだ」

彼らは決意新たに前を見た。先に広がる、どこまでも続く未来を。

「合格したのは十五人!？」

「意外だよな。こんなの前代未聞、だつてさ」

恭介はフラグラスと今日室内で話していた。朝、今日室内に入ってから妙に空気が重かったのは感じていたが、まさかここまでとは思っていなかった。

「誰が合格したんだ？」

「僕の班と、エリックの班と、ルーカスのとこ、そして恭介」
「後一つは？」

ここまでは実力どおりと言っても差し支えない面々だった。

「・・・キューエル」

「あいつ？」

キューエルの顔を思い浮かべながら彼は驚きの声を挙げた。周りから何事かと視線を向けられたが、そんな事を気にしていられるほど彼に余裕は無かった。

「驚くよなあ、あいつそんなに強かったっけ？ 他の二人も別に、だし」

「うーん」

彼らは考え込むが答えは出ない。一応任務という扱いではあるので、クラスメイトにさえ課題の内容は話せなかった。

「どの道、卒業式までこの重たい雰囲気は続くみたい」

彼は教室を見渡して彼にやれやれ、と視線で告げてくる。

「仕方ない、今年はいつともより厳しかったんだろ」

とは言いつつも、彼はそれを当然だとも感じていた。あの実力者達を相手にしていける程の強さを持ったものなどこの学校にはいない。

「合格した奴もどこまでいけるだろうな。相当きついぜ、これから」
「どうしたの？ 何か弱気だね」

「違う、現実を知っただけだ」

「現実？」

「そ、つい前までは想像することも出来なかったような」

彼はそう言って自分の席に着く。マルクも何だか上の空で窓の外を見ていた。エリックは相変わらず取り巻きを連れてへらへらしていたが、あれで実力者なのだろう、と彼は密かにエリックを見直した。

「ルーカスはまあ分かるが、キューエル、ねえ」

落ちこぼれのキューエル。それが学校全体で見た時の彼の評価だった。学業が優秀なわけでも、能力が優れているというわけでもない。寧ろ同じような落ちこぼれが三人揃っていたあの班はまず落ちるだろうと目されていたのだ。何が合格に作用したのか全く分からなかった。

卒業まで一カ月、最後に合格者に対して行われるのは実際にLIGHTSの隊員との模擬戦闘をすることだった。その実力と力を見せどんな任務が合っているか、どんなパートナーとなら効果的にその力を発揮できるか等の適正を見るためのもので、既に相手は決まっていた。

「ランスロット」

相手は事実上のNo.2、セイバーの右腕と言われ、その力と功績は充分彼も知っていた。

セイバーもボルクもいないため、出てくる隊員の中では最強レベルの能力者。

「やってやる」

勝てないまでもそれなりの対策は立っていた。彼の能力は有名だったし、何も知らない状態で戦うよりは遥かにましだった。そしてそこでの戦いで、まず彼らの評価が決まる。

「日程が決まった。明後日の午後一時から、同時に3試合ずつ行い、一番評価が高かったものは主席として卒業式に出席してもらう」

当然ながらクラスの盛り上がりは無く、流れるのは微妙な雰囲気。「あー、そういうことだからな。合格者はきっちり体調を整えてお

くように」

そう言つて教師は教室から出て行く。残り少ない学校生活。落ちた者もこのネームバリューさえあれば、違う世界で就職する事は容易であるため特に生活には困らないが、それでもやはり空気は沈んでいた。

「なーんか、ね」

恭介の部屋で三人は集まっていた。ベッドにもたれかかっている凜の言葉に恭介は考えを止める。

「何か気になるの？」

例のごとくマルクが素早く反応したが、凜は浮かない顔で押し黙る。

「合格者数が異様に少なかったこと？」

「え、いや」

「ああ、キューエル」

凜の反応で恭介は今朝の事を思い出した。

「知ってたの？」

凜の質問に彼は頷きで返す。

「今日少しな」

「おかしいよな、この状況。課題もそうだったけど」

「ああ・・・」

マルクの言葉に、恭介は再び考え込む。

「まあ、考えてもしようがないし、明後日頑張ろう」

「あ、そうだ。恭介相手誰？」

気を取り直すようにマルクが声を挙げ、凜が話題を切り替えた。

「ランスロット」

「はあ!？」

帰ってきた言葉に二人は驚いて彼を見た。

「強敵だろ」

「何か凄いね、恭介」

「偶然だろ? それより凜は相手誰なんだよ?」

「エミル先生、マルクは？」

「俺はノグマさん。ま、妥当かな。恭介よりは大分マシ」
「ふん、何とかするさ」

彼はマルクの言葉に闘志を燃やし、拳を握り締めた。

第二章 第七節 模擬戦 凜の場合

―当日―

「ふう」

「緊張してる？」

「んなわけあるか」

彼らは、会場であるグラウンドに併設されている体育館で運命の時を待っていた。参加者は合格者と同じ十五名。凜と恭介、そしてマルクはいつもどおり三人でその時を静かに待っていた。

「そろそろだな」

時計を見て恭介は呟いた。模擬線は同時に三試合、五回に分けて行われる。凜はその一番目で、マルクは四番目、恭介は最後だった。「行こう」

彼らは歩き出した。向かうは強者が集う闘技場、既に隊員は集まり、そこは独特の雰囲気包まれていた。

「では、前へ」

今回審判役を務めるセイバーの声が合図となり、第一試合目の時間になった事を知らせる。広いグラウンドは三本の白い線で区切られている。そこから出るか、審判が止めない限り、どんな状況でも試合は続行され、その結果によって、配属先が決定される。

「いつも通りいけ」

「頑張れ」

恭介とマルクの言葉に軽く頷きを返しながら、彼女は緊張の面持ちで前へと歩を進める。

それぞれが指定の場所に立った事を確認して、セイバーは右手を上げ、

「開始」

短く告げ、模擬戦闘が始まった。

「フレア！」

凜の氣勢のいい声と共に上空から炎弾が次々と飛来する。

「わあ、当たったら死ぬかな」

エミルはグレネードを自らの手の内に召喚し、片っ端から撃ち落としていく。その命中率はこの戦闘において、百発百中だった。

「厄介だな」

「何でも出せるのかな？ あれ」

恭介とマルクはその実力に嘆息する。エミルの能力は物質をその手の中にいつでもどこでも召喚できる、という厄介なものだった。ただ、大きさは彼女の体より小さいものに限られ、実際に触れた事のある物しか召喚できない。ただ、LIGHTS内には各世界から莫大な数の武器が集まる。オールレンジで対応でき、弾切れの心配も無い。ある意味無敵の能力だった。

「終わり？ じゃあ私のターン」

エミルは持つ武器をサブマシンガンに切り替える。狙いは相手の足に、後遺症が残らないように慎重に狙いを定め、引き金を引いた。
「くっ！」

凜は慌てて横っ飛びでその銃弾を回避、続いて

「スピア！」

大きな槍を出現させ、エミルの方へ飛ばしつつ、

「ウォール」

自身の前に大きな壁を出現させる。

「やるね」

エミルは飛んできた槍をひょいと回避、壁に強引に弾丸を撃ち込んで行く。

「終了」

セイバーが終了を宣言した。ふと隣をみるとしょんぼりして戻ってきた生徒と、それを労わる隊員の姿が。

「早いな」

「まあ、妥当じゃない」

キューエルの班の一人である彼は早々に敗北を喫して、隅っこで

傷の当てを受けている。

「実力無いのか」

恭介はそう判断した。相手はそんなに名の売れた隊員でもない。時間を稼ぐだけなら色々な方法がある中でこれでは実力も容易に想像できた。

なら、と彼は不思議に思う。何故彼はこの課題を合格出来たのか。三人一組で課題に当たらせるのは勿論理由がある。一人では能力の相性によって任務達成率にむらが出る。二人では一人が怪我等で緊急事態に陥った時一人で対処しなければならないし、もしそこで対立してしまえば問題が起こる。三人ならばそれぞれバランスよく対処できる、というのが一応生徒達に説明されている表向きの理由だった。実際は、単純に能力者を相手にする時隊員三人して、やっと捕縛対象の能力者と互角、という苦しい人材難の問題が隠されているのだが。

「一人があんな実力と言う事は、まさか残りの二人がとんでもないのか？」

そんな事実など知らない彼は残りの二人の方に視線を向ける。通常訓練や授業で行う模擬戦、というより戦い方を学ぶ為の組み手、と言った方が正しいが、その中で彼は普段、教師やマルク、ルーカスといった物としか組んでいなかった為、他の物の実力を彼は詳しくは知らなかった。

「まったー」

彼がそう呟いたとき、爆発が起こった。とうとうエミルが壁を破壊したのだ。その手には手榴弾が何個かと、アサルトライフル。

「これで終わりかな？」

彼女が前方に銃口を向けた時、その顔が驚愕に変わる。

「あれ？」

前方に彼女はおらず、力の主を失った壁はその場から消滅する。慌てて周りを見渡すと、後ろに彼女はいた。その手にはドリル。彼女の呪文の特徴は、簡潔な言葉と共に、言葉どおりの現象が起こる

なり現れる事にある。一見、エミルの強化版にも見えるが、力の消耗は激しく、そう長い時間戦えるわけでもない。

「掘ったのかよ……」

「凜もやるなあ」

恭介は頭に手をあて彼女の奔放さに呆れ、マルクはその作戦の柔軟さに感心する。

「クエイク」

地面が揺れ、エミルは態勢を崩す。

「わっ」

「アロー」

次の瞬間、彼女の周りに数本の矢が形成され、彼女の方へと向かう。

「これで！」

彼女が止めをさそうとした瞬間、エミルが異常な早さでそれらを回避、凜の左手に廻り込んだ。

「え？」

「残念だったね」

彼女がエミルの方を見ると、その手にはスタンガンが握られていた。

「どうやっ」

「少しの間、眠ってて」

凜の意識はそこで途絶えた。

「うつ……」

目覚めると視界には青空が広がっていた。意識を失う前の記憶が蘇り、彼女は頭を抑えた。少しくらくらした。

「気付いたか？」

隣で座っていた恭介が声をかけてくる。もしかしてずっと側にいたのだろうか、と思いかけて慌ててその考えを振り払った。

「恭介……私」

「惜しかった、もう少し横になつてろ」

「どうして？」

彼女は短く問いを發する、途中までは上手くいっていたはずなのに、何故か最後は不意の攻撃を受け、あっさりと意識を失う事になってしまった。

「上手く地形を利用された」

「地形を？」

彼は頷き見たままに答える。

「お前がクエイクを行つて、地形が少し変化した。エミル先生から見て、それは左から中央に丁度お前が最後に立っていた道まで傾斜ができたんだ。だから」

「ローラーブレード」

凜は答えに気付き溜息をついた。自分の攻撃が結局仇となった事に情けなさを覚える。

「よく善戦した方だ」

彼の慰めに感謝しながら彼女は今の状況を尋ねた。

「今は3つ目だな。もう終わるだろうが、ルーカスは流石だな、まさか勝つちまうとは」

「ルーカスが？」

凜に恭介は笑顔を向けた。

「ああ、やつと一矢報いた。フラグラスは惜しかったんだが」

「凄いじゃん」

「お陰でマルクががちだ」

恭介はそう言つて視線を前にやる。そこにはルーカスに何か言われさらに固まるマルクの姿が。

「大丈夫かねえ、あいつ」

恭介はさりげに凜を見た。倒れたときは一目散に駆けつけたが、どうやら本当に以上も無い様子でほっとした。そして、

「もうすぐだ」

ランスロットは壁にもたれ、まるで周りと自分を遮断するかのよう

に目を閉じていた。まるで目の前の戦いには微塵の興味も感じていないかのように。

「待っている」

恭介は静かに彼を睨んだ。彼もまた、目の前の戦いには興味を失い、頭の中では何度となく彼との戦いが繰り広げられる。

「どこまで、いけるか」

「大丈夫だよ」

彼の独白に凜が答える。が、返答はない。

「もう」

凜はそう言いながらも彼の真剣な横顔を見つめた。きっと彼なら何か起こせる、そう信じて、彼女は横顔を見つめ続けていた。

第二章 第八節 模擬戦 恭介の場合

「はあ」

「肝心な所であれか」

「全然駄目じゃん」

「それ本人の前では言わないでやってくれ」

それぞれ上からフラグラス、ルーカス、凜、恭介の弁である。つまり、瞬殺だった。

始まるや否やノグマの攻撃をかわした、までは良かった。その後、「頑張れマルク！」

という凜の声援が飛んだ瞬間、彼は端から見て可哀想なほどに動きがガチガチになった。

その瞬間横手から肥大化したノグマの拳が彼の体をグラウンド外へ思い切り吹っ飛ばし、試合は簡単に終了した。

「いてて」

頭を抑えながら返ってきた彼に三人は冷ややかな視線で出迎えた。

「あれで本気？」

「意識しすぎなんだ」

「何やってたの？」

「だから、お前ら・・・」

マルクは彼らにひたすら頭を下げるばかり。見ていて流石に気の毒に思った恭介はマルクに慰めの言葉を送る。

「任せろ、俺はお前の分まで戦ってくる」

「恭介・・・」

「そりゃ、逆効果だろ」

ルーカスが頭を抱え、フラグラスは可笑しそうにそれを見守っていた。すると、

「終了」

エリックの試合が終了した。結果は、エリックの勝利。

「あいつやっぱ強いんだな」

「あいつは相手が強ければ強いほどその真価が出る能力だからな」
恭介の感心する声にルーカスは解説を入れる。

「お前ほどじゃないが、注意しとけ」

「注意？」

恭介の質問に彼はただ前を向くばかり。

「どうし」

言いかけた途端、後ろから背中を押された。

「ほら、出番！」

凜が後ろから彼を前へ押していく。

「分かった、分かったから」

彼はやれやれ、といった感じで前へと歩を自ら進めて行く。

「負けるなよ」

ルーカスが彼の耳元で囁く。

「え？」

「お前、少し鈍感すぎる。俺やマルクの気持ちにもなれ」

「どういうことだ？」

「こっちの望みを今日完全に断ち切ってくれ。ライバルとして、頼む」

「何かは分からんが、言われなくても全力は尽くす」

「それでいい」

そう言って彼は微笑み、去っていった。少し意味ありげな視線を送られたのは、一体何のだろうか、と彼はここで気持ちを切り替え前を見つめる。

有るのは、圧倒的な威圧感。ともすればそれだけで戦意を失いそうになる。

「つまらねえ戦いだけは、するなよ」

「ああ」

彼らは向き合い、試合開始の合図を待つ。そして、セイバーは全体の用意が整った事を確認して、試合開始を告げた。

「ギョールスキレッジ」

手加減は無用、と言わんばかりに彼は闘気を纏い、ランスロットに飛び掛る。

「ふん」

彼は自身の持つ大剣で彼を受け止め、元の場所まで体ごと吹き飛ばした。彼の身丈ほどもある大剣『ガタノトーア』、数千の敵の血を吸ってきた邪剣とも言われ、凶悪な能力を持っていた。

「ヒューリク」

着地と同時に、彼の後ろに瞬間移動し足を払う。が、既に彼は恭介の方に視線を向けていた。

「馬鹿な！」

「分かりやすい」

そのまま頭を蹴り飛ばされ、彼はそのまま地面にバウンドして、背中から落下する。

「ぐっ！」

「どうしたどうした！」

ランスロットが上空から彼の頭目がけて剣を振り降ろす。

「ちい！」

彼は何とか頭を捻り回避するものの、その剣の衝撃で地面が割れ、浮かび上がった彼の体をランスロットは無造作に掴み上空へと放りあげ、剣先を落下してくる彼の背中へと向けた。

「ヒューリク」

恭介はそこから離れ、両者は再び向かい合う。片や必死の形相で息も荒く、力の消耗が激しい。一方大剣を肩に担ぐ男は、余裕の表情で相手を見下ろしていた。

どうする、どうする……。恭介は頭の中で何度もこの先の展開を読もうとするが、自分が一方的にやられる図しか浮かんでこず、彼は密かに溜息をついた。

「ほらほら、かかってこないと練習にもなりやしない」

「分かってる」

退屈そうに欠伸をするランスロットの隙を必死に探すけどどこにも見当たらず、彼の焦りは最高潮に達し、

「ヒューリク」

ついに動いた。高難度のこの技を出せる回数はそう多くは無く、そろそろ限界が近づいていた。

「次は上か？ 芸が無いな」

真上に現れた恭介を見て彼はゆっくりと剣を構えた。そして、

「アルテレイナ」

彼は腰を落とし、剣身と地面を平行にしてから、勢い良く振り回す。

「か、風？」

現れたのは竜巻。だが、ただの竜巻では無かった。

「終わりだ」

「ぐっ！ 体が・・・」

恭介の体は竜巻に完全に飲み込まれ、全く身動きが取れない。それに加え少しずつ体が傷つけられ、意識が飛びそうになる。

「あの男はここから何とかしたが、お前じゃ無理か？」

「何！？」

ふと、エデフィとの戦闘中、ふいに現れた男の姿が目に見えた。いつか勝つと宣言した自分。今、目の前にいるこの男と彼、どちらが強いとか、弱いとか。そんな事はどうでも良かった。彼はもう、無様な勝利も敗北も欲しくは無かった。

「ヒューリク」

突然、周りの景色がクリアになる。遠くで心配そうにしている凛の顔が見え、彼は苦笑する。やれやれ、そんな顔をしなくても。彼はランスロットの目前に、持っていた剣だけを移動させた。

「馬鹿な！？」

慌てて目の前の剣を避けた彼の目の前に、竜巻を掻い潜った恭介の拳が振り下ろされる。

「はああああ！」

渾身の力が込められたパンチは、彼に当たる数ミリ前で受け止められていた。

「惜しいな。だが、上出来だ。楽しかったぜ」

「まだまだあ！」

恭介はそこから更に力を込め、ランスロットを場外に押し出そうとする。が、逆にずるずると押し込まれ、彼はラインギリギリにまで押し込まれた。

「作戦を間違えたな」

「いや、作戦通りさ」

ランスロットが力を込めた瞬間、彼は巴投げの要領で彼を放り投げた。

「は？」

呆けた表情で飛んでいくランスロットに、恭介は親指を立てて、逆さまに降ろす。

「てつめえ！」

そのあまりの挑発にランスロットは激昂するが、もうどうしようもできなかった。

「俺がいつまでも一直線だと思ったら大間違いだ」

その言葉を聞いて、ランスロットは笑みを浮かべた。なるほど、成長しているらしい。そういえば、と彼は以前戦った時の事を思い出した。

「あいつは、あろうことか俺の竜巻に対抗してきたからな」

竜巻で捕らえたのは同じだったが、そこから彼は自身も竜巻を発生させ、竜巻に竜巻をぶつけてきたのだ。結果お互いが吹き飛ばされ、側にあった岩に偶然頭をぶつけた彼は気絶し、ランスロットは勝利を拾っていたのだ。

その事を思い出しながら、彼は潔く背中から地面へと落下した。

「終了」

その瞬間、セイバーが試合の終了を告げた。

「勝った・・・」

恭介は思わず自分の手を見つめた。何かは良く分らないが、充実感と、安堵。そして緊張感から開放された事により、恭介は自然と笑みを浮かべていた。

「やるな、正直感心したぜ」

「いや、俺は、その別に偶然で」

「何言ってるんだ？ 実力だ。誇っていいぜ」

差し出された手を恭介は強く握り返した。太く大きい、戦士の手。いつか、自分もこうなれたら、と彼は思った。

「恭介！」

後ろから凜が飛び込んできた。彼は前につんのめりそうになりながら何とかそれを受け止めた。

「勝ったぜ」

「うん」

そんな二人のやり取りを見守るマルク達を横切り、セイバーがこちらに歩み寄ってくる。

「上出来だ。よって桐林恭介を主席とする」

「あ、そうか」

彼はすっかり忘れていた。元より、そんな事は彼にとってはどうでもよかった。

「やるな」

「ルーカス」

いつのまにか彼は隣に立ち、肩を組んできた。

「流石だ。色々こつちも勉強になった」

「そうか」

「本当に、期待に応えやがって」

「ちょ、痛い痛い」

首を締め付けてくる彼に恭介は悶絶しながらも、彼は一時の喜びに浸っていた。

そして、彼らは卒業式を迎え、それぞれがそれぞれの道に巣立つ

て
行っ
た。

第二章 第九節 それは

「任務ですか？」

ここはLIGHTS本部内にあるラウンジ。恭介はカイルと共にコーヒーを飲んでいた。人影は多く、こんなにも隊員がいたのかと、当初彼は驚いたものだった。

「ああ、そろそろも新人研修も終わるしな」

「それは、まあそうですね」

LIGHTSに入隊して一ヶ月。恭介はカイルの下で実際に任務に出るための基礎的な技術を磨いていた。言語を翻訳するための力、異世界に移動しても時間間隔の狂わない様自動的に元いた世界と異世界の時差を表示してくれる時計の扱い方、主な世界の法律や慣習等、学ぶべき事は多かった。

「最初は簡単な任務だし。俺が同行するから心配する事はない。それに、ルーカスも一緒だ」

「ルーカスも？」

恭介は懐かしい友人の名前に顔を綻ばせる。

「三人一組が原則だからな。まあ、油断するなよ」

「はい、よろしく願います」

頭を下げる恭介にカイルは苦笑いで返す。

「お前にそんな事されると困るな、ランスロットさんを倒した奴が」
「じゃあ」

と、彼はグッと親指を立ててそのまま下に下ろした。

「調子に乗るなよ、ルーキー」

恭介の頭を小突きながら、カイルは立ち上がる。

「あれ、もしかして今から任務ですか？」

「違う、そこは察しろ」

「え？」

そのまま片手を上げて去っていくカイルを見送りつつ、彼は期待

に胸を膨らませる。

「やっと、やっと任務に―」

「何ぶつぶつ言ってるんだ？」

「ルーカス！」

後ろから肩をぽんと叩かれ、振り向くと、そこにはニヒルな笑みを浮かべるルーカスの姿があった。

「どうしてここに？」

恭介は不思議に思っ て彼に問いかける。任務は明日だ。顔合わせの必要があるわけでもなく、打ち合わせは当日行われる。

「聞いてないのか？ 明日から同じ任務だろ？」

「いや、それは聞いたが」

「だったら何でそんな事を聞くんだよ？」

恭介はどうにも彼の様子がおかしい事が気になっていた。どこかぼけつと遠くを見る事が多くなったのだ。現に今も焦点は自分ではなく他の何かに向けられているように感じる。

「ルーカス？」

「あ、ああ何？」

「お前が話を振ってきたんだろうが」

「じゃあ、質問に答えろよ」

「いや、お前最近変だなあって・・・」

言葉尻を濁す恭介にルーカスは大げさに肩を落とした。

「何だよ？」

「いや、羨ましいよ。お前」

「どこがだ？」

「誰にもこういう感情を持たないところ、とかな」

「はあ？」

「ま、明日はよろしく頼む、実は呼び出されてな。今から仕事なんだ」

「何だ、頑張れよ」

「おう」

ルーカスを見送って、彼もコーヒーを飲み干す。この後は特に予定は無いが、少しでも知識はあった方がいい。

「図書館にでも行くか」

そう言っただけ彼は立ち上がり廊下へと出る。LIGHTSの本部は五十二階建ての超巨大ビルであり、あらゆる施設が建物内に設置されている。内部は簡単な構造をしており、大部分は隊員の為の居住空間、他に射撃場や、フロアを丸々使った訓練場、食堂、風呂等が設けられている。

恭介は図書館に入ると真っ先にLIGHTSが把握している能力者のリストを手に取り、席に着く。

「エデフィ、か」

彼はあるページに目を止めじつとその中で微笑んでいる人物を見つめる。相当強力な能力者ではあったが、まさかここまで高名だったとは思ってもいなかった。

「シュトラウスのたった一人の弟子とはな」

彼は小さく呟いた。三皇の一人、黄昏のシュトラウス。知らぬ者はいないと言いきれるほどの有名人物であり、黄昏の異名は彼の能力に由来している。

「そしておかしいのが」

彼はページを最後までめくり終え、本を閉じた。入隊以来、数々の本を読み漁ったが、あの男の名前や姿がどこにも見当たらなかった。あれほどの力を持っているなら、必ず名の知られた能力者だろうという彼の目論見は外れ、彼は意外に思った。

「何故だ？　そういえば転送とか言ってたがどこに？」

彼をこの所悩ませている問題の一つだった。考えても答えが出ないのなら行動するしかないのだが、如何せん今までは身動きが取れなかった。が、晴れて明日からは実戦である。本部に配属されたときは小躍りしたものだ、その期待した事がようやく現実となる。

「こいつもエデフィも、ケルベロスも全部俺が倒してやる」

恭介は本を戻し、数冊法学所等を借りてから図書室を後にし、自

分の部屋へと戻った。

新人にも個室が与えられ、鍵は全てカードキーで管理されている。
「ん？」

あらかじめ設置されているベッドに腰を落ち着かせ、机に目をやると一枚のメモに気がついた。

「誰が？」

部屋の鍵はきちんとロックされていたはずだ。彼は不審に思いながらもそのメモを手に取り、見た。

明日、お前は選択を迫られるになる。

「は？」

書かれていたのはたった一行だけ。おまけに意味がさっぱり分からなかった。

「まあいいや、明日誰かに見てもらおう」

彼はそれをポケットに入れて、それっきりそのメモの存在を忘れた。

第三章 第一節 示される運命

「転送」

彼はそう呟き、リストの内から一人の名前を線の上に線を引いた。

「あと、五人」

彼はリストを確認した後、静かにその世界から離脱した。

「ふう」

ルシファは家へと戻り、椅子に腰を落ち着かせる。家に戻る回数は極端に減っていたが、それでも手入れは行き届いていた。

「次は・・・」

彼はリストを取り出し、次の対象の詳しい情報に目を通す。通称ケルベロス、本名は不明。過去一つだけ世界を滅ぼした前科あり。

「これだけか」

彼はリストを机の上に放り投げ、腕を組んで考え込む。

大体対象の位置はLIGHTSから教えられていたが、この人物はそれすら不明だった。

こういう相手を取る常套手段は多々存在するが、この人物は少々毛並みが違う気がした。

「何の為にこの世界を？」

彼は念のため滅ぼされた世界に訪れていたが、ただわすかばかりの建物が残るばかりで、手がかりになりそうな物は何一つ残っていなかった。つまり、追う手段が見当たらなかった。

「聞こえる？」

力の気配を感じた瞬間、頭の中で声が響いた。

「ああ。何か用か？ サディケル」

「ちよつと来て」

それだけで彼女からの声は途切れ、彼は服を『グリゴリ』の制服に着替える。普段から服装は黒系統が中心のため、普段から制服を

着用していたのだが、万が一対象を捕らえるのに失敗した時、『グリゴリ』に報復が行く事が無いよう、私事の際は私服を着用していた。

急いで扉を開け、一息ついた。

「わざわざ呼び出しとは」

普段からなるべく顔は出している。直接の呼び出しは異例、というより今まで無かった。

「何かあったのか？」

彼は疑問を抱きながら、家を後にした。

「どうした？」

扉を開けた彼にまず声をかけたのはアヌレイクだった。

「ああ、何か呼び出されたから、サディケルは？」

「いや、今はおられん」

「いない？」

彼は周りを見渡す。なるほど確かに彼女の指定席には姿もワインも無かった。

「ルシファ、こっちだ」

「アグラーム」

ルシファはここで仕事の割り振りを担当している彼に気付き、軽く挨拶する。

「いたのか、早く声をかけてくれれば良かったのに」

「話がある」

「何だ？」

ルシファから見れば蛙にしか見えない彼は、ゆっくりと頭を長い下で舐めまわしながら、いつになく真面目な顔つきになった。

「大口の仕事だ」

中にいた面々が動きを止めてアグラームの話に耳を傾ける。大口の仕事は極めて報酬が高い。勿論その分ハードな為、まずその仕事を統括する者を決め、統括者がグループを組みその仕事にあたる。

何故ここで彼らが耳を傾けるかというと、ルシファは統括者になった時、普段の借金の礼としてお世話になっている人から優先してグループに組み込んでいくからであった。当然、彼らの期待は膨らんだが、

「いや、これは一人でやってくれ」

「一人で？」

ルシファは後ろで空気が沈んで行くのを感じながら、意外に思っ
て聞き返す。こんな状況も彼には初体験だった。

「ああ、失敗は許されんぞ。何故なら」

「何故なら？」

にやりと笑ったアグラームに彼は、この仕事の重大性を認識して
真剣な顔つきになる。

「相手は王子様だからな」

「ミッドガルド王国？」

「そう、その王子様の護衛が今回の仕事だ」

「護衛？ 一人で？ 何で？ 信頼できる家臣とかいないのか？」

「そう質問を並べるな。今説明する」

彼はそう言つて、一枚の紙をこちらによこす。

「後取りはこの子だけか。八歳？ まだ子供か。なるほど、内戦中
なのか」

「そう、王位継承問題だな。よくある話だ」

「王位継承？ だつて王の子供は彼だけだろ？」

「甘いなルシファ。よく読め」

「……ああ、王の弟に息子がいるのか」

「そっちの方は十五歳。まあ、兄弟げんかに子供達が巻き込まれた
わけだ」

「それでここに依頼か」

どうやら現王は病気を患い、もう長くは無いらしい。そこで起こ
るのが王位継承問題だが、まだ幼い王子のつなぎとして弟は、自ら

即位する事を申し出た。しかし王にあつさり却下されたため、怒りに狂った弟は息子を強引に擁立し、権力をフルに活用し兵達を買収これに王も対抗したため、現在この国は真二つに割れる形となっていた。

「戦争、か」

彼は自分の世界を思い出して顔を伏せる。

「まあ、お前は王子を守りさえすればいい。ミスるなよ。上客だ」
「ああ、分かつてる」

余計な感情など不要だった。彼は気持ちを切り替え、世界へと旅立つべくドアを開ける。と、サディケルが湖のほとりで立ち尽くしていた。

「話は聞いた。今から行ってくる」

「そう」

どこかそっけない彼女の反応に戸惑いながらも、彼は示されてある世界へと旅立った。

「・・・ごめんなさい」

静かに彼女は一人、もう旅立っていった彼に向かって呟いた。

「ここか」

彼は雪降る地に降り立った。周りは一面銀世界で、まるで自分がこの世界の中で異質な何かに思えてくる。

「実際、異質なんだけどな」

彼は一人ごちて、指定された場所までの地図を頼りに歩き始めた。彼の仕事は王子の護衛。それも対暗殺専用の護衛だった。

「そりゃ、そろそろ人数引き連れていくわけにはいかないよな」
どんな相手かも分からないため、力の展開は控え、彼は長い道のりをひたすら歩き、やがて粗末な一軒の小屋の前に辿り着く。

ドアを叩こうとした瞬間扉が開かれ、彼は思わず前につんのめる。

「わあ、本当に来た！」
「わ！」

いきなり現れた子供を前に彼は思わず後ろへ飛ぶ。

「お兄ちゃん、僕のごえいなんだよね」

「ごえい？ ああ、ん？ 護衛って」

「僕がそれ！」

元気良く宣言する彼をとりあえず小屋の中へ押し込んで、ルシフアは改めて聞いた。

「クラウス皇太子？」

「はい」

「ここは？」

「別荘って、お母さんが言ってた」

「お母さん？ ああ、フィリア皇后」

「お母さんの事知ってるの？」

「・・・そりゃ、この世界じゃ有名も何もあつたもんじゃないと思うが」

彼は無意識にぞんざいな口調になっていた事に気付き、慌てて改める。駄目だ、この空気に飲まれてはいけない。

「それで、王はどちらに？」

聞かれたクラウスは首を傾げる。

「知らない」

「ご存じないのですか？」

「ごぞんじ？」

「え？ ああ、知らないの？」

「うん」

「ふむ・・・」

「ふむ・・・」

考え込む彼を前にクラウスもそのポーズを真似する。ここは王の領地の奥深く。王が住む王宮は地図どおりなら、そう遠くは無いはずだった。

「行ってみるか」

そう呟いた彼にクラウスは手を上げて叫んだ。

「僕も行く！」

「え？ ですが・・・」

「連れてって！」

「他に人は？」

「いないよ」

「いつから？」

「うーん、さつき」

彼は室内を見渡す。あるのは暖炉に机に長椅子。とても大人数が住める空間ではなかったし、暗殺される可能性のある人物を一人にするなど無防備にも程があつたが、事実この家には彼一人。

「分かりました。離れないでください」

「わーい。お出かけ！」

「おいおい、王室はどんな教育してるんだよ・・・」

少なくとも、彼の知っている王室はもっと厳格なものであるはずだった。

「雪降ってるから」

「必要ありませんよ」

彼は静かに力を展開し、外と内を遮断。室内の温度そのままに彼らは静かに王宮へと移動して行く。

「凄い！もしかして超能力者？」

「まあ、似たような物です」

彼はそう返しながら周囲に注意を向け続ける。やがて地図どおりの位置に、大きな建造物が現れ、目の前に立った時には、それは凄まじい威容を誇っていた。

「城だな」

ルシファは自分の知識にある物から一番形状が近い物を思い浮かべて呟いた。

「そう！ 僕の家だよ」

彼はそう言つて簡単に門を開け、中に入っていく。自分の領域から出してしまふと風邪を引きかねないため、彼は慌てて後を追つた。

第三章 第二節 彼の思い

「お父さん！」

クラウスの後を追いつけていくと、大きなベッドが設置された部屋に行きついた。城内の廊下が長く、ルシファはクラウスの体力に感心し切りだった。

「ああ、クラウス。いい子にしてたかい？」

「うん、ほら。あそこのお兄ちゃんに連れてきてもらった！」

彼はこちらを指差す。顔をあげた王は、その優しい瞳をこちらにゆつくりと向け、静かに微笑んだ。

「クラウス、お母さんの所へいつておいで」

「うん、分かった」

慌てたように駆け出していくクラウスを見送った彼は、ルシファに対して口を開いた。

「始めまして、ミッドガルド王、シルフィ・ファーズンクラウツという」

「始めまして、ルシファ・L・イエルズと申します」

「すまないな、やんちゃな子だったろう？」

どこまでも澄んだ瞳、金の髪は長く、床にまで達するほど。彼は労わりの言葉を彼にかける。

「いえ、それであのー」

ルシファの言葉の先を呼んだかのように、彼は告げた。

「守ってやって欲しい」

「弟さんから？」

「それもある」

「それも？」

ルシファは首を傾げた。他に何か理由があっただろうか、という彼の疑問は次の言葉で吹っ飛んだ。

「ケルベロス、という男が息子を狙っておるらしい」

「ケルベロス!？」

「知っているのか？」

「いえ、そこでそれを？」

「名前は言えぬが、さる知人から聞いた。とても凶悪な男だと。そして、君の名前を覚えてくれた」

「私の？」

「何でもとても頼りになるそうじゃないか。試しにクラウドを一人にして、王宮まで無事連れてこられるかテストしてみたんだが、軽々とクリアした。充分信頼できる。頼んだ、守ってやってくれ」

頭を下げる彼を慌てて制して、彼は王に向かい膝をついた。

「全力で、お守りいたします」

「ありがとう。そうだ、城内を見て回るといい。君を戦場に出す気は無いから、ここが君の仕事場という事になる」

「王子は普段からこちらに？」

「この国の冬は寒さが厳しい。春には綺麗な花が咲くのだが、後4ヶ月はかかる。それまでは城内で暮らしている。遊び相手にでもなっ

ってやってくれ」

王との謁見を終えて部屋の外に出ると、一人の女性が待っていた。彼が知るメイド服に極めて近い形状の服を着た、綺麗な女性だった。髪も肌も真っ白で、青い瞳が印象的だった。

「こちらへ。ルシファ様」

「え？」

いきなり様付けで呼ばれ、驚く彼に彼女は頭を下げた。

「ここでの滞在中、ルシファ様のお世話をさせて頂くことになりました。以後、お見知りおきを」

「えっと、名前は？」

彼の質問に彼女は首を横に振った。

「あるにはありますが、わざわざ名乗るほどのものでもございません」

「いや、でも呼ぶときに困りそうだし・・・」

彼の言葉に彼女は小さく名前を彼に囁いた。」

「クリスマス・キャロルと申します」

「クリスマス・キャロル？」

「はい、ここに買われました日が丁度、クリスマスだったから、と」

「じゃあ、クリスマスでいいかな？」

「はい？」

彼女がきょとした顔をする、少しだけ素の顔を見られた事が嬉しくなり、彼は彼女の呼び名を勢いで決めた。

「クリスマス。実は俺がいた世界にもクリスマスはあるんだけど、この世界ではどんな意味なの？」

「悪魔がやってきて、子供を攫っていく日だと」

「悪魔？」

「はい、私はそう聞いております」

「あまり、いい日でもなさそうだね」

「忌むべき日だと」

彼女の顔が少し暗くなる。そんな彼女を元気付けようと、彼は自分の世界について話した。

「俺の世界では、クリスマスは恋人の日なんだ」

「恋・・・人ですか？」

「ああ、その日はカップルが一日中外で遊びつくしてお祭り騒ぎをする日なんだ。勿論、夫婦とか友達同士とかも」

だから、と彼は続けて、

「俺はその名前、嫌いじゃないよ。省略したのは、ただの趣味」

「・・・ありがとうございます」

彼女はほんの少しだけ笑みを作り、廊下の方へと手を差し出した。
「ご案内します。こちらへ」

「ここが皆様がお食事を召し上がられる場所です。お時間になりましたら私が呼びにまいりますのでご心配なく」

「王族と一緒に食べても？」

「王は、その様に、とのことですよ」

「緊張するなあ」

テールマナーを後で学んでおく必要があるそうだった。彼はまた一つ『知らなければならぬこと』と銘打った頭の中のメモに項目を一つ追加する。

「こちらがルシファ様のお部屋になります。何か足りないものがございましたら、遠慮なく申しつけ下さい」

彼が通されたのは人目で高級と分かりそうな家具ばかりが並んだ部屋だった。ソファや、ベッドに、キッチンや風呂まで備えられており、ここだけで生活できそうだった。

「ありがとう、クリス。また何か分からなかったらよろしく頼む」

「え？ああ、申し訳ございません。はい、いつでもおっしゃって下さい」

慣れない名前に戸惑ったのかも知れない。と彼は思い、一つ提案する。

「何なら、クリスマスでもいいよ。困らせたくはないし」

「いえ、もしルシファ様がよろしければ、クリスとお呼び下さい」

「そう？　じゃあ、そうするよ」

彼女はその言葉を聞いた静かに頭を下げ、部屋から出ていった。

それを笑顔で見送った彼は厳しい表情になる。

「この世界に、ケルベロスがいるのか？」

彼は意外に思った。全く違う事項として頭の中に置いておいたものが見事に繋がったのだ。

「もしかしたら二つ同時に片付くかもしれない」

並みの能力者には負けない自信が彼にはあった。ケルベロスがどんな能力を使うかは知らないが、王子を狙っているのは彼だ。

「そいつさえ倒せば、あの子も死なずにすむ」

負けられない、と彼は思った。命は簡単に奪っていいものではない。例え、どんな理由があっても。それが、彼の持論だった。だから、彼は今まで誰も殺した事は無かった。LIGHTSに転送はす

るが、彼らは表向きは処刑されたと公表されながら、その実重罪を犯した犯罪者専用の世界に送り込まれていた。

「偽善だけだな」

殺されたものは戻ってこない。殺したものを殺したい気持ちは彼には痛いほど良く分かった。それでも、

「元に戻れないのなら、きつとそれは無意味だ」

罪を償わせる事しかできない。消えない憎しみを内に秘めたまま、彼は今日も戦う。

「守る。絶対に」

こうして、彼のこの国での最初の日、静かに更けていった。

第三章 第三節 既視感

「あのねーこっちー」

「え？ とと」

翌朝、ルシファはクラウスに引つ張りまわされていた。呼びに来てくれたクリスについて朝食のため部屋に通された瞬間、クラウスが彼の腕を取り走り始めたのだ。

「ルシファはここ！」

王が一番奥の席に座り、その前でニコニコしているのが恐らくフィリア皇后。クラウスはその皇后の隣に座ったため、彼の席は王の隣となった。

「おはようございます。陛下」

「ああ、おはよう。すまないね、朝から」

「いえ、光栄です。まさか御一緒にさせて頂けるとは」

彼は王の気遣いに応え席についた。

「今日の王子のご予定は？」

「一日中城内だよ。別に王子だからといって特別な事をしているわけではない。勿論、勉強やそれなりの教養は積ませているが」

「はあ」

ルシファは出されたシリアルのようなものを口にしながら相槌を打った。シリアルなのだが、妙に色が黒くて苦い。

「お口に合いますかしら？」

「はい。ありがとうございます」

それに固い上に何かどろどろしたものの中から出てきた気がして、彼は置いてあった飲み物を飲み干した。

「ぐっ！」

「お兄ちゃん大丈夫？ 駄目だよ慌てて飲んだら」

「あ、うん、いえすみません」

恐ろしい味がした。辛いのか甘いのか、熱いのか冷たいのかそれ

さえも判断ができず、彼は数瞬間の間、凍りつく事になった。

「こちらにはどれ位滞在なさるの？」

「春までは、ねえ」

「あ、はい」

王に先に答えられたため、彼は今考えた嘘を飲み込み王の言葉に合わせた。

「それなら、きっと綺麗なお花が見えますね」

「ええ、楽しみにしています」

柔らかな声と長く揺れる髪。そういえば見る人皆髪が長かった。

そういう習慣のある国なのだろうと彼が思っていると、ただ一人短髪の王子は素早く朝食を平らげ、席を立つ。

「お兄ちゃん、行こう？」

クラウスが出口に立ってこちらを手招きする。彼はすぐに行きま
す、と答えてから王に溜めていた疑問をぶつけた。

「あの、何故王子は私を兄と？」

「あの子は幼いころ兄を失っていてね。これからお前に護衛をつけ
ると言ったら、ずっとあの調子だ。まあ、狙われていると知った途
端泣かれるよりは随分ましだろう」

なるほど、と彼はクラウスの方を見て切なくなった。兄と呼んで
くれた存在は今もういない。そして、彼が兄と呼べる存在も既に
無い。同じ寂しさを持っているのかもしれない

「行きましよう、王子」

彼は幼い王子の手を取り、歩き出した。

「ここが僕の部屋！」

「広・・・」

そこは家が一軒入ろうかという、巨大な部屋だった。中には玩具
が散乱しており、荒れ放題となっていた。

「ここがベッドで、こっちがたんす」

「凄い」

流石に広大な領土を治めているだけの事はある。王は今執務中

で、皇后はそのお手伝い、この国の制度は王政であるため、彼の両親は朝と夜しか共にいられない。お手伝いは多数いるみたいだが、何故かクラウスに積極的に関わろうとする者はいなかった。

「ま、こういうのも悪くは無い」

ルシファはそう言っ、クラウスが取り出してきたボードゲームに付き合う事にした。

「勝てない・・・」

「これで僕の勝ち！」

ルシファはこれで何度ともしれぬ敗北に肩を落とす。まさか自分がこんな子供に負けるわけは無い、と高をくくって始めた彼であったが、実際、彼の前に立ちはだかったのは分化の違いだった。

「結構俺の世界と近いと思ったんだけどな・・・」

力により文字は読める、意味も理解できる、会話も問題ない。唯一つ問題だったのは、リズム感。

「十八分の五十四拍子って何だよ・・・」

少なくとも彼の世界では有りえないリズムに彼は困惑していた。まず体がついてこない。何度説明されてもそれは異質なものだ、と体が勝手に判断してそのリズムに乗る事を拒否していた。

「ふーんふーん」

何故ボードゲームなのにリズム感が要求されるのか、最初は疑問に思った彼も開始五分でその重要性を思い知らされていた。

「じゃあ、次は僕から！」

「どうぞ・・・」

マルクスはさいころを振り、自分の駒を動かす。ここまではルシファも違和感無く楽しめたが、問題は次だった。

「えーと、この国の国歌かあ」

そう、このボードゲームはマスに止まる度、何がしかの行為をする事をプレイヤーに要求する。そして、その大部分が歌だった。

「はい、次お兄ちゃん」

「分かってるよ」

ルシファはさいころを受け取り、勢い良く振った。

「きーれいなーほしーぼーしをー」

「はい駄目。スタート地点まで逆戻り」

「・・・」

彼がそろそろうんざりし始めてきたころ、救いの鐘が鳴った。

「あ、お昼ご飯だー」

「助かった・・・」

駆け出していくクラウスの後を歩いていくと、クリスの姿を見つ
け、彼は顔を綻ばせる。

「呼びにきてくれたのかな？」

「はい、今の鐘が昼食の合図となっておりまして」

「ありがとう、大体王子と一緒にだから大丈夫だよ」

遠くでクラウスがこちらを手招きしている。彼は分かりました、と
いう風に頷いて、彼の方へと歩き出す。

「あの」

「ん？」

「いえ、何も」

彼女はそう言って去っていった。彼は前回の事を思い出して思わ
ず足を押さえたが、

「まさか」

そう笑い飛ばして歩き出した。昼食が平和なものになるよう祈り
つつ。

「美味しい？」

「はい、それはもう」

彼はそう言ってスープを美味しそうに啜る。王と皇后、そしてお
付きの物は全員が執務部屋で臣下と共に会食を行っている為、ここ
には彼とクラウス二人、そして側にクリスが控えていた。

「ここに座るかい？」

ルシファはクリスに隣の席を示す。

「はい？」

「よろしいですか？」

ルシファはクラウスに許可を求め、彼が元氣良く頷いたのを確認してから椅子を引いた。

「立ちっぱなしっていうのも何だし」

「いえ、ですが」

「いいよ！ その方が僕も嬉しい」

「だってさ。王子の命令だ」

「かしこまりました」

彼女はそう言つて静かに席に着いた。これで上等な服でも着ればこちらの貴族の娘よりはよっぽど気品も出るはずだが、そんな事よりモルシファは別の事が気になっていた。

「ねえ、会った事あったっけ？」

首を振る彼女に彼は何か引つかかりを感じていた。何と言つか、

既視感のような物を昨日からずっと感じていたのだ。

「もしかして、好きなの？」

からかう様にクラウスが言うのをルシファはあっさりと否定し反撃に出た。

「違いますよ。そういう王子はいらっしゃらないんですか？」

「決まってるんだって」

クラウスは事も無げにそういつてパンに噛り付いた。

「ああ、・・・失礼しました」

王子ともなれば他国の姫なり有力者の娘なりとの政略結婚が当たり前の世界だ。しかも今は内戦状態で他国がいつ責めてくるのかも分からない状況。その中で病にかかりながらも今もなお執務を取り続ける王に彼は敬意を抱く。

「いいよ、当たり前なんだって」

微妙な空気の中、クラウスは残っていた昼食を片付け、急いで立ち上がる。

「これから先生とお勉強なんだ。お兄ちゃんは多分兵器庫かな？」

「兵器庫？」

「うん、護衛ならこの国の武器くらい使えないと駄目だよ」

「それはまあ・・・そうですね」

正直なところ武器などあっても邪魔にしかならなかったが、そう言われては断る事もできない。それに、相手がそれを使ってくる可能性もある。知っておくに越した事は無い。と彼は判断して、隣にいる女性に頼んだ。

「案内してくれるかな？」

「こちらです」

彼は彼女の後に続いて歩く。もやもやした気持ちを胸の中に抱えながら。

第三章 第四節 一つの真実

「流石に揃えてるなあ」

彼は兵器庫に通され、驚嘆の声を挙げた。幾千物武器が所狭しと並べられていた。剣、斧、大剣、槍、盾に鎧。何でも揃っていた。「ここにある武器だけで戦争できそうだ」

内戦中という事もあるのだろう、武器はきちんと手入れされ、整然と並べられていた。

「相手とこつちとの戦力差はどれくらいなんだ？」

ルシファはさつきから入り口に立ちつくしているクリスの方を見る。

「王の兵は約2千、相手は恐らく千五百程度かと聞いております」

「やや優勢か・・・」

いざとなれば自分が戦う事も辞さない覚悟だったが、それならばしやしやり出て相手を蹴散らす必要は無さそうだった。

「あまり世界の摂理は壊したくないし」

「はい？」

「いや、こつちの話し」

彼はそのまま兵器庫から出て書庫へと向かう。王子の授業は日が沈むまでと聞いている為、それまでにこの世界の情報を掴んでおかなくてはならなかった。

「クリスは、ここに来てどの位？」

道すがら、彼は例によって前を歩く彼女に声をかける。

「八年になります」

「へえ、長いんだ。子供のころから？」

「いえ・・・」

「あ、ごめん。立ちいった事を聞いた」

そんな事を言っているうちに書庫に辿り着く。

「ここでもいいよ。適当に読んで終わったら自分で部屋に戻るから」

「かしこまりました」

去っていく彼女を見送ってから、彼は自分に気合を入れ、

「さあて読むぞ」

本の山に戦いを挑んだ。

「なるほど」

数時間後、彼はこの世界の大概の情報を仕入れていた。どうやらこの国の歴史はまだ新しく、先々先代の王が建国を宣言したのは約百年前。武力と政治力を駆使してのし上った印象を強く感じるが、何故短期間にここまで勢力を拡大できたのかは謎だった。

主な産業は工業で、資源が豊富らしい。とはいってもルシファの世界より文明水準は遅れている為、彼から見れば大した事はない。人口もこの世界では多い方だが、全体的に人口密度が高い世界でも無いらしい。戦争は小規模な物が日常茶飯事に起こっているが、この内戦はその中でも大規模戦の部類に入る。

政治制度は確認していた通り王政だが、皇后、そして貴族院も一定の発言力を持っているようで、絶対王政というわけでも無いらしい。

「こんなもんかな。後は何故弟さんがこんな強硬手段に出たのかだけが気になるところだが」

「知りたいか？」

「ああ、もちー」

ルシファが慌てて振り向くと、そこにはすらりとした顔に、自信に満ち溢れた表情をしている剣士が一人。

「どなたでしょうか？」

「俺の名前はクゼル。この国の戦闘隊長をやってる」

「戦闘隊長？」

「ああ、例の護衛さんか？ わざわざ国の歴史を調べなおすなんて、あんた相当な世間知らずか？」

「ああ、まあ」

適当に言葉を濁しつつ、ルシファはクゼルと名乗った男を観察する。能力は持っているようには見えない。自分の事はただの傭兵としか伝えられていないはずで、何故自分にそんなエリートが話しかけてきたのかが問題だった。

「あの女」

「は？」

思わぬ話題に彼は一瞬返答が遅れた。

「何だ、あの扉の影で静かに待ってる奴の事だよ」

「影で？」

誰だろう、と覗いてみるとクリスがそこに立っていた。

「・・・どうした？」

急に後ろから話しかけられた彼女は身をびくつと振るわせた後、弁解するかのような口調で、

「すみません、ですが」

「何々？ 内緒話か？」

ルシファの後ろからクゼル現れ、そのままクリスの頬に手を当て、そつと口付けをする。

「いつ見ても綺麗だ。この戦争が終わったら褒美として貰い受けようかねえ」

そいつって彼は軽くルシファに手を振ってどこかへと歩いていった。

「奴隷制はどの国にもあるなあ」

彼はやれやれと嘆息を漏らした。クゼルのキスにも何ら反応する事も無かった彼女は暫く黙った後、意を決したかのように彼に口を開いた。

「あの」

「どうした？」

「お話があります」

「話し？」

「はい」

ルシファの問いに彼女は真剣な声で彼の名前を呼んだ。
「ルシファ・L・イエルス。貴方にしか話せない事です」

「どういう事か、聞かせてもらおうか」

ルシファは自室へと戻り、ソファに腰掛けている女性に話を促した。口調は先ほどとは一変しており、凜とした声が室内に響く。

「私は、この世界の住人ではありません」

「それで？」

大して珍しい話でもなかった。自分が気付けなかったのもまだまだ未熟だからで、そのわずかな悔しさはあれども、彼の顔にそれが現れる事は無い。

「ケルベロスの事は知っていますか？」

「ああ、とはいっても詳しいわけじゃない」

いきなり出てきたケルベロスという名前にもルシファは驚かなかった。異世界からわざわざこの世界に來たのは彼の味方だからか、敵だからか。そこははっきりさせておく必要があった。

「結論から言いますと、ケルベロスとは実在しません」

「実在しない？ しかし――」

「概念はありますが、人が創り出した神と同じように、その存在は概念だけです」

「誰がそんな概念を作った？」

ルシファの問いに彼女は真っ直ぐ彼を見つめて言い放った。

「私です」

「君が？」

意外な回答に彼は新たな疑問で頭が溢れかえる。

「はい、それが私の役目ですから」

「詳しく聞こう」

「私が創り出されたのは、十五年前。『ハムルス』傘下の企業で極秘裏に製造されました」

「ライトと一緒に」

ルシファの眩きに彼女は一瞬驚きの表情を作った。

「知っていましたか？」

「ああ、それで？」

「私はこの世界に送り込まれ、何も分からぬまま、言われた通りこの家に仕えています」

「俺にそれを話しているのも指令か？」

「はい、LIGHTS隊長から、直々に。こんな事は初めてなのですが」

LIGHTS隊長、セイバーがわざわざ自分に伝えてきたという事は、それは『ハムルス』と何らかの繋がりがある事を示していた。「それで君はどんな能力を持っているんだ？」

ルシファは早速本題に入る、彼女はともかく彼女の話し自体は信用できるとの判断が既に彼にはあった。

「私に与えられた能力は、人々にそういった概念を信じ込ませる事」「信じ込ませる？」

「はい、目的は真犯人の隠蔽です。仮に私が何かの犯罪を犯し、それを誰かに見られても、犯人はあいつだと私が言えば、相手は私の言葉を信じます」

半信半疑で聞いていた彼だったが、彼女の言葉を聞いた瞬間、脳に強烈な負荷がかかった。まるで、何かで頭の中をこねくり回されているかのような感覚に、彼は一瞬意識を失う。

「・・・なるほど。強烈な能力だな」

「信じてもらえましたよね」

「たった今身をもって知ったよ。常時発動するのか？」

「いえ、私が望んだときにだけ」

「だったら、誰が王子を狙ってるんだ？ ケルベロスじゃないんだろ？」

「はい、恐らく私は近いうちに彼を殺すよう指令が下りるはずです。この国の資源は彼らにとって非常に有益ですから」

「だから弟を操ったのか、君が」

ルシファの推測に彼女はこくりと頷いた。

「ですから私を殺すようにと、セイバー様が」

「そう、なるよな」

「私は自分では死ねませんから」

「いいのか？ それで」

ルシファの問いにも彼女は冷静な表情のまま、ただ頷いた。

「嘘だな」

「何故？ 嘘では――」

言いかけた彼女の言葉を制し、ルシファはクリスに告げた。

「なら何故俺に殺させないんだ？ 言えばいい、死んでも構わないなら。貴方は私を殺すべきだ、と」

「なっ」

動揺する彼女に彼は冷徹な声で決断を迫る。

「死にたいんだろ？ 言えよ。殺してやる」

「わ・・た・・しは・・」

「死にたくないよな」

ルシファはそつと彼女を抱き締めた。言われるがままここにたった一人いた彼女。やっと見つけた『ハムレス』への鍵が、ここにある。

「大丈夫、君は死なない」

もう、ライトのような例を見るのは御免だった。ルシファは体を離し、クリスの目を近くで見つめて、微笑み、彼女もそれにつられて、笑顔になった。

「『ハムレス』の指令は絶対なのか？」

まだ微笑んだままの彼女はそれでも冷静に事実を述べていく。

「はい、定期的に連絡が来て、王子の様子や、国の内政について詳しく尋ねられますから」

「分かった」

自信ありげな笑みを見せるルシファにクリスは顔を傾けて疑問の意を表す。そんな彼女にルシファは一つの頼みを告げた。

「セイバーをこの世界に呼んでくれ」

第三章 第五節 二人の距離

「わざわざすまないな」

「問題ない」

その直後、セイバーはミッドガルドにやって来ていた。元々様子を見に来るつもりだったらしくいつもの鎧ではなく、地味な茶色の防寒具を着用していた。

「彼女の事なんだが」

「・・・何だ？」

ルシファの自室内で彼は今後の対策を協議していた。勿論議題は、この世界をいかに救うか。

「殺さないでやって欲しい」

「甘いな」

「まあな、自覚してるよ」

顔を顰めた彼女に彼は肩を竦める。

「それでも、救えるなら救いたい」

「だがどうする？ 私達は知っただけだ。何も今から直接やつらに喧嘩を売っても仕方が無いだろう」

「ああ、だから」

当然の疑問を提示する彼女に彼は対案を示した。

「あの新人君をここに派遣しては貰えないだろうか」

意外な人物の登場にセイバーは驚きを隠さず聞き返す。

「あいつを？」

「ランスロットにも勝ったんだろ？ 伸びしろはあるよ」

「何をさせるんだ？」

「勿論、弟さん達を――」

「殺させるのか？」

セイバーの発言に彼は苦笑を返す。

「おいおい、そんな事部下にさせるなよ。違うさ、彼の部下になっ

てもらったよ。名目は悪逆なる王を滅するために、とか」

「そんな事をすればあいつらの思惑通りだぞ」

「今はそれでいい。流通ルートを押さえたいんだ。だからできるだけ穏便に王位継承は行いたい」

「お前の仕事は王子の護衛だろう？」

「ああ、命は守る。というより、その方が安心だろ？ 狙われる理由が無くなるんだから」

「少なくとも命が最優先な事に偽りは無い。この内戦は始めから仕組まれていた物なら、こちらはそれを最大限利用するしかない。」

「それはそうだが・・・」

「王には俺から全て話そう。弟さんはもう一度クリスにどうにかしてもらおう。少なくとも、戦争なんて手段には訴えないよう」

それで駄目ならクリスに頼む事も彼は辞さない構えだった。

「上手くいくのか？」

「上手くいかせるんだよ。明日は、自分で作るしかないんだから」

「お前の口癖だな、明日は自分で作る」

「まあ、その後全てが終わった後はこの国から能力者はいなくなる。王はその時彼らが決めればいい」

「分かった。派遣しよう」

「ありがとう、いつもすまない」

そう言って会話を切り上げた彼だったが、セイバーは何故かその場から動こうとしない。

「どうした？ 忙しいんだろ？」

ルシファが不思議に思っただけで、セイバーはそっぽを向いたままこちらに返答をよこした。

「今日は、まだ時間がある」

意外な返答にルシファは少し意外に思ったが、それなら、と彼はセイバーに誘いをかけた。

「・・・外、歩くか？ 今は晴れてる。寒いけどな」

小さく頷いた彼女に彼はドアを開け、そのまま城外へと出る。雪は

止んでいたが、それでも吹く風は冷たく、吐く息は白い。

「雪、好きか？」

二人黙って城の周りを回っていると、セイバーはふと立ち止まり、降ってきた雪を見上げて彼に話し始める。

「え？ ああ、俺の世界には降らなかったから。珍しいといえば珍しいな」

「私は嫌いだ」

見上げたままの顔に雪が降りかかる。冷たいはずだが、そんな事を感じていないかのように彼女は語り続ける。

「どうして？」

「あまりに脆い」

「脆くったっていいだろ？ だから綺麗なんだし」

「溶けて、それっきりだ」

「それじゃ駄目なのか？」

「暖かいところに行くと、消えてしまうんだ。雪が雪で無くなる」
寂しげに彼女は語る。つまりそれは、と彼は思う。その雪は、お前の事なんじゃないのか、と。だから言った。

「それでいいだろ」

「え？」

「変わっていいだろ。お前も。俺が暖かいかどうかはともかくな」

「ふ、言うようになったじゃないか」

「もまれてるんだよ」

「私も、変わっているのだろう。人前で笑顔など、見せた事も無かったのにな」

やはり、とセイバーは思う。この男は自覚が足りなさ過ぎる。恋などというものに嫌悪感しか持っていなかった自分が、引き込まれそうになるのだから。それでもそんな感情をとくに捨てた今となつては、寂しさしか湧き上がっては来なかったが。自分はセイバーだ。恋など許されない。けれど、と彼女は思いなおす。自分が、セイバーじゃなくなったら、もし全てが終わって、自分の名前が無くなっ

た時、この男はそれでも私を呼んでくれるだろうか、と。

そんな彼女の気持ちを知ってかしらずか、彼から返ってきたのは意地の悪い言葉。

「それが笑顔か？ 不機嫌なようにしか見えん」

「馬鹿いえ、これでも」

ついむきになって振り向くと、いつもの笑顔がそこにはあった。

「いい顔だよ」

ルシファの声に、少しだけ顔を赤らめたセイバーはルシファから慌てて表情を隠した。

「女を口説く事だけは、上手くなった物だな」

突然本当に不機嫌になった事に彼は面食らった。

「なんだよそれは」

「自分の胸に聞いてみる」

「はあ？」

こう返されては後はもう、子供の喧嘩だった。

「馬鹿め」

「阿呆」

「馬鹿」

「あーほ」

二人の戦士は、その後ずっと、互いをのしり合っていた。

第三章 第六節 蘇る悪夢

「恭介、緊張して無いだろうな」

「誰に言っ てんだ？」

「冗談だ」

翌日、ルーカスと恭介は並んで待ち合わせの場所まで歩いていった。初任務とあって、彼らが着るのはLIGHTSの正式な制服。青で統一されたその服は自由を表現しているのだという。

「ミッドガルド王国だっけ？ どんな国なんだろうな」

ルーカスがまだ見た事も無い国に対して思いを馳せる。

「雪国だ。俺達雪には慣れてない。滑ってこけるなよ」

「ご忠告どうも」

ロマンをぶち壊しにされたルーカスは恭介にうんざりした口調でその性格を咎める。

「お前、もう少しなんか無いのか？ 可愛い子がいたらどうしよう？ とか」

「・・・気持ち悪すぎる」

いきなり乙女のポーズを取りながら目を輝かすルーカスに恭介は半歩引いていた。

「来たな」

本部入り口には既にカイルの姿があった。恭介達の姿を見た彼は隣にいた女性に何事か告げた後、こちらに向かってくる。

「遅刻はしなかったな。偉いぞ」

「当然です、始めからそんなことする馬鹿いませんよ」

恭介の返答にカイルは挑発気味に彼の頭を小突く。

「その余裕がいつまで持つか？ 俺達の任務は」

「戦争終結のため正義に味方するんです」

「おお、ルーカス。良く分かってるじゃないか」

素早く返事を返したルーカスにカイルは一応賞賛の言葉を贈った

後、真面目な顔をして目の前の新人二人に告げた。

「それが自分の正義じゃなくても、任務は遂行する」

「自分の正義じゃなくても、ですか？」

「行けば分かるさ、恭介」

そうして彼らは世界移動を開始する。行き先は、ミッドガル王国。

「何だよ・・・これ？」

「おかしい、馬鹿な！」

「あ・・・あ・・・」

ルーカスの驚きにカイルも混乱していた。そして、恭介は昔の記憶そのままの光景に我を忘れていた。

「セイバー様がこの世界を訪れたのは三日前だぞ！ 何があったんだよその短期間で！」

珍しくカイルが慌てふためいていたが、そんな事は残りの二人の目には映らなかった。

ある物は腕を探しさ迷い、ある物は脚が無いと叫び、ある物は頭の無い子供を抱きながら泣き続け、子供は既に息の無い親の胸から母乳を飲もうとむしゃぶりつき、ある者はわずかな食料を奪うため、友人を殺した。

見た事のある光景だった。まさに自分が経験したそのままの光景が目の前には展開されていたから。

あの日、そうあの日まで恭介は普通の子供だった。母親が作った朝食を食べ、家を出て学校へ。そのまま友達とどうでもいい話で盛り上がり、そのまま家へ戻り寝て、朝起きたら、世界が無かった。自分の家すらぼろぼろで、何故自分が生きているかなんて考える事もできなくてそのまま彼は外を泣きながら歩き続けた。反応する物は何も無く、記憶にあったのは切り刻まれた人肉と、建物の残骸。そして――。

「恭介！」

気付くと恭介はルーカスに肩を掴まれ揺さぶられていた。

「ルーカス……」

「どうした？ 大丈夫か？」

「いや、大丈夫だ」

彼は改めて周りを見渡す。良く考えればこの世界は内戦中だ。この位の損害を予期していなかった自分が愚かなのだらう。そう思いなおして彼は歩き始めた。この先には王弟の陣地があるはずでそこで身分を明かし、今後の作戦を協議する予定だった。

「無いぞ……」

「もう、どうなってんだよ」

ルーカスがまず最初に陣地だった物を見て固まり、カイルは頭を抱えた。恭介は黙って陣地の中心まで来てから、カイルに先ほどから思っていた疑問をぶつけた。

「セイバー様が来たのは三日前？」

「あ、ああ。ただこの世界では一週間は経ってるはずだ」

「何故この世界に？」

「知らされていないが、内戦が思ったよりひどくなったから、その視察だらう。何か気になるのか？」

「おかしい……」

そこまで聞いて恭介は顎に手を当てて考え込んだ。どう考えてもこの状況はおかしかった。何故なら悪逆皇帝と言われている人物が、王弟の陣の周囲に住んでいる、明らかに王を支持していない人物達を生かしておくわけが無い。

「え？」

「戻りましょう。話を聞きたい、この世界の住人に。王はどこにいるんです？」

焦る恭介に、ようやく落ち着き始めたカイルは彼の言葉の無謀さを説くが、そんな事は彼には関係なかった。

「王宮だが、ここからは結構遠いぞ」

「問題ありません。ヒューリク」

ここから限界まで連続で使えばギリギリ届くはずだった。彼は迷い無くそこから消える。

「つて、おい！」

ルーカスが友人を心配して止めようと走った瞬間には、もうそこには何も無かった。

第三章 第七節 彼の行方

こつ、こつと足音が響く。そんな彼の足音に誰も気がつかないほど、王宮の中はてんやわんやの大混乱だった。

「どうなってるんだ？」

恭介は誰も自分に気付かない状況を不審に思いながら足を進めていく。

「王、こちらを」

向こうの部屋から聞こえてきた言葉に思わず彼は足を止めた。彼はそちらの方へ向き直り、駆け出す。やはり王は健在だった。ならばこの混乱、そしてあの状況は何なのか。問いただそうと彼は部屋の扉を歩き追いよく開けて、彼はそのまま固まった。

「誰？」

「え？」

入るとそこには驚いた顔をしている小さな子供と、側にお付きの物が何人か。その子供は紅いローブをはおり、こちらをじっと見つめている。

「誰？」

「えっと・・・」

身分を明かしていいものか彼が迷っていると、その子供はこちらに歩み寄り、彼の腕を掴んだ。

「お願いがあるの」

「お願い？」

その子はこちらを真剣な表情で見つめてくる。彼は反射的に聞き返し、次の言葉を待った。

「お兄ちゃんを止めて」

「お兄ちゃん？」

恭介の言葉に彼は頷き、それからお付きのものを一人呼んで、ある物を持ってこさせた。

「これ」

差し出された物を見ると、書いてあるのは一枚のメモ。

「読んでも？」

許可を得た彼はそれを開いた。

選べ

「は？」

たった二文字しかない手紙に恭介は戸惑いを隠せない。そもそも、追う対象がどこにもいない。

「そのお兄ちゃんってどんな奴だ？」

彼は気を取り直して目の前にいる人物に尋ねる。正直聞きたい事だらけではあったが、彼の話を聞いた方がこちらも状況は理解しやすい。

「あのね、黒い服着た、優しい人」

「黒い服？」

一瞬ある人物が頭をよぎったが、これだけではまだ分からない。

「大きくて、槍みたいなのが八本体の周りをうろろしてた」

「本当か！？」

彼の頭の中をよぎった人物の声、顔、そしてその能力が頭の中に蘇る。

「どこに行ったか知らないか？」

「知らない」

その子供はただ首を振るばかりで、恭介のいらいらは徐々に募っていく。

「じゃあ、何を止めさせればいいんだ？」

「もう、人を殺さないでって」

「殺す？ 誰を殺したんだ？」

「お父さんとお母さんに、叔父さんにお兄ちゃん」

「え？」

つまり家族を全員殺したという事だ。受け入れがたいであろう事実をさらっと述べる彼に恭介は言葉を失った。

「全部殺しちゃったんだって」

「殺して欲しいのか？ そいつを」

つまり、そいつがこの子にとっての復讐相手なのだろう。彼はそう判断して子供に問いかけた。

「ううん、止めて欲しいの」

ところが、その子はまたもや首を横に振った。こちらの心が痛む程の真剣な瞳を湛えたまま。

「どうして？ 殺されたんだぞ!？」

恭介にはその感情が理解できなかった。殺されたのなら、殺す。これが彼の人生の全てだった。

「それでも、止めて欲しいの」

「何だよ！ あいつがお前の全てを奪ったんだろが!」

思わず彼はその子の肩を揺さぶり叫ぶ。どうして？ 何故？ 彼には決して理解する事のできない感情を胸に、その子はただ呟き続ける。

「止めて、止めて・・・お願い・・・」

と、そこで思わぬ声が部屋の入り口から響いた。

「すみませんが、客人。もうそこらへんで止めておいて貰えるかな」
はらはらしながら見守っていた者達もその声を聞いて安堵の表情に変わる。

「誰だ？」

振り向くとそこには、白いローブを羽織った初老の男性が一人立っている。恭介は我に返り、その肩を掴んでいた手を離れた。

「前王の秘書官を務めておった者だ」

その男は恭介が落ち着いたのを確認してから、安堵の溜め息を漏らし、自らの身分を明かした。

「何のようだ？」

「話をしたくてね。異世界から来たのであろう？」

「知ってるのか？」

異世界、という言葉に思わず反応したが、彼は直ぐに思いなおす。

この男が知っていてもおかしくはないのだ。現に、既に異世界から人は来ていたのだから。

「例の、『お兄ちゃん』から話をきいてな」

「聞いてやる」

もし男の正体を知っているのだとしたら、それほどありがたい話は無かった。彼は男に連れられて、ある部屋へと通される。

「あの男がここに来たのは二週間ほど前だったかな。それから四日で姿を消したが」

彼は頭の中ですぐに計算を始める。四日、セイバーがここにきたのは三日前で、一週間今は経っている。つまりこの世界はL I G H T S本部の時の流れより大分早い世界だということになる。つまりあの男はもうどこかへと去っており、行方を掴むこともできない。「殺したというのは？」

彼はこの男に王子とやらの証言の正確さを求めた。もし世界からの略奪、あるいは支配が目的なら、この破壊の中途半端さはいささか不可解だった。少なくとも、ここまで殺したのであれば、王族くらいは皆殺しにしてもよさそうではあった。

「私は現場を見ていないが、王子はそう証言している」

「誰も確認していないのか？」

「ああ。王子も何も言おうとはせんし、あつたのは何者かに東部を切断された死体が二人、王座に倒れておったことしか」

「何で問い詰めないんだよ」

「ショックで記憶が無い事も考えられる。それに今からこの国の王となるお方だ。そんな無礼な事は誰にもできん」

「ちっ……」

つまりこちらも手詰まりで、彼は唇を噛んだ。

「その例の男の行方は誰も知らん。王子と私以外その存在も知らないのだから」

「手詰まりかよ……」

「さあな、何か呟いてはおったが……」

「何て？」

藁にも縋る気分で彼は男の言葉を待った。

「ハムレスがどうたらとか、その研究所がどうかとか」

「ハムレス？」

LIGHTSのスポンサーだ。恭介もここでの入隊から卒業まで生活のための保護を受けていた。いわば恩人ともいえる所だった。ただ、研究所というのが不可解だった。ハムレスは確かに全世界を股にかける巨大複合企業だが、そんな物は彼は聞いたことが無かった。

ハムレス、と反応した彼に男は一瞬驚きの表情を作り、それからまたも何かを思い出したような顔をして、ぽつりと呟いた。

「知っているのか？ だったらこれもヒントになるかも知れない」

「何だ？」

「その行き先はこことは違う世界だが、ここと繋がりを持っている世界だそうだ」

「繋がり」

繋がり、それは異世界同士が何らかの関係性を持っているときにどに使われる言葉だ。

「この国の主要な資源は？」

恭介の疑問に彼は疑問の表情を浮かべながらもあっさりと答える。

「マードライクだ。それが何か？」

「ありがとう。産地は？」

彼の知らない名前が出てきたが、調べれば用途はすぐに分かる。

物資は世界観の移動が一番容易だった。だからLIGHTSは一般的に世界観の繋がりを調べるときは、まず物資の繋がりを押さえるのが常道だった。

最後に彼は、一番の疑問を彼にぶつけた。

「どうしてあの王子は殺された家族の復讐を願わない？ 止める止めると言うばかりだ」

その疑問に男は、何かを察したような顔をしたが、それを口に出

すことはせず、彼の問いに正直に答えた。

「事実だけが、真実とは限らない」

「どついう意味だ？」

「自分で考えるといい」

そう短く告げて、彼はそのまま去っていった。取り残された形となった恭介はその場で今の言葉を、頭の中で何度も繰り返し返していた。

第三章 第八節 終末への序曲

「ここがその・・・」

「マーダライクの産地だな」

ルーカスとカイルに合流した後恭介は、散々単独行動の危険性を説かれた拳句、拳骨を食らっていた。

「マーダライクを知ってるんですか？」

できたばかりのたんこぶを擦りながら、恭介はカイルを振り返る。ここは王宮から南に二十キロほどの所で、彼らはそこまで現地の人に案内されてやってきていた。

「ああ、少しな」

「何に使うんです？」

同じく初めてその物質の名前を聞いたルーカスがカイルにその用途を尋ねる。大体の世界を制圧下に置いている現常にあつて、わざわざこんな辺境に来る意味が彼には理解不能だった。

「そこまでは、知らんな」

ルーカスの問いにカイルは顔を曇らせる。不思議に思ったルーカスが声をかけるより早く、恭介が声をあげた。

「入り口はここか」

一般にマーダライクは地下で静かに生成されるそうで、彼らは地下へと伸びる階段を一段ずつ降りていく。現地住民は松明を使用するが、彼らは懐中電灯を手にして辺りを照らしていく。

「凄いな」

「『ハムレス』の支援だろう」

ルーカスが感嘆の声をあげる声にカイルが解説を入れる。本来、この世界の文化レベルではここまで地下に掘ることはできない。何らかの支援が入ったと見るのが妥当だった。

「何の為に・・・」

深く深く下っていくとやがて階段は終わり、ドーム状の巨大な空

間が彼らを出迎えた。

今は誰もいない静かなその空間内で、鼓動が聞こえた。人間の心臓の鼓動にも似たその音は置くに進むたび大きくなっていき、奥まで行きついたときその全貌を彼らに現した。

「これ・・・は？」

「え？ 生きてんのかこの石？」

その石は確かに鼓動していた。一拍ごとに、人間と同じようなペースで動いている。まるで心臓のように。

「石じゃない、金属だ。まあ、正確にはどっちでもないが」

恭介とルーカスが駆け寄る中、カイルは一人冷静にその巨大な何かを見上げた。

「カイン」

「はい？」

「あ、いや何でも無い」

カイルは呟きに反応した彼らに背を向けて煙草に火をつけた。もしかしたら世界を動かすほどの存在になるかもしれない者。ルシファはそれを知ったのか。今までの全ての出来事が、これからの始まりにしか過ぎないことに。これから生み出されるはずの彼がどのような運命を辿り、どうなっていくかは彼にさえ、もう分からなかった。「せめて、死ぬ人間はできるだけ少ない事を」

彼は静かに祈った。例えば自分の命がどうなるうとも、守らなければいけない存在がある。例えば、彼の脳裏に一人の女性が浮かんだように。

「報告しないんですか？」

「ああ、こんなの公表できん」

「上司にもですか？」

恭介はカイルから思わぬことを伝えられ、彼に詰めかかった。

「ああ、今回のことは各自の胸の中だけに留めて置くんだ」

「何故!？」

「それを知るにはまだ早い」

「そんな」

「恭介！ 命令だ！」

なおも詰め寄ろうとした恭介をルーカスが止めた。それでもなお抵抗し続けた彼だが、結局力を体から抜き、ルーカスに引きずられるようにして引き下がった。

「言っただろう？ 例え自分の正義では無くても、従わねばならない時もある」

「これは、カイルさんの正義でも無いんですか？」

諭すように言っただカイルの言葉を恭介は鋭く捕らえた。彼は一旦言葉を止め、苦笑して頷いた。

「そういうことだ。分かってくれ、俺も結構大変な身だね」
「分かりました」

恭介は渋々頷いた。ルーカスがやれやれ、と言うように掴んでいた手を離れた。

「戻るぞ」

彼らは来た道に戻っていく。階段を一段ずつ昇って外に出た時、恭介はふと心の中の疑問を口に出す。

「結局、あいつは何で殺したんだろう？」

「ああ、謎の正体Xか？」

話してしかその存在を知らない彼は恭介の言葉を茶化す。

「お前もつとまじー」

「絶望したのかもな」

「カイルさん？」

若干の悲しみを孕んだ彼の声が雪が降る中響く。

「自分の存在に絶望したのかもしれない、あいつは」

「カイルさん・・・」

何かに耐えるかのようにして発せられる彼の声に、彼らは黙り込むしかなかった。結局、恭介は何も分からぬままに初任務を終える、はずだったのだが。

彼らが本部へと戻った日の深夜、LIGHTS養成学校にエミルは一人残っていた。生徒はすでに全員就寝しており、教師すらも今はいなかった。たまに警備の者の足音が耳に届くくらいで、彼女は一人書類と格闘していた。

「ああもう、何でこんなに」

積み重ねられた書類の数は数えるだけで時計の長針が二周はしそうなほどの膨大な量。

片っ端からテストの採点をしていく彼女ではあったが、さすがにここにきて彼女にも疲れの色が出始めていた。彼女は一つ伸びをして、何か飲もうと立ち上がり自販機があるラウンジまでの道を歩き始めた。

「少し怖いな」

エミルは若干の恐怖と戦いながら道を廊下を歩いていく。真つ暗な空間とはいえ校内の構造位は頭に入っているし、このくらいの闇闇に本気で恐怖しているわけでも無い。それでも今恐怖を感じるのは、大切だった存在が今はもういなくなったからだだろうか。

「さーてさつさと終わらせよう」

「頑張ってるな」

彼女が栄養ドリンクを飲み干し改めて自分に気合を入れた瞬間、後ろから声がかかった。慌てて銃を構えて振り向いた瞬間、もう彼女には前が見えなかった。

「ルシファ・・・」

全身黒い服に身を包んだ彼は完全に闇に同化していた。が、今の彼はエミルにとっては光にしか見えなかった。

「久しぶりだな。あの時からもう一年以上は経つ」

ルシファの声すら彼女の耳には入ってこなかった。ただ、その目からは涙が零れ落ちるだけで。

「うつ・・・ひぐつ」

「おいおい、こんな所でいきなり泣かれても困る」

困ったような声が懐かしくて、彼女はそのまま座り込んで静かに一人泣き続けた。だから気付かなかった。ルシファの目が鋭く光ったのを。

「クリス」

一瞬だった。クリスが彼の隣に現れてからエミルがその声を聞いて銃を構えるまで。

驚愕の表情に彼女の顔が変化するのを見て取って、クリスは一言、彼女に命令した。

「私の受信機を撃ちなさい」

「そんなこと」

抵抗できるわけもなく、彼女は迷い無く狙いを定め撃ち抜いた。衝撃で後ろに倒れそうになる彼女をルシファはしっかりと受け止めてから、エミルの方に視線を向けて一言、

「じゃあな」

「何で？」

泣き叫ぶ彼女の後ろに回りこみ、彼はエミルを抱き締めた。

「え・・・」

「ごめん」

力無く垂れ下がった銃を彼は取り上げ、クリスに目くばせする。

彼女はそれに頷き、感情の籠っていない声でエミルに告げた。

「今起こった事は忘れなさい」

「あれ？」

気付くと彼女はラウンジで倒れていた。手にしているのは先ほど飲んだ栄養ドリンクの空き瓶。

「私、ここでこれ飲んでそれから」

思い出そうとして思わず彼女は頭を押さえた。何かに強烈な負荷をかけられた様な強い違和感に彼女は一瞬顔を顰める。が、

「まあ、いいか」

その直後、彼女は全てを忘れ職員室までの道を戻り始める。自身の顔に残る涙の跡に、彼女が気付く事は終ぞ無かった。

第三章 第九部 対峙

「大丈夫か？」

「はい」

ルシファとクリスは校舎から出てグラウンドへと出た。空を見上げると星々が彼らを照らしている。誰もいない空間は、今は彼らの物だった。

「昔さ、体育で徒競争なんかしたりするとさ」

「はい？」

彼はグラウンドで準備体操を始めた。在りし日を思い出すかのように、ゆっくりと丁寧に。澄んだ空気の流れる中、彼の息だけが伝わる。やがてそれも終わり、彼は彼女にひとつ提案した。

「競争しようか」

「ここですか？」

「そう。グラウンドの端から端まで」

彼は今いる場所から向こうの校門の方までを指差した。確かにこの時間ならば誰かに見つかる心配は無かった。唯一校内にいる彼女もまだ気付くことは無いはずだ。

「何故？」

「走ってみたいから、本当の本気で」

それだけの言葉で彼女は納得した。黙って彼の隣に並んで、前を見つめた。あるのはただ、何も無い地面が延々と延びているだけ。

「行こう、行けるところまで」

「はい」

ルシファの合図と共に彼らは走り出した。どこまでも遠くへ行けるようお願いしながら。

「ふああ」

恭介は欠伸をしながら学校までの道のりを歩いていた。ある書類

が本部で急に必要になったためで、任務帰りでありながら彼はさまざま学校までそれを取りに行くように支持されていた。

「面倒くさ」

彼は直ぐに終わらせようと校門を開き、中に入った。

「あれ？」

彼は入って直ぐに様子がおかしい事に気がついた。誰かがいる。こんな真夜中に人がいること自体不思議だったが、彼らがしていることもまた不可解だった。

「走ってくる！？」

遠くにいる二人は横に並んだかと思うといきなりこっちに向かって走り始めた。凄まじい速さの為、すぐに彼らは校門まで辿り着き恭介と鉢合わせした格好になる。

「お前！」

「ああ例の」

「誰？」

恭介とルシファがそれぞれを思いあたるまで数瞬、クリスが恭介を見てから問いを発するまでまた数瞬、三人はそれぞれ向かい合い固まる。

「お前、何でここに！？」

恭介が剣を抜いてルシファの首元に突き付ける。クリスが何か言おうとしたが、ルシファがそれを制して恭介と真っ向から向き合う。「やっぱり、気付いたか」

恭介の気迫を流すように彼は表情も変えず淡々と話す。そんな彼に反射的に嫌悪感を覚えて恭介は彼の喉に剣を突き付けた。

「どうしてあれだけの人間を殺したんだ？」

「さあて、な」

「答える！」

余裕を見せるルシファに恭介はさらにヒートアップする。血が一筋、ルシファの首元からゆっくりと流れた。

「手紙は読んだらう？」

その血を気にすること無くルシファは恭介に問う。

「手紙？」

恭介はそのまま片手で剣を支えたままポケットに手を入れる。確かに二枚の手紙が入っている。が、内容が短かったため、今さら読むまでも無い代物だった。

「これがどうかしたのか？」

恭介は剣に込める力を段々と強くしていく。今の彼の頭にはあの王子の声など残ってはいなかった。殺戮者は殺す。ただそれだけが彼の理性を支配していた。

「分かるはずだ。お前と俺はある意味同じなんだから」

「同じ？」

訳も分からず聞き返す恭介にルシファは冷たく告げる。

「良く考えろ」

「何を！」

そう言いながらも恭介は何かしかの違和感を拭えないでいた。何だろう、と思い出そうとして直ぐに一つの記憶に焦点が当たった。

「あれは」

「あれは？」

まるでルシファに導かれるように彼は記憶の海を漂い始める。

「そうだ、確か」

それは遠い昔、まだ家族皆で暮らしていた頃。父さんとした馬鹿みたいな文字遊び。

『恭介、これは横から読んでも縦から読んでも相手に意味は通じるんだ』

『本当だ。凄い』

『父さんが考えたんだよ』

『本当？　じゃあ、これは二人だけの秘密？』

『ああ、そうだな。二人だけの秘密だ』

六歳の頃だったろうか、七歳の頃だったろうか。恭介の頭に急速に蘇る記憶は悲しみと共に彼に懐かしさを思い返させたが、それよ

りも問題だったのは、

「何故お前がそれを知っているんだ？」

二枚の手紙の意味に彼はすぐに思い当たった。二枚の手紙の頭文字を合わせて繋ぐ。出てくる言葉は『追え』。

「お前の事か」

答えを導き出した彼に満足したのか、彼は微笑んで頷いた。

「御名答。テストのつもりで簡単にしたんだが、どうやら当たりの様だな」

ルシファはこれで話は終わりだと言わんばかりに、凄まじい速さで恭介の腹部に蹴りを見舞う。

「ぐっ！」

「じゃあな、ルーキー」

蹲る彼に上から声がかかった。待て、と言おうにも痛みで声が出てこない。恭介は最後の力を振り絞ってか細い声で唱えた。

「ヒューリク」

「まさか！」

完全に油断していた彼の上空に恭介が現れる。まだダメージが残っている体では万速には戦えないため落下するスピードを剣の威力に変えルシファの頭に狙いを定める。

「六式」

すぐさまルシファは力を展開。そこまでは恭介も知っている彼の力だったが、今日はその時と少し違った。

「翼？」

「出来損ないの、な」

何故か自嘲気味に話す彼の背中には、灰色の片翼が生えていた。

「ここから回避できると思うな！」

「しないさ」

六式の力によりさらに加速してルシファに迫る彼に対し、ルシファは微動だにせずそれをただ見上げているだけ。少し離れた場所にいるクリスも特に何するわけでもなく、黙って彼らの戦いを見守っ

ていた。

「喰らえ！」

剣が彼の頭に当たる寸前、信じられないことが起こった。

「何！？」

彼の顔に刺さるはずだった恭介の剣は当たる寸前に凄まじい風に防がれ、恭介はそのまま後ろに吹き飛ばされていく。

「絶対防御、とでも言えればいいのかな」

「ふざけんな！」

自身に残るダメージの事も忘れて恭介は遮二無二にルシファに切りかかった。

「無駄だ」

だが当然のように、彼の剣はルシファに届く前に弾き飛ばされ、先ほどと同じように恭介は後ろに吹き飛ばされる。

「答える！ 何故殺した？」

「自分で探すんだな」

そのままこの世界を後にしようとするのを見て取った恭介は唱えた。

「フェルクー」

恭介の体が消える。また瞬間移動か、とルシファが判断し瞬時に周りの気配を探るがどこにも彼の気配がしない。

「どこだ？」

「ここだ」

突然恭介がルシファ前方に現れ、足目がけて切り払う。

「つつ！」

ルシファが寸前で気付いて飛び上がるが、切り裂かれた靴の底がひらひらと、宙を舞った。

「逃がすか！」

「三式！」

追いつがる恭介に八本のサリッサが激しく回転し、恭介に襲いかかる。

「舐めるなっ！」

ランダムに移動しているはずのサリツサが全て交わされルシファは舌打ちする。一体どうやってこの短期間で強くなったのか、彼には分からなかった。

突然、後ろに気配を感じたかと思いあたまを伏せると、今まで頭が存在した空間が切り裂かれる。

「なっ」

「ちっ！」

後ろを振り向くと悔しそうな顔をする恭介と目が合った。ルシファは慌てて距離をとり改めて自分の周りにサリツサを展開させて絶対防御の陣を取る。

「成長してるじゃないか」

「いつまでもあのままだと思ったたら大間違いだ」

着地した恭介はルシファに剣先をゆつくりと向けた。そのままじりじりと足をルシファの方に向けていき、恭介はまた、姿を消した。
「終わりだ」

第三章 第十節 真実への道筋

消えた彼の気配が追えず、ルシファは困惑していた。気配を消しているのだから、本体がどこにも見当たらないのだ。肉眼では確認できずルシファは一旦上空へと退避する。そのまま上空で全身の神経を研ぎ澄まし、グラウンド内全ての空間の空気の流れを読み取る。

「どこにいる？」

独白にも似た問いに答える者は誰もおらず、ただ刻々と時が過ぎていく。

ふと、右から流れてくる空気に乱れが生じた。そのままそちらの方を見ずにルシファはサリツサを向ける。何かを受け止める感触があった。

「何！？」

「読めたよ」

恭介がそこにいた事に対して彼は勝利を確信する。

「まさか全てフェイクとはね」

ルシファはすぐそこにある彼の気配には目もくれず地上に着地、すぐに目的の場所まで移動を始める。

「待て！」

「嫌だね」

恭介が後ろから追い駆けるが、からくりを理解した彼にとっては、もうこの戦いは余興でしかなかった。

「いた」

体育館の裏に恭介の本体を見つけた彼はサリツサを向ける。

「八十二式」

彼の言葉と同時にサリツサが消える。恭介の技を見て考え付いた即興の新技だった。

「あいつまさか！」

恭介が焦りと共にルシファに切りかかるが時既に遅く、恭介の背後に現れたサリッサが彼の体を貫く。

「ぐっ」

「心臓を貫かれたって大丈夫だろ？」

「何！」

事実、恭介は全身を貫かれてなおルシファへの追撃を緩める事は無かったが、彼のいる場所を把握した瞬間、膝について降伏の意思を示した。

「ばれた、か」

「中々いい線いつてたが、甘いな」

「そこで気付いた？」

恭介はそこで改めて自分の体にサリッサを突き付けているルシファの顔を見た。恭介が二人いる、という状況にルシファは少しも驚くことはなくネタ証しを始める。

「前にも似た状況はあったんでね。気配を消す行為には何らかの代償が含まれるケースがほとんどだ。それで、お前の場合それが何なのか調べてみたんだが、中々分からなくて焦った」

「どこで分かった？」

恭介は諦めてはいたが、最後の足掻きとしてとりあえず聞いてみる。戦闘中の行動においておかしな行動は一切していないつもりだった。

「お前、最初からこれ使えば良かったのに使わなかったよな」

「それが？」

「おかしいと思ったんだ。単に肉体強化の為の技なら躊躇することはない。強敵相手なら使わなきゃ殺されるだけだ。なのに使わなかった。だとすると使用条件は一つ」

全て読まれていた。恭介は目を閉じて相手の勝利宣言を待った。

「お前はあの瞬間、体育館裏に瞬間移動した後自分の体を二つに分けたんだ。自身の力を極限まで高めた、今お前が意識を置いているその分身体と、この今は空っぽの本体」

気配とはその人間の意識であり、考えである。何も考えず常に無心の人間がいれば、その人間の気配など誰も探れないが、そんな人間は現実には存在しない。それを擬似的に創り出すのが恭介の技だった。

本体には生きるための必要最低限の力だけを残して後は戦うためだけに創り出した体へと移動。体への負担を何ら考えなくてもいいために戦闘中は無敵だったが、今のようにならに敵に本体を見つけられ押さえられては、どうしようもできなくなるという致命的な欠点があった。

「何で本体の居場所が分かった？」

「気配を追うのを止めたんだ。俺がさっき空で追ったのは空気の流れ」

当然の事ながら、何かがある場所には空気が存在しない。そこから辿れば何がどこにあるか大体の居場所を掴む事が彼には可能だった。

「目茶苦茶だな」

「お前のも大概だが」

彼らはお互い苦笑しあつた。実の所両者の技は消耗が激しく、彼らの力はもうそんなに残つてはいなかった。

「負けた。どうとでもしろ」

恭介は諦めて分身を解き、両手を上げた。周りにはサリツサが旋回して今か今かと待ち構えているが、不思議と恐怖は無かった。大体、と恭介は思う。そもそも恭介の技は一对一の状況で使用する技ではない。本来は気配がしない事を利用して潜伏したり、精々尾行するのが精一杯の技だった。こうして隠れるところが無ければ使ってもその瞬間本体を狙われるだけだったし、援護も無いこの状況では本体が捕まればこういう状況になるのは目に見えていた。それでも使ったのは、そうでもしなければこの戦力差が埋まらないと考えたから。

「結局、こんな事になったが」

一人ぶつぶつと何かを呟き続ける恭介にルシファは一枚のメモを差し出した。

「今度は暗号でも何でも無い。ただのヒントだ」

「はあ？」

訝しがる恭介の手にルシファはそのメモを握らせ、彼はクリスの方へと向かう。

「すまない、手間取った」

「いえ」

いつもの様に冷静に答える彼女の手を取り、ルシファは改めて世界移動のための呪文を唱えた。

「あいつ、一体」

何も分からぬままそれを見届けようとした恭介だったが、最後にルシファに向かって叫んだ。

「桐林恭介！」

いきなり大声を出した彼に一瞬ルシファは面食らった様な顔をしたが、すぐにこちらに届く声で返事が返ってきた。

「ルシファ・L・イエルズ」

「ルシファ」

恭介は小さくたった今聞いた名前を反芻した。これから深く関わって行く事になるかもしれない名前。新たな物語のスタートは、もう直ぐそこにまで迫っていた。

最終章 第一節 崩壊

「BL-2地域、異常ありません」

「了解した。引き続き警戒に当たれ」

LIGHTS本部モニタールームに三人は揃って立っていた。今日は朝から異常も無く、彼らが出て行かなければならないような任務も入っていないかった為、ひとまず平和な時間を彼らは過ごしていた。

「あいつの様子はどうだった？」

「いつもと変わらん」

「そうか」

偶にランスロットとセイバーが会話を交わすだけの空間に一つの異変が起こるのは、その直後の事だった。突然アラーム音が鳴り響き、隊員の一人が応対に出る。一言二言言葉を交わした後、その隊員は困惑した顔でセイバーの方へ振り返った。

「桐林恭介がセイバー様に話があるとのことですが」

「何の用だ？」

一隊員が隊長クラスに直接対話を申し込むのは異例の事だった。大体はまず直接の上司なりチーフに話をつけるのが常だった。セイバーの問いに隊員は困惑気味に首を振り、恭介の要望をそのまま伝える。

「直接会って話したいと」

つまり、誰にも知らせずトップに話すのが一番手っ取り早いと彼が考えたということだ。

どうする？ と視線を向けてきたランスロットに答えるようにセイバーは隊員に命じた。

「分かった。こちらから場所と時間は指定する」

「会うのか？」

ランスロットが意外そうに尋ねる。これまでこんな事は無かった

し、あつたとしても自分に任せるとばかり思っていたからこそ疑問である。

「何かあつたのだろう。速いうちに解決しておく方がいい」

「そりゃそうだ。結構暇だしな、今」

ルシファが参戦してきてからというものの、検挙率は格段に挙がっていた。何せ、と頼みもしない物までついだと言わんばかりに捕らえてくるので、こちらの仕事は主にそれらの尋問のみとなっていた。

「あいつのお陰だ」

「はいはい」

セイバーが微笑むのをランスロットは微妙な心境で頷く。信頼するのは構わないのだが、いざという時の為の心の余裕は常に持つておかねければならない。この先どんな事があるか分からないのだから。下手をすれば、裏切られる危険性すらあるのだから。

「ここは任せる」

「了解」

セイバーがランスロットに告げ、彼女は部屋を後にする。この後恐らく隊長室に呼び出すのであろうが、念のため隊長室の周りに隊員を配置する事をランスロットは怠らなかった。彼女無しにこの組織が成り立たないのは、『セイバー』不在時の前と後とを見れば一目瞭然だった。

「せめて、何も起こらなきゃいいんだけどな」

彼女の幸せをも含めて彼は祈った。いつものように隣にいるボルクに視線を向けても、鎧の中の表情など窥えない。

「お前、いつも何考えてんだ？」

ランスロットは興味を持って初めてそんな質問を彼にした。思えばここのポジションに着いてからというもの、彼とまともに話したことが無かった。

「って、やっぱり無視か」

ボルクはただ前を見つめるのみ。必要最小限の詞以外黙したまま

何も語らない彼の素性を知る者は隊内広しといえど誰もおらず、彼の正体は七不思議の一つとなっていた。実は人間では無いのではないか、という噂話までたつ程なのだから。

「さあて、仕事するか」

ランスロットは目の前の書類に取りかかり始めた。セイバー不在の時は彼が隊内を取り仕切る事は暗黙の了解だった。すぐに戻ってくるだろう、という彼の目論見は、またもや大きく外れる事になる。

隊長室に戻ったセイバーは椅子に座り受話器を取った。セイバーの趣味を反映してか、室内には大きな机と椅子、そして来客用のソファしか無かった。ランスロットがせめて他にも何か置きよとうるさかったが、そんな趣味は彼女には無かった。

「桐林恭介をここに」

そう言つて彼女は一息つく。大した事は無いだろう、と彼女は判断していた。多少厄介な件だったとしても、自分ならば何とかできるという自信と、あいつなら何とかできる、という信頼。

「このセイバーがな」

彼女は一人自重するように呟いた。誰かを心から信頼するという事など今まで無かった。最初にここに極秘に呼び出しリストを渡したとき、不安が無かったといったら嘘になる。だから最初はそんなに重要な情報も渡しはしなかったし、危険性も低い物を選んでいった。本当に信頼してよい者が確かめるために。

そんな彼女の心の内を知つてか知らずあの男は完璧にやり遂げ戻ってきた。次も恐らく何てことは無い顔で戻ってくるのだろう。それをどこかで期待している自分にまたもや彼女は溜息をついた。

「何を考えている？」

前回会った時もそうだった。存在を知り居場所を突き詰めた時、彼女は咄嗟に殺すよう彼に告げたが、そんな馬鹿な話も無かった。みすみすハムレスとの繋がりを断ち切る馬鹿がどこにいるというのか。

ドアを叩く音がして、入室を求める声がした。

「入れ」

彼女は気持ちを切り換え、隊長としての自分を作る。隊員の前でこんなにやけた顔をしていては士気の低下に繋がり兼ねない。

「失礼します」

入ってきた恭介は神妙な面持ちで入ってきた。手には何かメモのような物を持っている。

「座れ」

とりあえず彼女は目の前のソファに彼を座らせた。デスクを挟んで両者が向かい合う格好となる。

「どうした？」

「いえ・・・」

何故か言いよんだ彼に彼女は長期戦を覚悟して椅子に深く身を預ける。こういう時は無理に聞き出そうとせず待った方がいい。

「あの」

意を決したように言葉を発した恭介にセイバーは少々おかしな雰囲気を感じながら冷静に聞き返す。この言葉が後に多大な後悔を引き起こすとも知らぬまま。

「ルシファ・L・イエルズという男をご存知ですか？」

「何？」

彼女の中で、何かが壊れる音がした。

最終章 第二節 見えない明日へ

「ルシファ？」

彼女は改めて聞き返した。名前だけならいざ知らず苗字まで完璧に一致している。同一人物と判断してよさそうだった。

「ご存知ですか？」

同じ質問を繰り返す彼を前にセイバーは思案する。本当のことを告げていいはずも無いが、何故その名前を知ったのか分からないとこちらも対応の仕様が無かった。

「その名前をどこで知った？」

「本人から。一昨日の事です」

つまり恭介とルシファは直接どこかで会ったということだ。彼と最後に会ったのはセイバーの記憶では三日前。あの世界では一週間は過ぎているはずだから、正確には自分と会った一週間後のルシファという事になる。

「本人？」

「はい、学校のグラウンドに現れて、少し交戦しました。完敗でしたが」

「戦ったのか！？」

会った場所にも、起こった出来事にも驚いて思わず彼女は声を荒げ立ち上がった。

「はい。それが何か？ 不審人物でしたし、一応尋問はしたんですが」

冷静に答える恭介にセイバーは座りなおし、話しの続きを待った。どうやら自分が想像していたよりも話は進んでいるらしい。

「相手は何と答えたんだ？」

「何も。急に戦闘態勢に入りましたので、応戦しました」

「他に誰がいなかったか？」

「そつえば、一人いました。肌も髪も真っ白な女が一人」

淡々と質問に答えていく恭介に何か違和感を覚えなら、彼女は一人納得していた。どうやらあの女とは一緒らしい。ならば特に彼の目的が変わったという事も無さそうだった。本当に裏切る気なら自分の所に来て自分を殺せばいいだけのことだ。それでLIGHTSはそう崩れになるし、彼女の能力を考えればそれが一番自然だった。

「ああ、それで」

セイバーは一通りの質問を終えた後、核心に入った。

「何故それを今更私に直接報告しようと思った？」

そこが一番の疑問だった。会ったのならそれはそれでいい。彼もそれを望んであの世界に恭介を送り込む事を要請したのだし。しかし、昨日ではなく今日いきなり隊長の下にこんな話をしてきたのは何か裏がありそうだった。

「ルシファを個人的に知っていますよね？」

「知らんな。初めて聞いた名前だ」

意表を突く様にして出された質問に彼女は取り敢えず白を切った。彼の名前を知っている者は隊内でも極少数の信頼できる者ばかり。素性ともなると知る者は隊内には存在しない。セイバーでさえ何の情報も掴めないのだ。ここで嘘をついたとしてもばれるわけが無い。その計算に基づいての嘘だった。

「嘘ですよ」

「何故そう思う？」

即答され、若干の汗が彼女の額に浮かぶ。それに気付かない振りをして彼女は恭介を見つめた。大抵の者ならそれだけで萎縮してしまうその目を恭介は真っ向から睨み返した。

「あの世界に送り込まれたのはまだいいんです。偶然という事もありますから。ただ、ルシファがグラウンドに現れたのはおかしい。もし彼がLIGHTSのテリトリー内のあんな奥深くまで侵入できて誰にも悟られずにそこに滞在し続けて誰にも悟られず抜け出しその後追っ手がつくことも無くのうのと今もどこかで暮らしている」

一気にそこまで話した恭介はそこで一息つき、本題に入った。

「誰かの援助無しでは無理です」

「そうとも限らないだろう。そこまでの実力者なのかもしれない。警戒を強めなければならないな」

セイバーは恭介の言葉に反論しながらも、同時にルシファの迂闊さを嘆いていた。何故あの男はそんな単純なミスを犯したのか。ばれたのなら関係者だの言い繕って逃げればいい。後でこちらに確認しにきてもセイバーが極秘に何らかの依頼をしたと言えは済む話だった。

「はい、そこまでの実力者ならそういう事も可能でしょう。けれど」
恭介は組んでいた足を組み変えて、言葉の語気を一層強くした。
「彼にそこまでの強さは感じなかった。エデフィのような圧倒的な強さも、ランスロット様の時のような威圧感もなかった。彼にあんな芸当は無理です。実力が足りなさ過ぎる」

なるほど、とセイバーは恭介の眼力を心の内で賞賛した。確かに彼の實力は覚醒から1年少々の身としては凄まじい物があつたが、所詮戦闘経験は数える程度。幼い頃から戦闘経験を受けてきた恭介に勝つだけでもその才能の片鱗は窺えるが、冷静に考えればその通りだった。自身との戦いでも一戦目は邪魔が入り、二戦目は一対一の状況ではなかった。

ランクとしてはまだまだ下から数えた方が速い存在ではあつた。

「なら、それ相応の能力者がついてるのだろう。何を考えている？」

セイバーの当然とも思える見解に恭介は少しの笑顔を浮かべながら冗談のように言った。

「もしかしたら、貴方がそのそれ相応の能力者かもしれないと思ひまして」

無言の応酬に空気が震えた。

「冗談も大概にしる。他の者がいれば反逆罪だぞ」

「はい、それも覚悟の上で聞いています。違いますよね？」

厳しい問いにそれでも恭介は重ねて問う。

「当然だ」

「またもや無言の空気。まだ言い足りないか、とセイバーが口を開きかけた時、恭介が咳を立った。」

「それさえ分かればもう結構です。お時間を取らせて申し訳ありませんでした」

頭を下げる恭介にセイバーも言いかけた言葉を飲み込む。どうせこの男は放っておいても調べるのだろう。自分が持っている以上の情報を彼が掴めるとは思っていなかったが。

「分かった。その件はこちらで調べる。任務に戻れ」

「了解しました」

扉が完全に閉まった瞬間、その者はへたり混んでいた。

「・・・怖すぎる」

あの威圧感の本物だった。初めて受けたセイバーの本気に恭介は圧倒されていた。何とか形だけは整えたものの、動揺している事はばれていたかもしれない。

「でも」

彼は立ち上がり、ポケットに入れていたメモを握り締める。場合によっては突きつけようとも考えていたが、その必要はなかった。

「間違い無いな」

恭介はセイバーとルシファとの間に何らかの繋がりがあると確信していた。これまでのルシファの言動からして、敵であるとは思えなかったが、完全に味方であるとも思えなかった。

「それに」

と、彼は拳に力を込める。あのルシファ相手にあそこまで善戦できたのだ。確実に自分の力は上がっているという実感が彼にはあった。トップクラスに比べればまだまだなのは明白だが、少なくとも少し名を売っている様な連中はもう相手にはならない筈だった。

「行ってみよう」

メモにはとある世界の場所が記されていた。一人で行って大丈夫か、もし何かあった時何とかなりそうか、昨日一日考えて出した結

論はとりあえず行動しよう、だった。

「ま、何とかなるでしょ」

お気楽で前向きな思考の下、先ほどのセイバーと会話していた人格は別人格だったのか、と突っ込みを入れたくなるほどの素早い頭の切り替えで、彼はもう既に先を見据えていた。

「全く、悪い予感はあるのかねえ」

ランスロットは密かに耳に当てていたイヤホンを外し、溜息をついた。こんな事になるならもっと速く対応して置くべきだったが、ルシファがこうも早く動くとは計算外だった。

隊長室に案内させた隊員に盗聴器を渡し、それを彼の服に滑り込ませるよう支持しておいたのあながち間違いでもなかったらしい。

「仕事がまた一つ増えた」

彼はそう言ってセイバーと自分の予定に一つ、任務を付け加えた。

「何か答えが出そうだな」

そんな予感と共に、彼は席を立ち隊長室へと向かった。

最終章 第三節 旅立ちの前に

「こんな所にいた」

用を済まし自室に戻ろうとした彼を呼び止める声がした。声の主は分かっているのです。驚くこともなく彼は振り返る。

「何だ凜か。お前任務はどうしたんだよ？」

以前会った時は確か、任務が入っているとかで浮かれていた記憶があった。

「ちゃんとしてます。恭介と違って」

「な、俺だって」

突然非難めいた口調になった凜に慌てて恭介は反論する。

「すぐに戻ってきた。おまけに滞在時間は半日だったんだって？
報告書も出して無いし」

「は、外れだったんだよ」

すぐに切り替えられ恭介はしどろもどろになる。元より嘘が得意な方では無い。案の定直ぐに何かを見透かしたような顔になった凜は彼の顔を覗き込む。

「ふうん、ルーカスと恭介にカイルさんまで行ったからてっきり何か特別な任務かと思っ

た」

「新人に特別任務与えるほど人材難でも無いだろ、ここは」

まだ何か言い足りなさそうな顔をしている彼女を置いて彼は歩き出した。

「ねえ！」

「まだ何かあるのか？」

歩き出した彼を呼び止める様に発せられた声に彼は振り返る事無く立ち止まる。

「明日暇？」

彼は思わず彼女を振り返った。ただでさえLIGHTSは激務だ。

今年は新人の数も少なく例年の四分の一しかおらず、いくら優秀な人材が揃っているとはいえ、新人二人が同時に休暇を取って心象が良くなるわけも無い。

「はあ？」

「明日暇かって聞いてんの」

「どうやらそれさえも彼女は折込済みらしい。一日くらい付き合つのは良くある話だったが、今回はかりはタイミングが悪すぎた。

「すまん、明日は用がある。また今度」

彼は手を振ってそれを断り、再び自分の部屋へと歩き出した。

「もう」

去っていく恭介の背中を見送りながら彼女は密かに意気消沈する。また今度とはいってもいつ会えるか分からない身分なのだ。任務で殉死する話も無いわけでは無いのだから。

「こんにちは」

「今度は何だよ」

恭介は内心溜息をつく。自分の部屋まで戻るのにこんなに苦労するとは思ってもいなかった。

「少しお話がしたくて、こんな格好で失礼ですが」

「確かに失礼だな」

その体には大きすぎるコートに帽子、春先にそんな格好をしているのはある種滑稽でもあった。声は少年の物だが、その実態は掴めない。

「貴方、ルシファと会いましたよね？」

「知らないな」

恭介は白を切る。こういう得体の知れない相手にまともに相手をするのは馬鹿のやる事で、彼には少なくとも自分はここまで馬鹿ではないという自信があった。

「では、質問を変えましょう。明日のご予定は？」

「何でそんなもんお前に教えなきゃならん」

あくまで丁寧な口調を崩さない声に恭介はあくまで態度を変えない。その少年らしき者はふう、と息を吐きコートの中から何やら取り出して恭介に見えるようかざした。

「これを見ても、同じ事がいえますか？」

「おいおい」

見せられた物を見て恭介が啞然とする。目に入ってきた物は間違い無く『ハムレス』の中でも一部しかその所有を許されていないと噂されているカードキー。それさえあれば全ての世界の秘密が覗けると言われているそれは、隊内の七不思議の一つとして語り継がれていたが、まさか実物をこんな所で拝めるとは彼も思っではいなかった。

「それどうしようってんだ？ まさか捕らえて拷問でもするんじゃないだろうな」

「まさか、ただ素直に質問に答えていただければ」

そこまで言っただけでその者の声は途切れ、変わりに小さく舌打ちが聞こえてきた。何かの気配を一瞬遅く感じ取って振り向くと、そこにはランスロットの姿があった。

「うちの隊員に、何か様か？ ロクニ」

「いえ、少しばかりご挨拶を」

ロクニ、と呼ばれた者は軽く会釈して、そのまま霧のように消えていった。

「え！？」

恭介が驚いてその者がいた空間を手で探るが、何の感触も無い。

「消えた？」

「それがあいつの能力だからな」

ランスロットが驚くことなく手にしていた大剣を下ろす。その瞬間、その剣は始めからそこに無かったかのようにどこかへと消える。恭介はそれを見て心底うらやましそうな顔をする。

「便利ですね」

「ああ、エミルの簡易版ってところだな」

自分専用の『武器』、という物を持っている能力者は意外と少ない。恭介も剣自体はどこにでもある安物だし、『セイバー』でさえあの剣は代々セイバーに受け継がれている物で、彼女は自分特有の武器を持っていない。ルシファやランスロットのようにいつでも自分の力を解放する事によっていつでも戦闘態勢に入れる、というのは大きなメリットだった。

「こんな所で油売ってるから変なのに絡まれるんだ。単独行動はできるだけ避ける」

「了解です」

ランスロットはそう言って彼の横を通り過ぎていく。恭介もその後に残きながら、さて明日の休暇はどんな理由をつけて取るうかという思案に入り込んでいた。

「こんなものだろう」

「お前一人で大丈夫か？」

早々に自身の予定の調整を済ましたセイバーにランスロットは心配そうな顔になる。明日、恭介が何をする気かは知らないが、世界移動をする瞬間にこちらの分析班を投入して彼の行く先を解読、その直後LIGHTSから選抜した隊員数名がその後を追う、というのがランスロットの描いた作戦だったのだが、例のごとくこの頑固な隊長は単独で行くと言って聞かなかった。

「問題ない。『ハムレス』が関わっているのだろう？ 半端な物は連れて行っても邪魔なだけだ」

確かにそれは正論だったが、理性とはまた違う部分で彼は彼女の行動を否定しにかかる。

「だったら俺も行く」

いつにもまして真剣な表情で提案する彼に対し、セイバーは小さな微笑を返した。

「お前までここからいなくなったら誰が緊急時に指揮を取るんだ。大丈夫だ、私は弱く無い。知っているだろう？」

自分が最強と信じて疑わなかったあの日、初めて負けたあの日。彼女との出会いから今までの期間は決して長くは無いが、それでも彼女の性格は知っているつもりだった。

「俺はいつかお前に勝つ。忘れるなよ」

隊長室を後にしようとするセイバーの方を見ないままランスロットは言い放った。その声を聞いたセイバーも、ライバルとして応えた。

「分かっている。それまでは死なん」

扉が閉じられ、彼は一人になる。主がいない部屋はそれだけで物寂しく、彼は思案に耽る。

「何が起こっている？」

分からない事だらけだった。ハムレスの目的も、ルシファの正体も。カイルから極秘に提出された報告書の中身は、一見ルシファが大量虐殺を肯定したかのような状況だったが、セイバーも彼もその報告を丸呑みにはしなかった。マードライクを恭介に見られたのは誤算だったが、それすらもルシファは計算に入っていた可能性がある。そして今もまた、恭介をどこかに導こうとしている。

「戻って来いよ、二人とも」

静かに彼は天井を見上げ、呟いた。

「よし、こんなもんだな」

恭介は荷物をまとめた鞆を満足げに見てから一つ伸びをする。自室に戻った彼は最小限の日用品を小さな手提げ鞆に突っ込んでいた。整理なんて言葉は彼の脳内には存在しない、とでも言い切るかのような適当さに、手伝いのため引っ張ってこられたマルクは頭を抱える。

「何、これ？」

「ちよつとした用意。その歯ブラシ取ってくれ」

「はい、ていうか何でベッドの下に落ちてるの？」

ベッドの下から苦勞して取り出したそれはマルクにはもはやそれ

は捨てるべき物にしか見えなかったが、恭介はそれを鞆に入れ、満足そうにマルクにVサインを送った。

「完璧」

「ある意味ね」

「どういう意味だ？」

「そのまんま」

そう言つてマルクはベッドに腰掛ける。決して広くは無い部屋はベッドと机で一杯になり、自由なスペースはそんなにあるわけでは無かった。それなのにこの散らかり具合、足の踏み場も無いとはまさにこのことだった。

「旅行でもするの？」

「まあな」

適当に答える恭介の返答に彼はさほど興味も無さそうにベッドに横たわる。

「そんな好き勝手ばかりしてると、取っちゃうよ」

「そんな時は勝負だな」

思わず飛び起きたマルクに恭介は目を点にする。

「何だよ。次の『セイバー』お前も目指してるんじゃないのか？」

「あ、ああ。そのこと」

自分の早とちりに気付き、マルクは誤魔化すように笑みを作った。
「他に何かあったか？」

怪訝そうな顔をしながらも鞆を適当に放り投げ、恭介はジュースを二本冷蔵庫から取り出し、一本をマルクに差し出した。

「ほれ、今日の報酬」

恭介からそれを受け取り、マルクはゆっくりと開けた。炭酸が体に染み込むのを感じながら、彼は恭介には聞こえない声で呟いた。
「勝てそうも無いなあ」

最終話 始まりの終わり

翌日、恭介はLIGHTSの制服に着替え、自室内で世界移動の為の呪文を唱える。行き先はメモに記されている場所。何が起こるかは分からなかったが、彼にもう迷いは無かった。

「行こう」

一言短く告げ、彼はこの世界から姿を消した。

「桐林恭介、移動しました」

「どこだ？」

同時刻、モニタールームにセイバーは待機していた。すぐに分析班が解読を完了しセイバーに情報を送る。

「あいつにしては早起きだ」

「余裕だな、セイバー」

感心したように微笑むセイバーにランスロットは軽く答える。すぐにでも出られるよう最大限援助できる態勢は既に構築済みだった。送られてきた資料にランスロットがまず目を通す。と、その目が資料を読み進んでいくことに段々険しくなっていく。

「どうした？」

そのままこちらに資料が来ると思い待っていたセイバーが不審げに尋ねる。ランスロットは動揺を隠しながらありのままを報告する。

「データベースに無い世界だ」

「UNKNOWNか」

「みたいだ。それも結構この世界と近い」

セイバーも分析結果を聞いてふと何かを思うような顔つきになる。LIGHTSが異世界への探索を開始してからもう随分長い時間が経っている。しかもこの世界と近いということは恐らくLIGHTSのテリトリー内にその世界が存在するということ、今まで見つかっていないというのも奇妙な話だった。

「気をつける、一応な」

「分かっている」

ランスロットの言葉を背に、彼女は这个世界から離脱し、未知の世界へと向かった。

「何だ？　ここ」

恭介は目に飛び込んできた光景にしばし我を忘れた。一面コンクリートの床が続く無機質な空間が広がっている。周りを見渡す限り何の建造物も無く、地平線はかなり近い。どうやらそんなに広い世界というわけでも無いらしい。彼はとりあえず思いのままに足を踏み出した。

彼は段々不機嫌になっていく。暫く歩いても特に何かあるわけでも無く、起こるわけでも無く、彼の我慢は限界寸前だった。

「あの野郎！　思わせぶりに渡しやがって！　何もありや」

しない、と言葉を紡ぐはずだった彼の思考は途切れる。振動がした。遠くから一定感覚に響く思い金属音の重なりは、徐々にこちらに近づいてくる。音がする方向をに注意を向けながら、いつでも戦闘に入れるように刀に手を当て力をゆつくりと込めていく。

そのまま待ち続けているとふいに音が止んだ。それでもそのままの姿勢で一分間、彼の体感時間で待った後、さっきまで音がしていた方向に彼は歩き出した。

「何が待ってるんだか」

あまり広くは無い世界と思われる空間の中、地平線上に何かが見えてきた。最初は黒い山にしか見えなかったそれは、徐々に全貌を現していく、彼がそれを確認した瞬間、ここに來た事を彼は心底後悔していた。

「げっ！」

まず、恭介はそれが何か分からなかった。次に、それは何かが固まって大きな塊を形成している事に気がついた。そして、その小さな何かは蟻だということに気がつくまで、そんなに時間はかからな

かった。

「おいおい」

LIGHTS本部に昆虫、と呼ばれる生物は存在しなかった。彼の生まれた世界には当然昆虫は存在したが、久しぶりに見た事によるショックよりも、寧ろその大きさと数が問題だった。

「一匹一匹が人間並みって」

彼は啞然としながらその大きな蟻の山を見上げた。何匹いるかなどという疑問は確認した時点で頭の中からは消去し、どうすれば気がつかれないままここから逃げられるだろうか、という思いだけが彼の頭を支配していた。

「気付くなよ、気付くなよ」

じわじわと一歩ずつ、着実に後退していく彼にまだ蟻の大群は気がついてはいない。

「よし、これなら」

そう彼が油断した瞬間だった、何かが落ちる音がして、彼は固まった。ふと下を見ると、持っていた靴から歯ブラシが一本、床に落ちていた。コンクリートの地面にプラスチックが当たる音は当たり前面に響き、蟻の大群は一斉にその視線を恭介に向けた。

「あ、あはっはははは」

乾いた笑い声を上げる彼に、蟻達は優しく微笑み返してくれる、訳も無かった。

一斉に山が崩れ、彼の方に行軍してくる蟻の大群。

「ちくしょう、こうなったら」

と、彼はすぐにこの事態に対抗すべく唱えた。

「ヒューリク」

つまり、逃げるが勝ちということだった。

恭介が何とか蟻を振り切り、自身の整理整頓能力の無さを嘆いていた頃、セイバーもこの無機質な世界に到着していた。

「やけに静かだな」

彼女以外、音を発する物はどこにもいない。念のため辺りへの警戒を強めながら彼女はゆつくりと足を踏み出す。何も無い空間を抜けた先に、彼女はようやく一つの大きな建造物を見つけた。

扉を開けると中は無人で、何枚かの書類が床に落ちていた。拾い上げてみると、何かの計算式がずらずらと書き綴られている。他には散乱した酒瓶や、用途不明の機械が数台。

恐らく受付か何かだったろうと思われるカウンターの脇を抜け、奥の部屋へと向かう。

「何だ？」

セイバーは思わず鼻を摘んだ。何かが腐ったような異臭が室内には充満していた。部屋は暗く中が良く見えないため、持参して来たライトを付け、そこで彼女は息を飲んだ。

「これは」

試験管が数百本、いや数千本と並んでいる中に、小さな何かが浮いているのを彼女は見つけた。

「緑色の液体に、何か小さな」

そこまで言って彼女はもう言葉を発するのを止めた。この小さな何かの正体は一目で知れた。それに加えて、誰かの気配を入り口から感じたからだ。

セイバーは入り口の扉の影に隠れ、剣をいつでも抜けるよう構える。異様な緊張感の中、動いたのは相手の方だった。

「どなたかな？」

聞こえてきたのは男の声。若いとも老いているとも取れる不審な声に、彼女は徐々に力を溜めていく。

「いるのなら、死んでもらおうか」

軽い金属音がした後何かが部屋に投げ入れられた。彼女がそれを確認した瞬間、手榴弾は爆発した。

「ん？」

蟻が追ってこないことに安心して一息ついていた恭介はまたもや

地面が揺れたのを確認した。また蟻かと一瞬緊張の面持ちになるが、その気配は今回は無い。

「あっちの方か」

恭介はぶらぶらと音がした方向に進み始めた。音は遠かったが、歩いててもそう時間がかかるとは思わなかった。

「早く何か起きねえかなあ」

そんなお気楽な考えの下、彼は進んで行った先で驚くべき物を見る事になる。

「何だよこれは！」

彼の目に入ってきたのは倒壊した建物だった。原型をそれなりに留めてはいたが、特に入り口部分の崩壊がひどく、中には入れそうも無い。

「他に人もいないし」

外れだろうかと、と恭介が内心溜息をついた時、後ろを何かが通り過ぎたような気がした。

「え？」

慌てて振り向くと、光の竜がこちらに向かってきていた。

「ひゅ、ヒューリク！」

ギリギリで回避したそれは建物に当たり、ただでさえ崩壊していた建造物をただの塊へと変えていく。

「紫電」

凄まじい早さで現れたセイバーが幾千もの矢を放つが、たった今彼の後ろを通り過ぎた何かはそれを簡単に交わしていく。

「下がっている」

「は、はい」

訳も分からず恭介は身近にあった岩の陰に滑り込んだ。今の自分の実力では太刀打ちできないことはすぐに分かった。

「ライトニング」

彼女は立て続けに竜を放っていく。僅か数十秒間の攻防の後、その何者かはセイバーとある程度の距離を保ったまま動きを止め、こ

ちらにその姿を現した。

「おやおや、中々強い」

「何者だ」

中年の男性だった。愉快そうに目を細めているが、内心が全く読め無いタイプ、とセイバーは判断した。眼鏡の位置を直し、白衣を整えた彼はゆつくりとまずお辞儀をし、自らの正体を告げた。

「私の名前はガルダ・Ｌ・イエルズと申します。『息子』が大変お世話になっている様で。まあ、私も少しばかり苛められちゃいましたけどね」

「何？」

「マジかよ？」

怒涛の展開に恭介は頭がパンクしていた、ルシファに言われるがまま来た未知の世界で、何故か戦っているセイバーとルシファの父と名乗る人物、状況把握すら彼は満足できていなかった。

「その父とやらが、何故こんな所にいる？」

剣先を向けられた彼は少し驚いたように眼を見開いた後、大仰に手を広げ嘆いて見せた。

「嫌ですねえ、折角ご挨拶に来たのに」

「目的は？ ルシファは一体なんなんだ」

そんな彼の動作の全てを無視してセイバーは矢継ぎ早に質問をぶつけていく。

「気になりますか？ あんなの放っておいても害は無いでしょうに」

「自分の子供だろう？」

ルシファをあんなの、と呼んだ男に先ほどより遥かに大きな嫌悪感を抱いたセイバーは詰問を続ける。何か不審な動きをすればすぐにでも切りかかる準備はできていた。

「そうとも言えるしそうで無いとも言えますね」

「どういう意味だ？」

「分かりますよ、いずれ。もう物語は始まっているんですから」

「物語？」

どこまでも答えをはぐらかす彼にセイバーは強攻策を頭の中で練りはじめていた。素直に答えないなら捕まえて後でじっくり吐かせたほうが手っ取り早い。

「ええ、とびつきりのスペクタクルを用意してお待ちしていますよ」「貴様はここで捕らえる。色々と聞きたい事が多すぎるからな」

セイバーの気迫を前にして余裕を見せ続ける彼にセイバーは飛び掛るタイミングを計る。先ほどの戦闘で彼の動きは確認している。全力で追えば追いつけない相手ではなかった。

「直に分かりますよ。全て」

その瞬間、両者が動いた。

「ライトニング」

セイバーが剣を振るい、光に竜が彼に襲い掛かる。が、同時に彼も蟻の大群をどこからか呼び出し、盾にする。

「界雷！」

それを見て取ったセイバーは爆発させ、彼の視界を奪う。この短時間なら世界移動をする暇は無く、おまけに彼の位置はまだ変わっていない。彼女は目の前の邪魔な大群を消すべく剣を構え、唱えた。

「タケミカヅチ」

一閃、それだけで蟻の大群は爆散していく。

「爆発した!？」

恭介が驚愕の声で叫ぶ。彼が知っている蟻は切っただけでは爆発しないはずだった。

「目くらましか!」

セイバーはすぐに煙立ち込める中飛び込んで行くが、もう彼の姿は後も形も残ってはいなかった。

「逃がしたか」

セイバーが苦々しく吐き捨てた。恭介も岩陰から身を乗り出し、安全である事を確認して、セイバーの下に駆け寄る。

「あの、これは一体」

「分らん。すぐに調査班を編成して調べなければ。手遅れになる

前に」

聞きたい事は山ほどあったが、今は恭介はその言葉で納得していた。

「物語は既に始まっている、か」

どんな物語が始まっているのか、そして、自分はその中でどう歩むべきなのか。

「強くなりたい」

もう大切な人を失わないためにも。彼は強く願った。

本部と世界を同じくする空間のまた別の場所で、彼らは話し合っていた。暗闇の中、誰が誰とも分からぬ部屋の中で、十人程の影がゆっくりと言葉を発していく。

「順調ですかな？」

「そのようすな」

「それは結構」

「あの件は？」

「大丈夫でしょう」

「やっと始められるのか」

「ルシファは期待通り働いてくれるでしょうか？」

「別に奴などどうなるうと知った事では無い、今となってはあれはただの余興にしか過ぎん」

「ふむ、ならばもう用は無いですかな」

「我らには翼さえあればそれでよい」

「そうですな」

「そつだな」

「血圧正常、脈拍も異無し」

「後どの位だ？」

「もう間もなくです」

LIGHTSテリトリー内奥深く、アリアは上司に今の状況を記

した資料を渡し、返答の代わりとする。ざつと目を通したその男は満足げな顔をしてアリア達研究員全員に告げる。

「間もなくだ。全ての始まりは」

アリアは喜びに震えていた。長かった苦勞がようやく報われる。

もうあのような失敗も起こる事は無いし、人々が怯えて暮らす事ももう無くなる。

「はい」

研究員一同は起立した態勢で敬礼する。

そんな彼らを見ている視線が一つ、誰も気付かないままゆつくりと動き、笑った。

大きな水槽の中に入れられている赤子と、その隣の水槽に入れられている二歳ほどの幼児。彼らが世界を動かし始めるのは、もうすぐ間もなくの事になる。

最終話 始まりの終わり（後書き）

WORLD OF WORLDS ～REBIRTH～へと続きま
す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643f/>

WORLD OF WORLDS

2010年10月8日13時12分発行